

# 甲南英文学

No. 19  2004

創立 20 周年記念特集号

甲南英文学会



## 編集委員

(五十音順、\*印は編集委員長)

大森義彦 西條隆雄 田中紀子 \*中島信夫 福田稔 横山三鶴

## 目次

### シンポジウム <表象としての人種>

人種と表象を問う：

甲南英文学会創立二〇周年記念シンポジウム特集号によせて…井野瀬久美恵 1

ヴィクトリア朝のユダヤ人群像

——『パンチ』における表象を中心に——…………… 松村 昌家 9

蛇の表象性——白い文明と新大陸…………… 青山 義孝 33

<ペンタゴン>とアメリカ人の表象…………… 入子 文子 67

### 研究論文

『荒涼館』——デッドロック夫人の逃避と死の意味——…… 大森 幸享 87

Henry James の作品における〈退場〉する女性と読者の評価

——“The Liar”を中心として——…………… 中井 誠一 97

最小領域による裸名詞句副詞の認可について…………… 根之木 朋貴 107



## シンポジウム <表象としての人種>

人種と表象を問う：

甲南英文学会創立二〇周年記念シンポジウム特集号によせて

井野瀬 久美恵

「地上の征服は、たいていの場合、わたしたちとは肌の色が違ったり、わたしたちよりは少し鼻の平たい人びとからそれを奪い取ることを意味しており、よくよく考えると、あまり気持ちのよいものではない。それを埋め合わせてくれるのは理念だけだ。それを背後から支える理念。感傷的なみせかけではなく、一つの理念(idea)。その理念への私心のない信奉——うやうやしくおしたてまつり、犠牲を捧げることのできるようなもの」

(ジョゼフ・コンラッド『闇の奥』一八九九)

### 一、 問題の所在——記念シンポジウムで「人種」を問う背景

二〇〇三年七月五日、甲南英文学会は創立二〇周年を記念する講演、ならびにシンポジウムをおこなった。当日のプログラムは以下の通りである。

講演 鷺田清一氏（大阪大学大学院教授）「人を分けるということ」

シンポジウム 「表象としての人種」

報告者 松村 昌家（大手前大学） 『『パンチ』のユダヤ人群像』  
青山 義孝（甲南大学） 『蛇の表象性—白い文明と新大陸』  
入子 文子（関西大学） 『ホーソーンと人種』

コメンテーター 鷺田 清一（大阪大学大学院）

問題提起・司会進行 井野瀬 久美恵（甲南大学）

ここにその報告をまとめるにあたり、記念シンポジウムに企画段階から関与し、当日司会として問題提起と全体の構成・進行を担った者として、なぜ創立二〇周年を記念する講演とシンポジウムで「人種」なのか、その意味を再考することからはじめたい。

創立二〇周年を記念して、一般公開の講演会とシンポジウムを開催するという

企画がもちあがったのは、今から三年近く前のことだったと記憶している。最初の役員会では、さほど厳密ではないものの、英米文学や英語学の専門家たち（そして私のように、帝国を展望するイギリスの歴史・文化をフィールドとする者も含めて）が共通して関心をもち、議論できるテーマを選んでどうかという提案がなされ、その後、具体的なテーマの模索が続けられた。英米文学や英語学の特定領域、たとえばある作家や何がしかの文学作品に偏らず、それぞれの専門用語を持ち出さずに、会員から（そしてできれば一般の聴衆からも）幅広い興味を喚起できるテーマとは何なのか。この“至上命題”こそ、今回の企画に私が——すなわち、会員の大半が専門として口にする文学や語学ではない領域を専門とする私が、深く関わる大きな理由となったといえる。

実は、企画がもちあがった当初から、私の脳裏には「人種 (race)」、そして「人種主義 (racism)」の問題があった。「人種」をめぐる問題は、一九八〇年代半ば以降、私が専門とするイギリス近代史、大英帝国史の領域ではもちろん、ポストコロニアリズムやカルチュラル・スタディーズ、ジェンダー・スタディーズなどの学際的な動きとあいまって、文学、美学、人類学、社会学、哲学など、広く人文学において新たな関心を喚起していた。その意味で、専門を異にする甲南英文学会の会員たちが共有できる問題意識、という条件はじゅうぶん満たされるだろう。

もちろん、二一世紀初頭の現在、人種に注目する理由はそれだけではない。

かつて（いや、ごく最近まで、というべきだろうか）、「人種」は「生物学的な定義」とされ、「社会的、文化的な概念」である「民族」と明確に異なるものと理解され、前者は生物学者に、後者は人文学の各領域、あるいは国際政治学などの専門家に託されてきた。しかしながら、今では、生物学的には人種間にほとんど差異がないことがあきらかにされるとともに、生来の身体的、形質的な特徴であるかのごとく人種を想定する本質主義もまた強く批判されて、人種とは社会的な構築物であるという認識が定着しつつある。にもかかわらず、さまざまな事件や出来事の説明に「人種」に基づく解釈が顔を出し、それがリアルなものとして受け入れられていることもまた、ひとつの事実であろう。たとえば、ヨーロッパの人種概念を通じて現地の人びとが「ツチ」と「フツ」に分類され、フツにたいするツチの優位が主張されたこと、この人種概念を現地の人びとが受け入れたことが、一九九四年、ルワンダでおこった大虐殺の根底にあったことはよく知られている。それ以外にも、「人種」が広くアフリカの経済的停滞を説明するものとして利用され、それが大英帝国の支配を正当化する口実となってきたこと、しかもこの事情が今なおさほど変わっていないことは、イギリス各駅構内のキオスクに平

積みされているベストセラー、「帝国は遺憾だったなどと言うのはもうようそう」<sup>1</sup>と主張するオクスフォード大学教授ニール・ファーガソンの『帝国 (Empire: How Britain Made the World)』(二〇〇一)の人氣が物語って余りあるだろう。

くわえて、記念事業が企画された二〇〇一年秋から〇三年にかけての時期が、アメリカを「帝国」として読み解く世界情勢とあいまって、「人種」の問題がクローズアップされつつあったという事情も、「人種」というテーマの選定に拍車をかけた。二〇〇一年のいわゆる「九・一一」、アメリカ同時多発テロ。その余韻をひきずるアフガニスタンとイラクでの戦争。ここでは、ヨーロッパ概念では捉えきれない複雑な国民、人種(民族)のありようが噴出し、「戦後」の訪れを困難なものにするるとともに、怨嗟の連鎖が続く中東パレスチナと連動しながら、世界を揺るがせていた。対立の隙間に忍び込んだ国際テロ組織、アルカイダの存在、自爆テロという絶望的な抵抗のかたち——これらは、もはや国家対国家という枠組みでは捉えきれない新しい対立の構図を顕在化させる。いったい人間は何をめぐる対立をくり返すのだろうか。対立の「内」と「外」、「われわれ」と「彼ら」を分けるものはいったい何なのか。

記念講演とシンポジウムの中身が練られた時期を通じて、「人を分けるもの」の存在を問いかげずにいられなかったのは私だけではないだろう。

## 二、「人を分ける」ということ

国家同士の対立で説明できない現代の新たな紛争は、これまで、アメリカをはじめとする西洋 vs. 非西洋、あるいは、「九・一一」同時多発テロに際してアメリカ大統領が口にした「聖戦」のような「キリスト教世界 vs. ムスリム世界」という二項対立で説明されることが多いように思われる。ハンチントンの『文明の衝突』がもてはやされたのはそのためだろう。しかしながら、事態は、ハンチントンの線引きのように単純なものではない。二項対立とされるそれぞれの中身が一枚岩でないことは、アフガニスタンやイラクの現実が何よりも雄弁に物語っている。何が誰の憎しみを煽っているのか、誰と誰がなぜ対立しなければならないのか。こうした問題を考えるためにも、「人種」再考は重要である。すべての問題が「人種」と関連しているから、というのではない。人種概念の再考は、味方と敵、「われわれ」と「彼ら」とに人間を分けてしまうボーダーラインについて考える機会を提供してくれるからである。

かつてマルクスとエンゲルスは、ヴィクトリア朝社会における労働者と資本家の対立、すなわち「階級」によって人間が「持てる者」と「持たざる者」と

に分断されている現状に注目し、両者の対立からイギリス社会を読み解く作業を試みた。イギリスのみならず、一九世紀の国民国家内部では、階級は「人間を分ける」という発想のなかで重要なメルクマールだったとあっていいだろう。やがて一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、ヨーロッパ諸国では、そして日本でも、階級という差異（あるいは地域差やジェンダー差など）を超えて「国民」として団結することが求められ、戦争もまた総力戦というかたちをとることになった。そのプロセスで「国民化」がさまざまに展開されたことについては、多くの研究業績がある。その先に、「国民対国民」を超える新しい現代の対立構図が表面化してきたわけだが、その詳細は他の機会に譲ることにして、ここでは、人間のさまざまな対立の構図には「自己」と「他者」との線引きがともなう、という単純な事実注目しておきたい。こうした線引きが対立に正当性を与えることもあれば、逆に、対立自体が線引きの副産物、すなわち、「自己」と「他者」を確定する作業の結果、それまで不鮮明であった対立に明確な輪郭が与えられること、あるいは対立が言語化されることもありうる。「人種」概念に関して看過できない問題はこの点に、すなわち、人間を分け、何らかの名称を与え、さらに序列化を施すことで成立している「人種」という考え方を受容することは、それまでの関係性を大きく変容させることにつながる、という点にある。

では、そもそも、かぎりなく細かに、「自己」と「他者」との間に線引きしようとする作業は人類に共通した特徴なのだろうか。人間とは、どうしても自分と相手とを、「自己」と「他者」とを分けなければ気がすまない生き物なのだろうか。この疑問にたいするひとつの答えを、哲学者、鷲田清一氏による講演に見いだすことができる。「哲学とはもうひとつ別の見方を提起することである」という氏は、「人を分ける」という営みをさまざまな観点から分析してみせた。鷲田氏の講演のポイントを、私自身の関心にひきつけながら、以下紹介することにした。

「自己とは、他者の他者である」——この刺激的な言葉で鷲田氏は講演の口火を切った。自分の顔は他人の顔を見ることでしか近づけない、すなわち、「他者」は自己の鏡なのであると、鷲田氏は独特のユーモアを交えて解きはじめ、「自己」認識は、「他者」を定義し、差異化することから生まれることをまずはあきらかにした。「自己」「われわれ」とは、行動や思考の枠組みを共有できる人たちのことであり、その意味でそれは、「解釈共同体」という「幻想の共同体」を構成する。仮に同じ解釈の枠組みを共有できない場合、「普通でない」というレッテルが貼られ、「われわれの規範に当てはまらない」者として排除される。その人物はもはや「われわれ」ではない。

「解釈共同体」の思考の枠組みは、個人から、家族、国民、民族、人種、さらには人間（人類）へと、いとも易々と拡大することができる。そこで望まれるのは、「互いに互いが分身であるような共同体」であり、「互いが互いの鏡であるような関係性」である。その内部では、「われわれ」という同一性がメンバーの「純化」を希求する。鷺田氏の言葉を借りれば、「一」でありたいという欲望が、自分のある集団と同一の存在として語り直す作業を生むことになる。一九世紀には、国民国家が「一」を希求し、各個人は自らを「国民」として語り直すことが求められた。二〇世紀になると、国家という枠組みを超える「一」の存在、すなわち、ヒューマニティという「一」、人類、人間という「一」が注目されるようになっていく。ここに、「人間」とは、「われわれ」が外部へと拡大された結果として「発見」されたのだと鷺田氏はいう。

種としての人類の単一性、人類はひとつという考え方を共有すること、すなわち、この“一への欲望”に同化すること——そこに、人類の「解放」が準備された。鷺田氏は二〇世紀といったが、一八世紀末のイギリスで展開された奴隷解放運動は、まさしくこの欲望の産物ではなかったか。いずれにしても、「解放」とは、「われわれ」のメンバーになることに他ならない。そこには必然的に、「われわれ」に当てはまらない人びとの存在と「彼ら」の排除がともなうことになる。それゆえに、「排除される他者」と「われわれ」とは、実は表裏一体の関係にあるのだというのが鷺田氏の主張である。

では、「われわれ」のメンバーになること、すなわち人類の「解放」が拡大することは、人種概念というヨーロッパ近代の産物とどのようにつながっているのだろうか。

鷺田氏の話を知っていると、それは、「人類はひとつ、人類は平等」という考え方が生まれた啓蒙主義時代に、「人種」という人を分かつ新たな差異のカテゴリーが生まれ、洗練され、細分化されていった、というだけではなさそうだ。また、「解放」はヨーロッパ帝国主義、植民地主義の拡大とともに広まったという、ファーガソンのいう「恵深き大英帝国の物語」のようなおめでたいものでもけっしてないだろう。もっとも、これについて、鷺田氏は直接的な答えを準備していたわけではない。しかしながら、バリバールを引用しながら「人種主義を生み出すのは反人種主義である」と語った氏の指摘は、多くの聴衆に深い感銘を与えたように思われる。氏はいう。反人種主義（それと関わる反グローバリズム）もまた、「われわれ」を拡大しようとする営みである限り、現代版同化の思想といえるのであり、反・人種主義（anti-racism）とは、実は新・人種主義（neo-racism）に他ならないのである。そのうえで、特異性、すなわち、根源的な単数性（singularity）という思考への転換を示唆して、講演を終えている。

### 三、 表象を問う意味

こうした鷲田氏の哲学的考察を受けて、それと連動するかたちで、引き続き「人種と表象」を共通論題とするシンポジウムがおこなわれた。ここではなぜ表象なのか、を説明しておかねばならないだろう。

くり返すようだが、一八世紀末のヨーロッパを起源とする「人種」という考え方をめぐる問題は、人間という一つのカテゴリーを「形質的な特徴」——それも肌の色や鼻の形というきわめて恣意的な部分への注目——にしたがってその内部を細かに分けること、にのみ存在するのではない。重要なことは、それが、分類したそれぞれに特定の名称を与え、それを序列化していく営みでもあることだ。もちろん、そこには、分類のメルクマールとなる形質を選定し、その意味を決定するのは誰か、という問題もあるだろう。しかしながら、生物としての形質に基づいておこなわれた（とされる）その分類に生物学的な意味がほとんどないことがはっきりしている。今なお、人種概念に何らかのリアルさが認められ、理解の枠組みを提供しているとすれば、今問わねばならないことは、このリアルな感覚の正体ではないだろうか。

もうひとつ、この問題と関連して忘れてならないことは、人種概念を構築し、受容、拡大したヨーロッパ人たちが、肌の色や鼻のかたちで人間を分類、命名、序列化し、劣性人種を優性人種が支配してもいいという考え方を、無条件に受け入れていたわけではなく、むしろ愉快ではないものと、時に罪悪感が伴うものと（意識するとしないとにかかわらず）感じていたことである。そのために、人種概念によって正当化された支配であることに伴うマイナス感情を補完する、いや補完してプラスに転じるイデオロギーが求められたのである。本論考冒頭に引用したジョゼフ・コンラッドの『闇の奥』からの引用はそれを端的に表現したものとして注目される。そこからは、ヨーロッパで構築された人種概念が、当初から、帝国主義という「高尚なイデオロギー」と一体化していたことがわかるだろう。だからこそ、人種概念の何がリアル感を醸し出していたのかを問わねばならないのである。

シンポジウムでは、そのひとつの答えが、人種概念そのものではなく、「表象としての人種」を考えることで得られるのではないかと考えた。

先にも触れたように、人種という概念は、「人類はひとつ」であることが「発見」され、「人類の平等」が叫ばれるようになった一八世紀後半、啓蒙主義時代のヨーロッパで生まれたといわれる。それゆえに、当初からきわめてヨーロッパ的価値観、そしてヨーロッパ的偏見に満ちた考え方といえた。この概念が、ヨーロッパによる非ヨーロッパの「文明化」、すなわち有形、無形の干渉、ひいては

たのである。たとえば、植民地アフリカを語る際には、「アフリカ人は子どもで悪魔」といった「人種」に依存した語りがかならず顔を出す。一八世紀末のイギリスで続々と設立された伝道協会が活動の資金集めのために口にしたのは、やはり、「人類はみな兄弟。アフリカ人もヨーロッパ人のような幸福な生活ができるよう、文明化しなければならない」という“思い込み”であった。こうした語りは、人類という「一」への希求を人種主義の根本に認めた鷺田氏の指摘にも通じるだろう。この“思い込み”が一八世紀末から二〇世紀初頭にかけて、ある種の説得力をもっていったことは、世界各地に宣教師を送り出すに十分、多くの献金が集まったという各伝道協会の年次報告書が伝えてくれる。だからこそ、先の疑問が気になる。なぜわれわれは「人種」に依存した説明に理解を示すのだろうか。われわれが「人種」という差異にこだわりつづけるのはなぜなのか。

人文学の各分野で進められている人種再考の最前線に立ってきたのは文学批評である。エドワード・サイードの『オリエンタリズム』や『文化と帝国主義』を引き合いに出すまでもなく、コロニアルな言説に対して強烈なこだわりをみせたのは、歴史家や人類学者以上に文学者たちであった。ポストコロニアリズム批評の展開は、カルチュラル・スタディーズ、サバルタン・スタディーズといった新しい学問が関心を寄せたこと——声なき人びとの声にいかにして耳を傾けるか——と絡まり、新たな展開を見せてきた。アフリカや西インド、アジアなど、かつて植民地化された地域出身の作家たちは、自分たちを支配していた人たちの言葉、英語で作品を発表し、いわゆる「古典」とよばれる文学作品のなかに人種の問題を認め、時に告発しながら、文学に新たな読みを提供してきたといえる。

二〇世紀末から二一世紀初頭にかけて進行中のこうした動きのなかであきらかにされたことは、「人種」が語りの問題であるとともに、表象の問題でもあることだ。いやむしろ、人種概念を可視化した「かたち」(すなわち表象)こそが、生物学的にその根拠を否定されて後もなお、人種という人を分ける考え方に何らかの説得性、あるいは意味を与えているのではないだろうか。言葉による表現と視覚的な表象とは、表象を読み解き、分析するプロセスそのもののなかで人種主義の言語を使用し、それによって人種が再生産されてきたという意味で、互いに共犯関係にあるといえるかもしれない。表象を言語で読み解くという作業自体に、人種をめぐるステレオタイプが、そして人種に関する価値観や偏見が、層を成してからみついているのである。それに何より、文学は、社会的に構築された人種という考え方、そしてその「かたち」を、作品をつうじてポピュラーなものにしてきたメディアでもあった。

シンポジウムに際して、あらかじめ三人の報告者には、つぎの問題について多

シンポジウムに際して、あらかじめ三人の報告者には、つぎの問題について多少なりとも言及してほしいと依頼させていただいた。あたかも「生来的、生物学的」に決められ、人間にラベリングして階層的に秩序づけ、体系化した「人種」という概念が身にまとう（なんらかの）視覚的な装い、すなわち表象は、具体的にどのように読み解くことができるのか。それはどのように構築され、どうやって人びとの間に広まったのか。なぜ他にもない、その表象が、インパクトを持ちえたのか。逆に、そうした表象を許した当時の社会、時代は、「人種と表象」を考えることでどう読み直されていくのだろうか。

シンポジウムにおいて、それぞれが重い意味をもつこれらの問いかけになんらかの答えが与えられたというわけではけっしてないだろう。たとえば、人種とジェンダーとはどのように絡まっていたのかという問題は、質疑応答でこそ触れることができたものの、今後さらに議論を深めねばならない課題のひとつである。しかしながら、それでも、鷲田氏の講演との合わせ鏡で「人種と表象」の問題を考えることから、この問題について新たな見方や見通しが与えられたこともたしかであろう。たとえば、本特集に収録された松村論文ではユダヤ人が、青山論文ではインディオや黒人が、それぞれ、イギリスとアメリカの「内なる他者」として登場するが、「自己」が「他者の他者」とであるという鷲田氏の指摘を考えあわせるならば、これら「内なる他者」の再考は、「自己」を解体する作業にほかならないのである。

当日の質疑応答では、会員である英米文学や英語学の専門家はもちろん、会員以外からも、文学や語学、美学や人類学、歴史学と絡まる貴重な意見をいくつかいただき、シンポジウムを充実したものにすることができた。と同時に、人種の問題を考える現代的意義を再認識できたと自負している。この場を借りて、講演とシンポジウムに足を運んでくださった多くの方々に心より御礼申し上げたい。

#### 注

- 1 Niall Ferguson, 'Let's stop saying Sorry for the Empire', *BBC History Magazine*, vol.4, No.2, Feb. 2003, pp.34-36.

# ヴィクトリア朝のユダヤ人群像 ——『パンチ』における表象を中心に——

松村昌家

## 1. ユダヤ人フェイギン

ヴィクトリア朝文学の世界にユダヤ人として描かれて不朽の名をとどめている人物をあげるとすれば、まずフェイギンの名が浮かんでくるであろう。

フェイギンはチャールズ・ディケンズの『オリヴァー・トゥイスト』(1838)に、悪の世界を支配する「<sup>プリンス・オブ・ダークネス</sup>暗黒界の君主」的人物として登場し、作品全体の緊張感を支える重要な役割を演じている。腕っぷしの強い、暴力の固まりのようなビル・サイクスでさえ、彼の前では思わずひるんでしまうほどである。まるで悪魔のように、<sup>あらが</sup>抗いがたい恐ろしさをそなえた老人なのである。

事実、ディケンズが悪魔のイメージを念頭においてフェイギンを描いたことは、例えばエドウィン・ピューやローリアト・レイン(二世)などによって、早くから指摘されているとおりだ。彼は、皺だらけの陰悪な人相の顔と、もつれた赤ひげを垂らした老ユダヤ人として最初に私たちの前に姿を現わすが、この赤ひげが一つの象徴的な意味をもっていることに注目しよう。モンタギュー・フランク・モダーの『イギリス文学におけるユダヤ人』(1944)にも述べられているように、赤ひげは、ユダヤ人の特徴として描かれるようになる前に、中世の舞台で、悪魔がつける一つの小道具となっていたのである。<sup>1</sup>

そして、その点では、ディケンズが彼を「老紳士」あるいは「陽気な老紳士」と名づけているのにも注意を向ける必要がある。シェイクスピアの『リア王』にあるように、「老紳士」は、先にあげた「暗黒界の君主」と同じく悪魔を意味する婉曲語であったし、エドウィン・ピューによれば、そのユーフェミズム(婉曲語法)は19世紀をすぎて20世紀に入ってから用いられていたということである。

『オリヴァー・トゥイスト』第8章におけるフェイギン登場の場面の描写でもう一つ見落としてはならないのは、干し物掛けにたくさんの絹のハンカチが掛けられており、彼がそれに少なからぬ注意を払っている様子が描かれていることである。これらの絹のハンカチに払われる彼の注意が何を意味するかは、次に夢うつつの状態のオリヴァー・トゥイストの前に展開される驚くべき光景によって、しだいに明らかになる。つまりフェイギンは隠してあった秘密の小箱から、何個

もの金時計や指輪、ブレスレットなど、いろいろな宝石・貴金属類を取り出し、満面に喜色を浮かべながら熱心に見入るのである。

この場面はきわめて印象深い。フェイギンが住んでいるのは、サフロン・ヒルの路地の奥、セント・ジャイルズと並んで、「ルッカリー」（みやまがらすの群れ）の異名をもつ貧民長屋の一軒だ。むさ苦しいことこのうえない巢窟の中で、目もくらまなばかりのこれらの宝石・貴金属の輝きは、まさに幻想的なまでに異様である。が、これらの品々はすべて盗品であることが、フェイギンの独り言を通じて明らかにされるのである。干し物掛けに掛かっている絹のハンカチも、もちろん盗品——手下の少年<sup>トウモ</sup>掏摸団が掏ってきたものである。ディケンズは、悪魔の狡知と陰険さをもって盗品<sup>トウモ</sup>故買を生業とする一方で、少年掏摸を育成し、自己の利害に徹した極悪非道の人間として、フェイギンという人物を作り出しているのである。

このことが、『オリヴァー・ツイスト』が刊行されてから25年のちに、ちょっとした波紋を引き起こすことになる。

1863年6月、ディケンズは、彼が住んでいたタヴィストック・ハウスの借家権を譲り渡したユダヤ人事務弁護士J・P・デイヴィスの夫人イライザから、22日付の一通の手紙を受け取った。イライザ・デイヴィスがディケンズ宛の手紙を書いた直接の動機は、被抑圧民族救済に尽力したある女性活動家を顕彰するための募金を依頼することであったが、そこには殺し文句とも言えそうな、次のような文章が添えられていた。

広い心をもち、作品を通じて抑圧を受けているイギリス人のために雄弁に、そして高潔に訴えつづけているチャールズ・ディケンズが、[・・・] 軽蔑の対象となっているヘブライ民族に対し、悪意と偏見を煽るようなことをなさったと言われております。[・・・]

フェイギンについては、一つの偏った見方しか成り立たないのだと、私は思います。でも、チャールズ・ディケンズは、生きておられる間に作者として、分散しているとはいえ、一つにつながっている民族に及ぼした重大な間違いに関して、弁明ないしは償いをしていただけるものと存じます。

小説家としてのディケンズの困惑が想像できるような文面だが、彼は、作家という立場を離れて、デイヴィス夫人の言い分にも十分に耳を傾ける度量と現実感覚をもった人間であった。1864年5月から65年11月にかけて分冊月刊された『共通の友』には、ライアという善良で高潔な気質の老ユダヤ人を登場させ、デイヴ

イス夫人宛の手紙には、「(心情的にはいつもそうであったように) ユダヤ人たちは最も良き友でありたい」(1864年11月16日付)ことを伝えて、彼女の苦言に応えているのである。

しかし、だからといって、ディケンズがフェイギンを描いたことに対して後悔したり謝罪したりしたと思うのは、間違いである。彼はデイヴィス夫人からの第一信を受け取ったあと、1863年7月10日付でそれに対する返信を書いた中で、彼の創作に関してきわめて重要なことを述べている。『オリヴァー・トゥイスト』のフェイギンがユダヤ人として描かれているのは、ほかでもありません。不幸にして、その物語と関係のある時代にあつては、あの種の犯罪者はほとんど例外なくユダヤ人であつたという事実があつたからです。

ここに言う「あの種の犯罪者」(that class of criminal) が具体的に何を指すのか、この手紙には述べられていないが、基本的には盗みと盗品の故買を意味していることは間違いない。そしてそのような犯罪は、ロンドンにおけるユダヤ人の生活が歴史的に古着商と結びついていたということと密接な関係がある。

## 2. 〈オー・クロ!〉とスロップ・トレード

ロンドンのユダヤ人による古着商は、イースト・エンドのペティコート・レインを拠点としてはじまった。それがいつの頃からはじまったのかは定かでないが、18世紀初頭にはすでに、ロンドンの街々にユダヤ人古着商人たちの「オー・クロ!」(“O' Clo!”= Old Clothes!)という単調な叫び声が聞こえていたようである。おそらくはユダヤ人に対する反感や偏見とも関わることなので、彼ら古着商人の独特のスタイルについてもふれておく必要がある。

もちろん品物を入れる大きな袋は不可欠だが、特に際立ったのは、裾のだぶついたフロックコートと頭に二重または三重に重ねた帽子と手にもった一個の帽子、そして頭に乘せた帽子の下から肩まで垂れさがった毛髪と長いひげであつた(図1)。この格好は、その異様さゆえに、長い間にわたって一種の固定観念と化し、あとから述べるように、風刺画専門の週刊誌『パンチ』などではユダヤ人そのものの表象として、一つのステレオタイプを形づくるようになる。

もともと根強い反感があつたところへ、怪しげな格好のユダヤ人古着商人がロンドンの街を隈なく歩きまわるようになった。ヘンリー・メイヒューの『ロンドンの労働とロンドンの貧民』第2巻「街頭のユダヤ人」の項によると、あるときにはその数は一千人にものぼつたという。彼らに対する偏見が増幅された原因を、このような状況を通じて想像することができるのである。

ユダヤ人に対する偏見の種類はさまざまだが、特に古着商に関する偏見が生じた背景には二つの主因が考えられる。一つは、彼らがこのほか金銭に対する執着心が強かったこと。これはユダヤ商人にとって伝統的なことで、シェイクスピアの『ヴェニスの商人』のモチーフにもなった。そして第二は、「古着商人の中には、盗品であることがはっきり分かるような値段で品物を買う者もいた」ということである。

この引用は、ヘンリー・メイヒューが『モーニング・クロニクル』に寄せた第14信（1849年12月4日付）によるものだが、ついでに、これにつづく一文も訳出しておこう。「しかしながら、[品物の出所に関して] 問答はいつさいしないということ、品物をできるだけ安く買い取るということが、彼らの規則であった」。

冷静な記者としてのメイヒューのこうした客観的な書き方を、例えばロバート・サウジーが『イギリス通信』（1807年）第63信<sup>2</sup>でユダヤ人について書いている、次のような文章と比較してみよう。「この[下層の]ユダヤ人たちの表向きの主な仕事は古着商であるが、同時に盗品の故買も行なっている。またにせ金づくりもまれではない」。

文章の上でのニュアンスの違いは、当然、ユダヤ人に対する考え方や感情のどちらの違いに通ずるであろう。考え方や感情のどちら方は、さらに想像力の働きとも関わってくるはずである。そこで今度は、もう一度ディケンズのほうへ目を向けて、『ボズのスケッチ集』の「情景編」第6章「モンマス街の冥想」におけるユダヤ人古着商に対する彼の感情の表わし方を見てみることにしよう。

「モンマス街の冥想」は、若き日のディケンズが書いたロンドンの古着商店街ファンタジーともいべき名小品だが、その冒頭で彼は、モンマス街に対していだけ好感とは対照的に、ホリーウェルのユダヤ人古着商店街に対しては、あからさまに嫌悪感をぶちまけている。「ホリーウェル街は嫌いだ。赤い髪と赤い頬ひげのユダヤ人どもが、誰かれなくひどくよごれた家の中へ引っぱり込んで、無理やりに古着の中へ押し込むのを見ると、本当に嫌悪を催す」。

ディケンズの想像力の奥深さを考えれば、このようなユダヤ人古着商に対する徹底した嫌悪感がフェイギンという人物の創造につながったことは、十分に考えられる。エドウィン・ピューが、『チャールズ・ディケンズの原型』（1913）において、アイキー・ソロモンズという名だたるユダヤ人故買人がフェイギンのモデルになったという説を立てて以来、いくつかの賛否両論がつづいたが、もっと基本的には、ユダヤ人古着商人に対して、彼の嫌悪感は、彼の想像力の中で悪魔的なイメージを作り出していたのだと考えるべきであろう。あたかもP・B・シェリーが、『ピーターベル三世』において、イースト・エンド、ウ

オッピングの「スロップ・マーチャント」を、悪魔と重ね合わせているのと同じである。<sup>3</sup>

「スロップ・マーチャント」というのは、安物既製服（この場合は主として船員用）製造業者のことで、以下述べるように、イースト・エンドにおけるこの業界を牛耳っているのは、ほとんどが古着商あがりのユダヤ人であった。シェリーがユダヤ人スロップ・マーチャントに悪魔のイメージを見たとするならば、それはちょうどディケンズが、フェイギンを「老紳士」（＝「暗黒界の君主」＝悪魔）として描き出しているのと同じ共通していることになるのである。

先に述べたように、いつときは1,000人にも及んだロンドンのユダヤ人古着商人が、19世紀半ば頃までには約半数にまで減ったというのは、彼らの間における商売のシステムが変わったからである。

1830年代における鉄道時代の到来とともにじまった流通機構の変革に伴い、ユダヤ人社会でも、新しく活気をおびはじめた都市産業の市場に参入する傾向が高まった。そして新しく商人や製造業者のコミュニティが形成されると同時に、呼び売り行商人や雑貨商人たちは、商店経営や製造業、商取引に転化する方向へ目を向けるようになったのである。といっても、もちろん無限の可能性があったのではない。彼らが進出できる製造・販売のセクターは、衣類、履物、果物中心の食品、宝石と時計製造、家具、タバコ（特に葉巻）といった業種に限られていた。

そういった中で、ユダヤ人実業家の創設になる、とびきり大規模な衣服仕立業者が、ロンドンとマンチェスターを拠点として誕生した。モーゼズ父子商会とハイヤム兄弟商会で、ともに1832年に開業、古着に代わるものとして既製服を安い値段で一般労働者に供給することを狙った企業であった。すなわち先に述べた「スロップ」産業のはじまりだが、以後彼らは、労働者に対して極力賃金を抑え、暴利を貪る悪徳商人として世間の注目を集めることになる。そして既製服仕立業は苦汗労働制度スロップ・トレードを代表し、両者は同義語とみなされるようになるのである。

### 3. モーゼズ父子商会

ロンドンに本拠を構えたモーゼズ父子商会は、創業10年ほどの間に指折りの大企業へと発展を遂げた。彼らが出した広告文によって、その規模の拡大ぶりをうかがうことにしよう。

《多数》の方々へ

E・モーゼズ父子商会より

「多数」の方々へ「ほんの」一言申し上げる、

その第一は、「多数」の方々へ知らせ事、

いまやわれら父子の新大企業は

「多数」の商店をもつに至りし上に、

「多数」の支店を広げたり、いわく——

オールドゲイトは 83、84、86 番地に、

そしてまた

ミノリーズの 154、155、157 番地。

これら数々の店舗の商うは

仕立て、服地、靴下・下着、装身具、

加えて帽子の製造

文中のオールドゲイトもミノリーズとともに東ロンドンの地名だ。ユダヤ人既製服仕立業がイースト・エンドの労働を代表するようになるゆえんだが、この広告文に関して注目すべき点は、それがほかならぬディケンズの『ドンビー父子』の月刊分冊本第1号の裏表紙一面であることだ。そしてその後『ドンビー父子』第3号からは最後まで——すなわち 1846 年 12 月から 48 年 4 月までの 17 ヶ月間、毎号裏表紙一面に、さまざまな意匠を凝らしたモーゼズ父子商会の広告文が継続して掲載された。「ドンビー父子商会」を主題にした小説の月刊分冊本の裏表紙にモーゼズ父子商会の広告の連載——その意表をついた発想と抜け目のなさもさることながら、『オリヴァー・トゥイスト』のフェイギンを通じてのディケンズとユダヤ人との関係を思うと、いかにもしたたかな挑戦的行為とも思えて興味深い。またディケンズの『ドンビー父子』の月刊分冊には、平均約 3 万人の読者がついてたということからみて、その広告効果は抜群であったはずだ。まさに『多数』の方々」に彼らは、モーゼズ父子商会の名を売り込んでいたのである。

モーゼズ父子商会が着々と羽振りをきかせ始めた頃、風刺漫画をもって知られる週刊誌『パンチ』が、彼らをターゲットとしてとらへ、ユダヤ人表象が活気づくことになる。その動きの主役を果たしたのが、ヴィクトリア朝時の天才的な風刺画家として脚光を浴びたジョン・リーチ (1817-64) である。まず『パンチ』1844 年 6 月 22 日号所載の“Cartoon for the Merchant Tailors” (洋服商同業組合のための下絵) (図 2) を見ていただきたい。

標題の「洋服商同業組合」は、ロンドン・シティの同業組合 (City Livery

Companies) のなかでも優先順 6 または 7 位 (毛皮商同業組合と隔年入替) を占める、14 世紀以来の伝統を誇る同業組合だ。そんな由緒ある組織を表象するカートゥーン (下絵と風刺画の二つの意味がある) として、下のキャプションにあるように、「ヤング・イングランドに装いをつけるモーゼズ父子」が描かれているのである。

「ヤング・イングランド」というのは、1843 年に『コニングズビー』(詩の 1 行目参照) という小説を書き、ユダヤ系政治家・小説家として知られるベンジャミン・ディズレイリー (1804-81) を中心として形成されたトーリー党小グループ。青年イングランド派と呼ばれる。では試みに、つづく 14 行詩を訳してみることにしよう。

コニングズビーの小説には誰が読んでも  
 この世の誇りはモーゼズの子孫と書いてある。  
 モーゼズありて銀行家あり——兵士、船のり、  
 政治家——そしてまた服の仕立屋も。  
 モーゼありて黄金あり——これは無価値で空ろな代物、  
 モーゼありてかの徒輩——あとをつける執行吏あり。  
 新世代——自らをヤング・イングランドと  
 名乗ってしゃしゃり出でたるか一派、  
 ヴェストは雪の白さにまされども  
 結局彼らもオールド・クロウの種族にて！  
 ならばいずこでヤング・イングランドは  
 身にまとうべき衣服を求むべき——  
 羽振をきかせどその実は、人の愚と  
 モーゼズの狡さ見え見えの服屋をほかにして！

ディズレイリーを中心として形成されたヤング・イングランドのグループは、政治的・道徳的理念として中世の封建的秩序を理想として掲げていたために、とかく批判にさらされがちであったが、『パンチ』が彼らに対していただいていた敵意は、格別であった。

絵と詩文にあらわれているように、『パンチ』はヤング・イングランドとディズレイリーとを同一視し、その上にモーゼズ父子を重ね合わせることによって、結局彼のユダヤ人性を誇大に表象しているのである。

絵の中に描かれた台の上に立つ小さな客の体に合わせて服を整えるのは、モーゼズの息子であると同時に顔かたちから見てディズレイリーその人。台に立つ客

の白いヴェストは、ヤング・イングランドのリーダーたちのスタイルであり、またポスト・リージェンシー・ダンディズムのスタイルでもあった。『ヴィヴィアン・グレイ』（1827）を通じて知られるように、ディズレイリーがダンディズムにおいても最大級の影響力をもつ人物であったことを思えば、この『パンチ』絵は、まさにディズレイリーが衣裳によってヤング・イングランドをつくり出したことを描いたことを表象したものとして読みとることができるだろう。

しかし、ディズレイリーがユダヤ系の人間であることをもって、彼と衣裳とをモーゼズ父子商会と結びつけるのは、あまりにも強引な理屈というほかはない。『パンチ』絵には、背景として<sup>スターヴ・ウェン</sup>飢<sup>ジョン・ウェン</sup>餓<sup>賞金</sup>で縫いあげた服の包みを抱えて、雇主に納めにやってきた貧しい女が描きこまれている。あとから出てくるユダヤ人の既製服仕立業の過酷さを暗示したもので、1843年12月、『パンチ』クリスマス号に掲載されたトマス・フッドの『シャツの歌』や、同じくトマス・フッドの『嘆きの橋』（1844）と関係のあるトピックとして注目しておきたい。

そこで今度は、モーゼズ父子商会に対する偏見をむき出しにしたような風刺画を、一つ選び出してみることにしよう（図3）。ジョン・リーチがモーゼズ父子商会の紋章として描いたもので、1844年11月23日号の『パンチ』に掲載された。一見して分かるように、資本家にのし上がって得意満面のモーゼズ父子と、奴隷のように働かされて貧困のどん底に陥っている苦汁労働者とのコントラストを描いている。頭部が回転式になっているのは、上下の差——すなわち、搾取による上下の落差がますますひどくなる可能性のあることを示唆する。

この絵には「パンチの評言」という見出しのついた説明文が添えられているが、その中で最も注目すべき点は、先にフェイギンとの関連でふれておいたアイキー・ソロモンズが引き合いに出されていることだ。「もしわれわれの記憶に間違いがなければ、アイキー・ソロモンズは名前を頻繁に変えた。モーゼズ父子も、もちろん思いのままにそれができるはずである」。

アイキー・ソロモンズが世に聞こえた盗品故買人であったことは先に述べたとおりだが、その嫌疑で捜索を受けそうになったとき、彼はジョーンズという偽名を使って逃亡を図ったことがあった。『パンチ』の文章はそのことを踏まえて、モーゼズ父子商会もいずれは同じことをやらかすであろうことを皮肉ったものだが、1850年代に、彼らは実際、マースデンズ社に、またハイヤム兄弟商会はハルフォーズ社に、それぞれ名称を変更した。ただし、それは悪事露見とは関係なく、両方とも上級市場へ進出するようになったからである。

ジョン・リーチはこのあと、それこそ一度見たら忘れられないほど、肌寒くなるようなユダヤ人既製服仕立商人による搾取労働の光景を、1845年の『『パンチ』

曆」に描いている(図4)。骸骨すがたの仕立職人集団を監視しながら葉巻タバコを吹かしている資本家風のでっぷりしたユダヤ人が描かれているのである。「本年度のバブル——安物既製服」という見出しのついたキャプションには、次のような文章が添えられている。

服を買うならモーゼズ父子商会のものを。今をときめく仕立商だけあって、その仕立てぶりは有名である。その店で買った商品が何であれ、街の小僧たちでも一目で分かり、「あっ、モーゼズの服だ！」と声をはりあげることによって、その商品の評判に花を添える。もう一つの特典は、服を頻繁に取り換えねばならないので、変化が楽しめることだ。つまりモーゼズの製品は、美しいファッション服同様に、すぐに着られなくなってしまうのである。

『ジョン・リーチ——その生涯と作品』(John Leech: *His Life and Work*, 2 vols., London: Richard Bentley and Son, 1891) を書いたウィリアム・パウエル・フリスも言っているように、既製服仕立業者の中には、ユダヤ人に劣らないくらいに「搾取的」なキリスト教徒もいたはずである。にもかかわらず、ジョン・リーチがことさらにユダヤ人業者に的をしぼってこのような吸血鬼的なあくどさを描いている(vol.2, p.30)のは、その当時における『パンチ』のムードを代表していると言えよう。「ジョン・リーチやギルバート・アボット・ア・ベケットがユダヤ人社会に対していただいていた愉快な偏見は、人情家のサッカーだけでなく、ダグラス・ジェロルドにもある程度共通する特徴であって、疑いもなく当時の一般的感情の表われであった」と、M・H・スピールマンは指摘している(*The History of "Punch,"* London: Cassell & Co., 1895, p. 103, 傍点筆者)。

しかし問題は、「愉快な偏見」の存在そのものではないか。スピールマンは、リーチが描いたようなユダヤ人に対する「憎悪は、実はほんの表面的なことか、あるいは少なくとも、人間よりも習慣<sup>マナー</sup>に向けられたものであった」とつけ加えているが、これもまた語るに落ちる話である。この点を考慮に入れるとしても、ユダヤ人に対する偏見が、カトリック教徒やアイルランド人社会に向けられた偏見と同様に、不条理なものであったことに変わりはないのである。

しかも、話が政治的問題と絡んでくると、「愉快な偏見」ではすまされなくなってくる。例えば、1849年5月12日号の『パンチ』に掲載された「ミセス・ハリスの最後のスキャンダル断片」などは、1848年のフランス二月革命に際して、パリ市街にバリケードを築いた「危険な階級」とユダヤ人とを重ね合わせている

点で、相当に深刻な問題をはらんでいる。

表題に言う「ミセス・ハリス」は、ディケンズの『マーティン・チャズルウィット』(1844年)に登場するアル中の看護婦として有名なミセス・ギャンプの影の対話仲間、『パンチ』は彼女の口を借りて、1848年2月にパリで反乱を起こしたのはユダヤ人だと言わしめているのである。

「愚かにも『自由の旗』と名づけられた『革命旗』の正体は、普段着のポケットからフィールド・レインの住人に渡った、拘りとられたハンカチにほかならないし、『自由の帽子』は結局[・・・]、ロンドンの大通りで、あの有名な『クロ!』を呼ばわりながら商いをするユダヤ人古着商人の「帽子を何重にも重ねて固めたものだったのである」。そして『パンチ』のページには、この「自由の帽子」の図とともに、パリに出現した「ホリーウェル・ストリート流のバリケード」と題する風刺画が描かれているのである。文中にある「フィールド・レイン」は、本章冒頭に述べたフェイギンの巣窟があったサフロン・ヒルの一部をなすロンドンでの指折りの貧民街、そしてホリーウェル・ストリートは、すでに述べたとおり、ユダヤ人の古着商店街として知られるところだ。

1848年のフランス騒乱時にパリに築かれたバリケードをロンドンのユダヤ人古着商店街の古着の列に喩えているのは、連想としては面白いが、『パンチ』のこの記事の日付から見ると、その根底には明らかに政治的な意図が働いていた。ロンドンのユダヤ人群像を、パリ市街でバリケードの主演を演じた「不逞の」下層労働者と重ね合わせることによって、ユダヤ人の政界への進出を牽制しようとする狙いが読みとれるのである。

#### 4. 国会議員への道のり

では、その項におけるユダヤ人の政界への進出の動きとして、具体的にどのようなことがあったのか。この問題について語るための手がかりとして、まず1851年7月26日付の『イラストレイティッド・ロンドン・ニューズ』から「ユダヤ人問題」の一節を引くことにしよう。

下院は過去5回にわたって、英国のユダヤ人が英国の市民権行使の資格を有することを大差をもって認定したが、上院は5回ともこの提案を否決した。ロンドン・シティの有権者は、2回連続してユダヤ人を国会議員として選出、首都自治区グリニッジ選挙区民も一度はこの例に倣ったことがある。にもかかわらず上院は、すべてを無効として退け、過去の実績のみな

らず今後における結果のいかんを問わず、法的には統制権を発動しえない集会において、この件についての意思決定を行なっているのである。すなわち独自の宗教的誓約をもつ者として、「キリスト教徒としての真なる信仰」に基づく宣誓を拒むユダヤ人は、いかなる者といえども、キリスト教徒を代表する議員として指名されることがあってはならないということである。

ここで問題となっているユダヤ人というのは、ライオネル・ネーサン・ド・ロスチャイルド(1808-79)。すなわち、1804年にロンドンに定着して以来、財閥として地歩を固めたネーサン・メイヤー・ロスチャイルドの長男として生まれ、父とともにイギリスにおけるロスチャイルド銀行の経営に携わった人物である。

1847年の総選挙のときに、ロスチャイルドが、ジョン・ラッセルとともにロンドン・シティを代表するホイッグ党の国会議員として選ばれたことから問題ははじまった。国会議員として正式に議席に着くためには、先の新聞記事にもあるように、「キリスト教徒としての真なる信仰に基づいて」宣誓を行なわねばならなかった。ロスチャイルドは、ユダヤ教徒としてこの条件を受け入れなかったため、議席を得ることができなかったのである。

ユダヤ人の議員無資格問題をめぐっては、先の『イラストレイティッド・ロンドン・ニューズ』の記事にも反映されているように、上下院が真っ向から対立していた。1830年以来1850年頃までに、下院は5回にもわたってユダヤ人のために宣誓の方式を変える法案を通過させたが、そのつど上院はこれを否決、同じパターンがくり返されること前後10回目にして、1858年ようやく決着がついた。ロスチャイルドの側から見れば、1847年の初当選以来11年目。その間、補欠選挙を含めて総選挙が行なわれるごとにくり返し当選を果たし、ついに問題の「キリスト教徒としての」宣誓を唱えることなしに、下院議員の席に着くことができるようになった。すでに大物議員として活躍中だったベンジャミン・ディズレイリー、先ほどの『イラストレイティッド・ロンドン・ニューズ』の記事にあったグリニッジ選出の国会議員オールダーマン・サロモンズ(彼らはともにイギリス国籍を有していた)を含めると、3人のユダヤ人が国会に議席を占めることになったのである。

ところが、ここで明確にしておきたいのは、問題の「キリスト教徒としての」宣誓は、しきたりとして存在しているのであって、制定法としてあったのではなかったということである。したがって、時の首相ジョン・ラッセルがもしその気になれば、下院の決議に従って、ロスチャイルドの国会入りを認めることもでき

たはずである。しかしラッセルは、この問題の早期解決を図るために腐心しながらも、宣誓制度に頑なに固執する上院の動きに配慮することを忘れなかった。将来に禍根を残すような強引な押しきりは得策ではないと判断したがゆえに、彼は慎重な態度をとらざるを得なかったのである。

ユダヤ人の国会議員無資格制の早期撤廃を主張しつづけていた『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』は、このような経緯を詳細に報じるとともに、ラッセル内閣の命運にかけても、ロスチャイルドの国会入りを早急に実現させるべきだと、気合いをかけた。なかでも、1850年8月3日付の同紙に掲げられたユダヤ人問題に関する論説は、論調の積極性と具体性から見て、注目に値する。

この論説は、ユダヤ人がすでに参政権をもっており、現にロンドン・シティの有権者が、ロスチャイルドを国会議員に選出していることを重視、もし議員に課せられる宣誓が、立法府の非キリスト教化を防止するための策として行なわれているというのなら、それはもはや形骸化していることを指摘している。その「宣誓制度にもかかわらず、汎神論者や無神論者が国会入りを防止することはできないであろう。[・・・] たまに一人のユダヤ人議員が下院に席を占めたとしても、現状以上に、あるいは神を信じない者や似非キリスト教徒によってすでに生じているより以上に、国会の非キリスト教化の恐れがあるとは、誰一人として思わないであろう」。この実情に照らしても、宣誓制度は廃止されるべきだというのが、『イラストレイティッド・ロンドン・ニュース』の一貫した姿勢であった。

しかし、もともと意地悪な風刺を旗じるしとして掲げているうえに、ユダヤ人に対して辛辣な態度をとってきた『パンチ』は、一向に和らぐ気配を見せていない。当面の問題と関連して、まず1847年4月10日号に載った「ディズレイリー氏の見解による下院風景」を見てみよう（図5）。

一見して分かるように、イギリスの国会がユダヤ人議員によって構成されていることを想定して描かれた1ページ大の風刺画——カートゥーンで、画家はやはりジョン・リーチ——である。重ね帽子と長いあごひげ、際立ったユダヤ鼻、ぼさぼさの頬ひげなどによって特徴づけられているユダヤ人議員たちと、彼らに語りかけるベンジャミン・ディズレイリーが描かれている。見たところではいかにもロスチャイルドの議員問題と関係のありそうな絵だが、ロンドン・シティの選挙区から彼が選出されたのは、これより2ヶ月あとのこと、したがってリーチがこの風刺画を描いたのは、実はまったく別の動機からだったのである。

ディズレイリーが大物政治家であると同時に、小説家としても有名であったことは周知のとおりだが、『コニングズビー』（1844年）、『シビル、または二つの国民』（1845年）につづく彼の三部作最後の作品『タンクレッド、または新十字軍』

がこの年（1847）の3月に出版された。『タンクレッド』は、ユダヤ民族の優越性とその栄光を讃えるために書かれた作品であったと言ってよい。「ディズレイリー氏の見解による下院風景」は、このことと関係があるのだ。

ディズレイリーは、1847年1月に召集された国会で最前列の議席を占める栄光を獲得するほどの出世を遂げたが、政界でのその出世は、彼に向けられた偏見との戦いの過程でもあった。彼が旧約時代のユダヤ民族の栄光を精神的に甦らせようとしたのは、その偏見を乗り越えて、超然たる姿勢を持するためでもあった。そうである以上、当然、宗教的対立の問題を整理してかからないわけにはいかなかったのである。

ディズレイリーの神学的思想を要約するのは容易ではないが、『コニングズビー』以来の基本的な点をあげれば、まずはユダヤ人を原始キリスト教徒として位置づけていること、したがってキリスト教は、ユダヤ教を変革させたものではなく、それを完成させたものだという解釈を打ち出していることだ。そのような観点に立って彼は、キリストがダヴィデ王の末裔のユダヤ人であるという点を、その<sup>ディヴィン・ディ</sup>神性よりも重視しているのである。

『タンクレッド』は、いわばこういったディズレイリーのユダヤ民族観と宗教観の集大成として書かれた作品であった。主人公タンクレッドは、最高の地位を誇るベラモント公爵家の御曹司。国会議員としての前途を嘱望する父親の期待をふり切って中近東に渡り、パレスチナ、エルサレム、シナイ山等の聖地をめぐる中で、彼はさまざまな神秘体験を通じて、右に述べたようなディズレイリーのドクトリンをくり広げる役割を果たすのである。なかでも、タンクレッドと美しい神秘的なユダヤ人女性イーヴァとの間に交わされる宗教と教会に関する問答（第3編第4章）は、その核心的部分を形成していると言えよう。

「わたしたちを迫害するなんて！もしあなた方が口でおっしゃるのを本当に信仰としてもっていらっしゃるのなら、わたしたちユダヤ人の前にひざまずくべきですわ！あなた方は救国の英雄のためには銅像を建てますわね。わたしたちは人類を救いましたのよ。それに対してあなた方は迫害で報いておられるのです。」

というふうに、ディズレイリーは、彼が最も訴えたかったことをイーヴァに言わしめているのである。

しかし、こういった非正統的なドクトリンがすんなり受け入れられるはずはない。『タンクレッド』は小説そのものとしても不評であったが、特にユダヤ人の

優越性を主張したことで、『パンチ』を刺激する結果になった。小説が刊行されてからまもなく、「ユダヤ人のチャンピオン」（1847年4月10日号）という題の辛辣をきわめた批評がその紙面に現れたのである。『パンチ』は『タンクレッド』を読んだ結果として、「ロンドンの街々を行商してまわるイスラエルの子孫」、すなわち古着商のユダヤ人を引き合いに出して、まず彼らの賤しさを槍玉にあげる。そしてディズレイリーが、彼の理念を国会にもち込むことを狙っていると推定して、次のように論を進めるのである。

ディズレイリー氏が、モーゼ系の議会がラグ・フェア（ロンドンの古着街として有名）に誕生するまでは、彼の大使命の目的は達成されないと心に決めてかかっていることは明白だ。[……] ユダヤ人の中には、切れ者も確かにいるし、愛想がよくて有能な人間も大勢いる。しかしディズレイリー氏が、お気に入りの民族に従うことをわれわれに求めるのであれば、まずは彼らの過ちを改めてからにしていきたいのである。

改められるべき「彼らの過ち」としては、安物の衣類、腐った果物、にせ物の宝石等々をごまかして売りつけること、そしてユダヤ人弁護士の常習犯的ないんちき行為、等々があげられている。古着商のほか、限られた選択の方法しかなかったユダヤ人の職業が、いかに彼らに対する偏見の原点となっていたかをよくうかがわせるのである。この風刺文と、先にあげた「ディズレイリー氏の見解による下院風景」とは対応関係にあって、当時におけるユダヤ人問題に関する『パンチ』の記事と絵として印象深く、これらに即して多くのことを読みとることができるのである。

## 5. “A Gentleman.”

興味深いのは、ユダヤ群像から成るこの「下院風景」が『パンチ』に掲載された直後、モーゼズ父子商會が、『ドンビー父子商會』月刊分冊本第8号（1847年5月）の裏表紙一面に33行から成る長い韻文広告を出していることである。題して“A Gentleman.”最初の1部分だけを訳出する。

紳士とは何か？それは最善をつくして  
完全たらんと努力するわれらが人間仲間。  
紳士とは、尊敬すべきこと、

洗練されたもの求むる心をもつ人。  
話し方や教養の決めてとなることにより、  
紳士たる人間は判別できる。  
紳士は上品で、かつ礼儀正しく、  
過ちを多く犯さず、多く善をなす。

原文は弱強5歩格の韻律を整えた、レベルの高い広告文である。上に見るように、ジェントルマンの条件を、あれこれと書きつらねておいて、最後には、モーゼズ父子商会こそエレガントな紳士になるために絶好の場所、「あらゆる品を取りそろえ、必ず紳士に仕立てて」ごらんに入れよう、という勧誘で落ちが着くのである。

しかし、ここでわれわれは、広告文は、一般的な意味での広告とは別に、ある特定の相手に対する戦略的な意図をもってつくられることがあるのを思い出す必要がある。たとえば、「私」の敵役のある男が、秘密の鍵をもっていることが判ったとしよう。「私」はありったけの資本をなげうって鍵屋を開業し、「秘密の鍵」の文字を特筆大書した広告をしかるべき要所要所に貼りつけて、彼が良心の咎めから逃れられないようにするのである。<sup>4</sup>

そこでこの場合、モーゼズ父子が広告を通じてジョン・リーチ流の露骨な偏見に対して応酬する意図があったのだということを、想定してみよう。冒頭の「紳士とは何か？」(What is a gentleman?)は、それこそパンチのきいた問いかけと言わざるを得ない。ユダヤ人といえば、十把一からげに重ね帽子の“Old clo!”で表象する人間を、ジェントルマンと言えるのか？ つづく広告文「紳士とは、尊敬すべきこと、洗練されたものを求むる心をもつ人」という規準に照らしても、ユダヤ人を描く『パンチ』画家は適性を欠く。

そしてモーゼズ父子商会のための広告文起案者の頭の中には、先に示した、1845年の『『パンチ』暦』に描かれたもう一つのユダヤ人像があったはずである(図4参照)。既製服業者としてのモーゼズ父子商会の冷酷な搾取ぶりを描いたジョン・リーチの作品だが、どう見ても「洗練されたものを求むる心をもつ人の絵」とは言い難い。

さらにもう一つ思い出しておきたいことがある。今の“A Gentleman.”という見出しの広告文が、『ドンビー父子』第8号の裏表紙に掲載されるより3ヶ月前の1847年2月、ディケンズの作品と同じく月刊分冊で刊行されていたサッカー一の『虚栄の市』第2号、第6章に、注目すべき挿絵が描かれている(図6)。サッカー一自らが描いたもので、当時ロンドンのプレジャー・ガーデンズとして有

名だったヴォークソールで、ジョージ・オズボーンが一人の男になぐりかかっている図である。

その相手の男がユダヤ人であることは、その鼻の独特の形によって明らかだ。わし鼻は、前掲『パンチ』の「下院風景」絵にもあらわれているように、ヴィクトリア時代におけるユダヤ人表象のステレオタイプとなっていたのである。

この場面でトラブルを起こしているのは、パンチ酒を飲みすぎて酔っぱらったジェントルマンのジョゼフ・セドリーであって、トップハットのユダヤ人は、たまたまその場に居合わせただけである。相手がユダヤ人であることによって、オズボーンの行為は、正当化され、喝采をあげているのだ。

サッカーとジョン・リーチはともに、パブリック・スクールの名門チャーターハウスの同窓生で、『パンチ』仲間でもあった。自他ともにジェントルマンであることを認めるオズボーン君のこのときの行為を頭に入れて、「紳士とは何か？」で始まるモーゼズの広告文を読み直してみよう。モーゼズ父子側からの応酬として、いかに効果的であったかが読みとれるであろう。

サッカーがディケンズに対して強烈なライバル意識をもちながらも、『ドンビー父子』の分冊を欠かさず読んでいたことは、彼の伝記や書簡などによって確認されている。そしてリーチがディケンズととりわけ親密であったことを思えば<sup>5</sup>、彼もまた『ドンビー父子』の分冊本を読んでいて、そしてその裏表紙の広告文を読んでいることは百パーセント間違いない。

では、それこそ品のよい、洗練されたセンスで評判のジョン・リーチが、どうしてあれほどにまで、ユダヤ人に対して辛く当たったのか。原因は、おそらく個人的なものであったようだ。19世紀のイギリスにおいて、ユダヤ人は、シェリフに仕える小役人として税金の取り立てや、<sup>スポンジング・ハウス</sup>債務者拘留所（債務未済で逮捕された者を入獄前に一時収監して債務弁済の猶予を与えた所）の看守役につくことが多かった。先の「洋服同業組合のための下絵」の中で「あとをつける執行吏」は、この役を指している。

1838年、ちょうど21歳になったばかりのリーチは、債務弁済不能のために、ロンドンのニューマン・ストリートにあった拘留所に拘禁され、その名もレヴィ（徴税差し押さえ）というユダヤ人の監視のもとにおかれたことがあった。そのときの屈辱感が鬱積していて、1840年代におけるユダヤ人問題——衣服仕立業のトップに躍り出たモーゼズ父子商会やライオネル・ネーサン・ロスチャイルドの国会進出に関する政治的論争など——に絡んで、それがあのような形で噴出したのである。

## 6. 重ね帽子を蹴とばして

1847年 年半ば、ロスチャイルドの国政舞台への登場によってユダヤ教徒の宣誓問題が表面化してからも、『パンチ』は、常套的な古着商人だけでなく、シャイロックやフェイギンのイメージまで狩り出して、それをテーマにした風刺画を描きつけた。そして政界の要人としてこの問題と深く関わり、それ以降さらに大きな政治的影響力をもつようになるディズレイリーに対する『パンチ』の風刺は、ますます辛辣の度を加えるようになる。顔を映し出すメディアのなかった時代におけるこのようなありさまを想像してみよう。善し悪しにもかかわらず、『パンチ』の図像を通じて、ディズレイリーは国民に最もよく知られた顔となるのである。

1847年12月に開かれた国会で、ラッセルによってユダヤ教徒無資格制廃止についての動議が出されたとき、ディズレイリーがその支持のために全力をつくしたことは言うまでもない。彼はそのときの演説の中で、あらためてキリスト教とユダヤ教徒の緊密な関係を説き、「ユダヤ教を信ずることなくして、キリスト教は存在しえない」という『タンクレッド』以来の独自の論法を展開させた。<sup>7</sup>

この破天荒の議論は国会をすっかり白けさせてしまったと伝えられるが、なかでもこれに対して強く反発したのが、オックスフォード大学選出の議員サー・ロバート・ハリ・イングリシであった。イングリシは、ウルトラ級のプロテスタント信奉者で、国政につらなる者一人一人が純粋なキリスト教精神を保持しなければならないことを理由に、国会での宣誓制の廃止に対して徹底抗戦の構えをもってこの国会に臨んでいたのである。1849年2月19日号の『パンチ』に描かれた「最後の口説き（ユダヤ教徒無資格制をなくすために）」(図7)は、この経緯を映したものとして興味深い。キャプションにはさらに、「フランク・ストーン氏の絵画にあやかって」という断り書きがついている。

フランク・ストーン(1800-59)は、歴史画や肖像画を得意とし、ディケンズと親交があって、彼の『クリスマス・ブックス』最終編『憑かれた男』の挿絵画家としても知られる。1843年に彼は、『最後の口説き』という題の油絵画をロイヤル・アカデミーに出品した。肺結核で衰弱きった田舎の若者が、好きな美しい娘に切々と言い寄るけれども、つれなくはねつけられてしまうところを描いた作品である。

これをもとにしてジョン・リーチは、「田舎の若者 (the swain) の役割」を「ユダヤ教徒のジェントルマン」に当てはめ、言い寄る若者を拒む「つれない女」(the inexorable) の役割をサー・ロバート・ハリ・イングリシに当てはめて描き出したのである。先に述べたような理由から、左背景に「プロテスタント教会」とい

う文字が映っているのも、お見逃しなきようご注意ください。ユダヤ人に対して偏見まる出しの絵を描いてきたリーチにしては、珍しく和らいだ雰囲気の一モラスな作品である。

次に、ユダヤ教徒の国会入りに対し断固として「ノー」を唱えつづけたイングリスと関係のある『パンチ』記事（1847年12月25日号）を紹介することにしよう。あたかも『パンチ』がユダヤ人を代弁するような形で、イングリス宛に書いた書簡体の文章である。

### ユダヤ教徒の有資格と無資格

サー・ロバート・イングリスに捧ぐ

謹啓 ユダヤ人には脳がないのですか？ ユダヤ人には心身の働きが、思考力が、想像力、判断力、理性がないとお思いですか？ キリスト教徒と同じ法律によって治められ、同じ罰則に従い、同じ訴訟の対象となり、同じ裁判官と陪審員によって同じく救済を受ける権利をもち、同じく有罪無罪の裁きを受けるのではないですか？ 税金を課せられて、納めないことがありましたか？ 租税を正金で払わないことがありましたか？ 絞首刑にかけられて死なないことがあるのでしょうか？ あなた方の行政に従うのであれば、私たちもそれに参加すべきではないのですか？ ほかのことであなたたちと同じであれば、この点だって同じではありませんか？

頓首再拝

ーユダヤ人より

ご存じ、シェイクスピアの『ヴェニス商人』第3幕第1場において、シャイロックがキリスト教徒に向かって述べる名せりふの核心部分をもじったものである。

イングリスの猛反対にもかかわらず、宣誓制廃止に関するラッセルの動議は、賛成 233 票、反対 186 票、47 票の差で可決された。しかし上院での抵抗は根強く、問題の解決をみるまでには、先ほども述べたように、それから 11 年の歳月を要した。1858 年、両院がそれぞれ独自の宣誓方式を採用するという条件を盛り込んだリューカン卿の修正案が双方で採択され、下院においては、ユダヤ教にのっとった宣誓が認められて、初のユダヤ教徒国会議員が誕生するようになったのである。

『パンチ』（1858年7月24日号）は、「パンチの国会要録」欄に早速このことを取りあげた。そして上院が一方においてはユダヤ教徒の国会入りに反対を唱えながら、他方ではそれを許容した矛盾撞着ぶりを痛烈に皮肉ったあと、次のような文章をもってこれを締めくくっている。

ギャロウェー卿は、やがては「放蕩宰相」の誕生する日がくるであろうことを、強い懸念をもって警告された。そうなれば、「多額の賄賂と引き換えに、ユダヤ人貴族の創設もなされるであろう」と。しかし、この懸念は上院議員諸卿にはなんら痛痒を感じさせるところとはならなかった。かくして法案は通過、イスラエルは欣喜雀躍の態で、ありたっけの帽子を思う存分に宙に蹴りあげたのであった。

文章には『パンチ』特有の辛口が感じられるのであるが、添えられた挿絵(図8)は、いかにも1858年がイギリスのユダヤ人にとって一つの転機となったことを象徴するような絵である。

#### 注

- 1 Edwin Pugh, *The Dickens Origins*, London: T. N. Foulds, 1913, p.249, Lauriat Lane, Jr., "The Devil in *Oliver Twist*," *The Dickensian*, 1956, pp. 132-36 を参照。
- 2 Southey, Robert, *Letters from England by Don Manuel Alvarez Espriella*, London: Printed for Longman, Hurst, etc., 2nd ed., Vol. 3, 1808, p. 151.
- 3 "But in this case he [the Devil] did appear/ Like a slop-merchant from Wapping," *Peter Bell the Third*, Part 2, 91-92.
- 4 Charles Dickens, "Bill-Sticking," *Household Words*, March 22, 1851, p. 601.
- 5 詳しくは拙著『19世紀ロンドン生活の光と影——リージェンシーからディケンズの時代へ』(世界思想社, 2003) IIIの1を参照。
- 6 詳しくは、William Flavelle Monypenny & George Earle Buckle, *The Life of Benjamin Disraeli, Earl of Beaconsfield*, London: John Murray, Vol. 3, 1914, chap.3 を参照。

#### 主要参考文献

- Altick, Richard D., "Punch," *The Lively Youth of a British Institution 1841-1851*, Ohio State University Press, 1997.
- Blake, Robert, *Disraeli*, London: University Paperbacks, Methuen & Co., 1969.
- Cowen, Anne and Roger, *Victorian Jews through British Eyes*, Oxford University Press, 1986.
- Monypenny, William Flavelle and Buckle, George Earle, *The Life of Benjamin Disraeli, Earl of Beaconsfield*, London: John Murray, 6 Vols., 1910-20.
- Spielmann, M. H., *The History of "Punch"*, London: Cassell & Co., 1895.



〈図1〉ユダヤ人古着商人

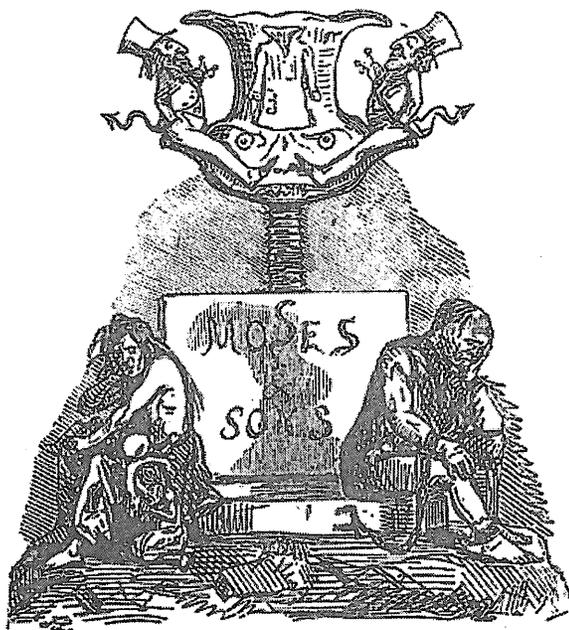
CARTOON FOR THE MERCHANT TAILORS.



MOSES AND SON ATTERING YOUNG ENGLAND.

THE novel of Coningsby clearly discloses  
 The pride of the world are the children of Moszes.  
 Mosaic, the bankers—the soldiers, the sailors  
 The statesmen—and so, by-the-by, are the tailors.  
 Mosaic, the gold—that is worthless and hollow ;  
 Mosaic, the people—the bailiffs that follow.  
 The new generation—the party that claim  
 To take to themselves of Young England the name ;  
 In spite of their waistcoats much whiter than snow,  
 It seems after all are the tribe of Old Clo !  
 Then where in the world can Young England repair  
 To purchase the garments it wishes to wear—  
 Unless to that mart whose success but discloses  
 The folly of man, and the cunning of Moszes ?

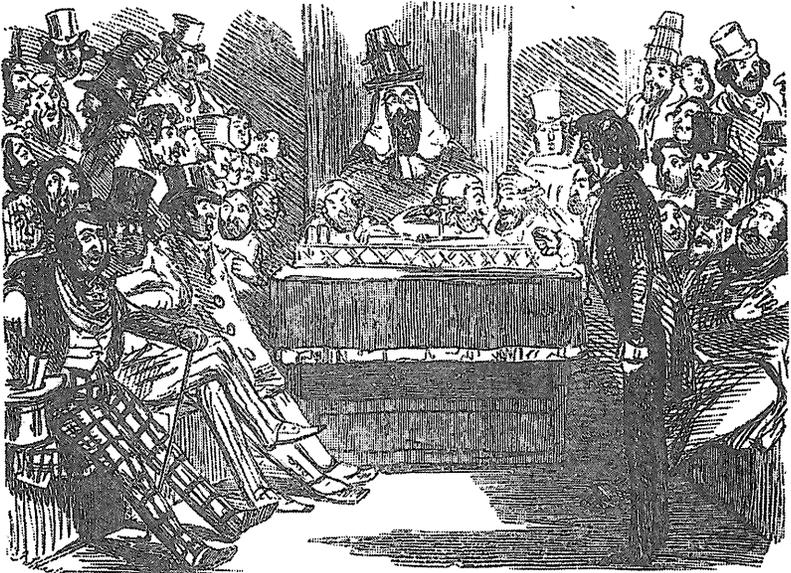
〈図2〉「洋服商同業組合のための下絵」(ジョン・リーチ画)



〈図3〉ジョン・リーチが描いたモーゼズ父子商会の紋章



〈図4〉ユダヤ人既製服仕立商人による搾取労働の光景（ジョン・リーチ画）



〈図5〉「ディズレイリー氏の見解による下院風景」(『パンチ』1847年)



〈図6〉ジョージ・オズボーン、トップハットの男になぐりかかる。



〈図7〉「最後の口説き（ユダヤ教徒無資格制をなくすために）」  
（『パンチ』1849年）



〈図8〉法案通過後の様子を描いた『パンチ』  
の挿絵（1858年）



## 蛇の表象性——白い文明と新大陸

青山義孝

オリентとは、むしろヨーロッパ人の頭のなかでつくり出されたものである。オリентはヨーロッパ人の心の最も奥深いところから繰り返し立ち現れる他者イメージでもあった。オリエンタリズムとは、オリентを支配し威圧するための西洋の様式なのである。ヨーロッパ文化が、一種の代理物であり隠された自己でさえあるオリентからみずからを疎外することによって、みずからの力とアイデンティティーとを獲得した。(Said 1,3)

黒いキリスト像。ホンデュラス国境近く、グアテマラ随一の聖地エスキプーラスに奇跡の黒いキリスト像がある。像にふれた者の病を治したこともあるという奇跡のキリスト像、かつてローマ法王も訪れたことのあるこの黒いキリスト像の前には長蛇の列ができていくという。

エスキプーラスは1594年、先住民がこの地にキリストが降臨するのを見たことにより興った町である。一人のインディオがキリストを見た。村人は、自分たちの肌の色をしたキリスト像を彫った。それから奇跡が起き続け、やがて1758年にはキリストの降り立った丘に白亜のカテドラルが建てられた。これがエスキプーラスの大聖堂である。その美しい白亜のカテドラルの中に黒いキリスト像は安置されてある。写真(図版1)で見るそのキリストの肌は確かに黒い。両脇の聖母マリア像とマグダラのマリア像の肌は白いので年経る間に黒ずんで現在の色になったのではないことは確かである。最初から黒いのである。白人のキリストではなく、インディオのキリストである。

このエスキプーラスの黒いキリスト像、見るものの眼に白い文明と新大陸との遭遇のドラマの一コマを垣間見せてくれるが、ここでひとつ素朴な疑問がわいてくる。2000年前にナザレに降り立ったイエス・キリスト、果たしてその肌は何色だったのか。

イギリスのBBC放送がこの問題にメスを入れた。2001年3月27日に放送された特集で流されたコンピュータ・グラフィックスによるイエスの顔(図版2)は、どう見ても白人の顔ではない。今でもパレスチナ辺りでごく普通に見かけそうな顔立ちである。

そもそもヘブライ人は白人系ではなく、アジア系民族である。旧約聖書(歴代志上1:4)によれば、ノアの三人の息子のセム、ハム、ヤベテは、セムが黄色人、

ハムが黒人、ヤペテが白人の祖先になった。そしてアブラハム、ダビデ、ソロモン、イザヤ、さらに、イエス・キリストを含むすべてのヘブライ人はノアの三人の息子の中のセムの子孫、すなわちアジア系民族である。

ではなぜ、エスキューラスのキリスト像の黒い肌が、BBCが描いたイエスの肖像画が、非キリスト教徒であるわれわれ日本人をも驚かすのか。西洋美術で描かれるキリストの多くが金髪碧眼の姿として描かれていることから明らかなように、ヨーロッパ文明はキリストを白人と見なしてきた。キリストのみならず聖書物語全体を白人の登場人物で描いているといっても言い過ぎではない。アンジェリコの「幼児虐待」、プーサンの「階段の聖母」、ティツィアーノの「聖母被昇天」、ラファエロの「奇跡の漁」、「キリストの変容」を始め、文字通り枚挙に暇がない。中にはアンジェリコの「キリストの嘲弄」のように金髪のキリストに黒髪のユダヤ人が唾を吐きかけているものさえある。ところが実際には、今も見てきたように、キリストは有色人種（セム族）である。ヨーロッパは黄色人種のキリストを白色化したのである。

キリスト教のヨーロッパへの進出のプロセスはキリスト教自らの白色化（ヨーロッパ化）のプロセスでもあった。1954年に20世紀を代表する神学者の一人であったオスカー・クルマンが、ハーバード大学のインガソル講演に招かれ「魂の不滅か死者の復活か」と題した講演を行った。魂不滅説はソクラテスの思想であり、キリスト教の思想ではない、キリスト教は死者の復活の宗教であり、魂は肉体とともに死ぬ、という衝撃的な内容の講演であり、大論争を巻き起こした。以来、キリスト教は死者の復活の宗教という本来の姿に戻り、魂の不滅説とは縁を切ったが、中世以来十数世紀にわたってキリスト教は魂不滅説を標榜していた。

ユダヤ・キリスト教史上、キリスト教の誕生ならびにヨーロッパへの進出はヘブライズムとヘレニズムの遭遇であったと言える。ヘレニズムとヘブライズムの遭遇はアレクサンダー大王の東方遠征に端を発する。キリスト教が誕生する時代のパレスチナはヘレニズムの影響をかなり受けていたので、キリスト教誕生の時代の起点はヘレニズムとの遭遇にあったと見なすことも可能で、そもそもの誕生からキリスト教はヘレニズムと密接な関係にあったと言えるが、誕生後のキリスト教は、西洋美術史にも如実に表れているように、ヨーロッパ進出の過程でヘレニズムに飲み込まれていった。文化の衝突においては、一方の文化が他方を根絶するというのではなく、双方が大きな影響をこうむる。魂不滅説の例からもわかるとおり、キリスト教はヘブライズムの宗教でありながらヘレニズムの姿をとることとなった。爾来キリスト教は自らを白人の宗教と称し、有色人種の宗教であるユダヤ教、イスラム教との違いを際立たせた。

ヨーロッパにより発明され、付与されたアメリカの歴史的・精神的存在としてのアメリカ史の意味とは、もうひとつのヨーロッパとなること、つまりキリスト教的ヨーロッパを受容することであった、という画期的な議論を展開させたのはオゴルマンであった。オゴルマンによれば、ヨーロッパ化には模倣と独創の二つの道があった。スペイン式の模倣型——ヨーロッパモデルにアメリカの環境を適合させるキリスト教化の道と、イギリス式の独創型——ヨーロッパモデルをアメリカに適合させる道の二つであり、後者は先住民を同化させるのではなく、放任ないし排除し、植民者はフロンティア開発に邁進していった(オゴルマン 186-93)。いずれの場合も、新大陸の文明に遭遇したヨーロッパの白い文明が新大陸の黄色の文明を白色化していったのである。

このオゴルマンに影響されたと思われるサイドは、オリエントはヨーロッパの発明品であり、オリエンタリズムとはオリエントを支配し威圧するための西洋の様式なのである。ヨーロッパ文化が、一種の代理物であり隠された自己でさえあるオリエントからみずからを疎外することによって、みずからの力とアイデンティティを獲得したという衝撃的な議論を展開した。サイドの言うオリエンタリズムの中核にあるのはイスラム教であり、ヨーロッパ文明の中核はキリスト教である。しかし、言うまでもないことながら、キリスト教はオリエント発祥の宗教、いうなれば黄色の宗教である。そのキリスト教がヘレニズム世界に入り込んでいったとき、ヘレニズム文化の影響を受け、黄色い宗教から白い宗教に変貌した。征服した神も実は被征服者の神々に征服・教化されていったのである。(小林 53 参照)

D. H. ロレンスは、どの大陸にも「地の霊」という、それぞれ独特の、その地を司る大いなる霊が宿っていて、それがそれぞれの民族を作り上げてきたのだ、と言う。

どの大陸にもそれぞれ独特の、その地を司る大いなる霊が宿っている。故郷あるいは母国といったある特殊な場所によって人々は分極化されている。地球上の異なった場所には異なった放出、異なった振動、異なった化学的発散、異なった星による異なった磁極がある。それを何と呼ぶのも結構である。しかし、地の霊は大いなる実在である。[……] イタリアには、たとえばローマの町にはイタリアの強烈な極性がある。しかし、それは死滅したようである。というのは場所だって死ぬからだ。大英帝国の島には驚くべき磁場あるいは独特の極性というものがある、それがイギリス人を作り上げてきたのだ。(Studies 17)

この地の霊はそこに住む民族の民族性を培うだけでなく、その地に入り込んできた異民族に対し、致命的ともいえるような作用を及ぼす。たとえば『カンガルー』で白人を待ち伏せる地の霊をロレンスは次のように描いている。

しかし、ブッシュには何か恐ろしいものがある。その正体に思いをめぐらせた。きっと地の霊に違いない。西オーストラリアのあの異様な月が今夜、地の霊を目覚めさせ、そそのかしたに違いない。月に眠りを覚まされ、そそのかされたブッシュの霊が瞬きもせず、あたりをうかがっているようだ。すぐ後ろを追ってくる気配がする。長い黒い腕を伸ばせば、楽につかまえることもできよう。ところが、じっと待つ方を選んだのだ。自分の獲物を飽きもせず、もてあそぶ方を。よそ者だな——たいした獲物だぞ。片時も目をそらすことなく機会をうかがっている。数知れぬ白人の侵入者を見つめながら、その終焉を待っているのだ。(Kangaroo 9-10)

地の霊はもちろんアメリカ大陸にも存在しており、その地の霊が白人の運命を大きく変えていく姿をロレンスは『ケツアルコアトル』で、そしてそれを書き改めた『羽蛇』できわめて神秘的に描いた。これらの作品では、キリストが蛇によって象徴されるインディオの守り神ケツアルコアトルに席を譲る。ロレンスが描こうとしたのは、まさしく白い神（宗教）の有色化、より正確には再有色化である。（ちなみにロレンスはニューメキシコにしばらく滞在していたことがあり、その期間にこれらの作品を書いたのであるが、ニューメキシコはモルモン教徒が作ったユタ州に隣接する州でもある。そのモルモン教徒は、正式な教会の見解というのではないが、ケツアルコアトルはアメリカ大陸に降臨したキリストの別称であると見なしている。あるいは、ロレンスが『ケツアルコアトル』、『羽蛇』執筆に際して何らかのヒントを、ニューメキシコ滞在中に見聞したに違いないモルモンのエピソードから得たのかもしれない。）

コロンブスのサン・サルバドル島への上陸に始まる白人と新大陸の関係は、かつては白人による新大陸の征服という一方方向性の関係として語られていたが、実際には、たとえば、ニューイングランドの白人の政治形態がアルゴンキン族の政治形態を模したものであったことなどからも伺えるように、白人とアメリカ・インディアンとの関係、白い文明と新大陸との関係は双方方向性を持った関係であった。

さて、アメリカ・インディアンの文明を象徴する動物のひとつが蛇であることは

よく知られている。ケツアルコアトル（羽もしくは翼を持った蛇）神話はその代表であるが、以下、蛇の表彰性を通して白い文明と新大陸の関係を管見してみたい。

ロレンスのアメリカ文学論に大きな影響を受け、それをさらに発展させた批評家フィードラーは、アメリカ人と新世界との関係を次のように論じている。

それではこれがつまり本当の論点なのだ。アメリカ人が「新世界」の森のなかで夢見たのは「異教的楽園の復興」であり、キリスト教が介入したとき——つまり、女が介入したときに、ハンナ・ダスティンが婦徳をそなえ性的恐怖にかられつつ登場し、そのすぐ背後にびったりついてコトン・マザーの陰気な姿が、彼女が果たした殺人者の役割を適切な聖句の引用で正当化しようと手ぐすねひいてつづいたときに、うしなわれてしまった自然のままの「エデン」なのだ。

結局、「楽園の墮落」には二つの原型がある。ひとつは旧世界から引き継がれてきたものであり、もうひとつは新世界で創造されたものである。前者の場合、「男」と「女」とは「蛇」が登場するまでは「地上の楽園」で平和に暮している。後者の場合には、「男」と「蛇」とが、「女」の登場を見るまでは、仲よくいっしょに暮しているというふうには話が進む。なぜならインディアンこそが蛇であるからだ——蛮人とは「獰猛な『竜』」だとする正統的キリスト教徒の想像力ばかりでなく、神話を愛するアメリカ人の異端的精神にとっても。(Fiedler 115-16)

もしコロンブスが誤って「インド人」と呼んだアメリカ・インディアンがインド人でないとするれば、一体この人間の姿をした生き物はいったい何なのだろう、ヨーロッパ人は真剣に悩んだ。聖書によれば、この世にはノアの三人の息子たち、セム、ハム、ヤペテから生れた三つの種族がある。しかし、アメリカ・インディアンはこの三つの種族のいずれにも属さない。とすれば、そもそも彼らはアダムの子孫——すなわち人間——と考えられるであろうか、はたして魂をもっているのだろうか？ 最終的にはローマ教会はアメリカ・インディアンが魂をもつ人間であるとの結論に達するが、その結論に至るまでにはかなりの時間にわたる激しい議論が戦わされた。17世紀に入ってもニューイングランドに渡ったピューリタンはアメリカ・インディアンを「赤い悪魔」と称し、ウィルダネスに楽園を築くという神によって命ぜられた「荒野への使命」を果たす上での障害として、大した罪意識を覚えることもなく殺戮していった。「なぜならインディアンこそが蛇であるからだ。」

フィードラーも言うように、ジェイムズ・フェニモア・クーパーの場合には、インディアンと蛇との同一視はさらに緊密である。

なぜならナッティの生涯の友の名前チンガチグックは、「大きな蛇」という意味だからだ。「さて、わしは生れつき蛇というやつが大きらいでな、人間なら自然のことだが……蛇という言葉聞くだけでもぞっとする」とクーパーはナッティに断言させている、「最初の女をだましたある一匹の蛇が、地球を創造したさいにいたためだ。だのに『大蛇』の称号をチンガチグックが手に入れて以来、なんと、その言葉のひびきがわしにとっては、静かな夕方に鳴く夜鷹の口笛のように快いのだ」。この言葉のなかには、「最初の女をだました」という運命的な一句がある。そしてキリスト教徒の読者なら、このような一句に読みたれば、蛇に向って語りかけられる聖書のなかのあの詩を思い出さずにはいないはずだ、「わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとのあいだに……」だがナッティはもはや女のすえではなく、このアメリカという土地で、ここを故郷とするインディアンと出会うことで生れ変わった、つまり男同士の結合から新しい生を得た、あのアメリカ人たちの（ヘンリーを別とすれば）最初の人物なのだ。彼が好んで何度も揚言しているように、たしかに「ナッティの血にはなんの混じりけもなく」、出生にはどんな雑婚の汚れもないが、にもかかわらずナッティは「白人」でもなく「赤色人」でもなく、日の下で新しい何者かであり、アメリカの本質的な神話にほかならぬ伝説の主人公たる原型的「西部人」である。ワタムもハンナ・ダスティンもリップ・ヴァン・ウィングルも、これらすべての話が、ナッティの神話のなかではひとつに融合されているのである。(Fiedler 117-18)

フィードラーも注目している、「高貴なる野蛮人」チンガチグックの名前を通しての蛇の象徴性の変化、これが鍵である。

「さて、わしは生れつき蛇というやつが大きらいでな、人間なら自然のことだが……蛇という言葉聞くだけでもぞっとする」というナッティのことばが、通常キリスト教徒が蛇に対して抱く感情を如実に物語っているのだが、では、なぜこうまでもキリスト教徒が忌み嫌う蛇がチンガチグックという高貴なる野蛮人の表象となったのだろうか。

日本でもデフォルメされてしめ縄として全国の神社に飾れているなど、蛇ほどそのほとんど神秘的とも言える特異性ゆえに世界中の神話、伝説、民話で重要な

役割を担わされている動物はいないであろう。アト・ド・フリースの『イメージ・シンボル事典』は蛇の象徴性として次の12の項目を挙げている。

1. 神々との関連
2. 邪悪
3. 生命、治癒力
4. 悠久、豊饒、再生
5. 大地、冥界
6. 水
7. 宝の番人
8. 死霊
9. 男根
10. 太母神に関連
11. 邪悪な性格（姦策、狡猾、サタン、肉欲、秘密、隠匿、危険、死、世俗的な事柄に固執する物質主義、人類を囚われの身に導いたので隷属、罪、嫉妬、怠惰
12. 善良な性格（英知、生命の神秘、予言の力、純化された慈悲深い力）（562-65）

蛇がこのようなさまざまな象徴性を与えられる最大の原因はなんと言っても脱皮の能力である。

脱皮は再生の能力と見なされ、その能力ゆえに蛇には神性が宿るとされる。かくして多くの神話で蛇は神性、永遠の象徴と見なされている。ところが、その神性ゆえに逆に悪魔性を帯びているとも見られるようになる。キリスト教がその典型だが、一神教であるキリスト教では、唯一神である神のみに許される永遠の生命を持ち合わせているかのごとく思わせるその脱皮ゆえに、蛇は神に挑戦する悪魔の化身と見なされるに至った。もちろん悪魔性のみが聖書における蛇の象徴性ではなく、たとえば「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」（マタイ 10：16）と喩えられて賢明の象徴と見なされたり、モーセの青銅の蛇のように悪魔性の対極にある象徴性も帯びている。とはいえ、やはりキリスト教にとっての蛇の象徴性は、野の生き物のうちでもっとも狡猾なものであり、イヴを誘惑するサタンと関連させて描かれる創世記の記述、さらには黙示録第20章第2節に登場する「悪魔でもサタンでもある、年を経たあの蛇、つまり竜」に集約されるであろう。

17世紀に渡ってきたピューリタンはあらゆる事柄を聖書的象徴体系の枠で捉えたので当然蛇は悪魔の象徴であった。たとえば、ジョン・ウィンスロップの1648年8月15日の日記には、教会で説教者の後ろに現れた蛇を退治した出来事が、創世記第3章第15節の「彼〔女のすえ〕はお前の頭を砕き、おまえは彼のかかとを砕く」を踏まえて次のように書き留められている。

彼〔アレン氏〕の説教のなかばで、一匹の蛇が説教者の後ろで、多くの長老が座っている席に入ってきた。その蛇は、人びとが群がっている戸口の階段から入ってきた。長老の数人は、それを避けて席を変えた。しかしブレイン

トリーの長老（ひじょうに信仰のあつい人である）トムソン氏は、その蛇の頭を踏みつけて、足と小さな二またの鮎のついている杖で、それが死んでしまうまで押さえつけた。これはひじょうにすばらしいことで、うたがいのもなく主がその中にみずからの意志の働きを見出されたのである。というのは神の摂理によらざれば何事も起こりえないからである。蛇は悪魔であり、宗会議はニューイングランドにおけるキリストの諸教会を代表するものである。悪魔は、以前にも、また最近も教会をまどわし、崩壊させようとした。しかし彼らの人の子に対する信仰が、悪魔に打ち勝ち、その頭を打ち砕いたのだ。（*The American Puritans* 47-48）

ここに見られる悪魔としての蛇の姿は、後の文学作品の中にも数多く登場する。筆頭にナサニエル・ホーソーンの代表的な短編小説「若いグッドマン・ブラウン」を挙げることができる。森で催される悪魔の集会と一緒に出かけようとブラウンを誘惑をし、案内する人物が実は悪魔なのだが、その悪魔が手にしている杖が何度も蛇に喩えられる。また同じホーソーン「胸中の蛇」もこの部類に属す作品である。「大蛇」という意味のチンガチグックという名前を「高貴な野蛮人」に与えて新しい蛇の表象性を描いたクーパーも、実は、チンガチグック以外の邪悪なアメリカ・インディアンを蛇に喩えている。マグワがその代表だが、もちろんこの場合の蛇の表彰性は悪魔である。またロングフェローも『ハイアワーサの歌』の中で悪魔としての蛇を描いている。

ミッチェ・マントー、大悪霊  
 恐ろしい悪霊は蛇として描かれた  
 蛇として描かれた  
 ケナビーク、大蛇に。  
 這いまわっている悪霊が  
 たいへん狡くて悪賢いことを  
 その象徴が意味していた。

(Longfellow 220)

ハーマン・メルヴィルも蛇を悪魔の象徴として描いているが、メルヴィルの場合はそう単純には片付かない。そのエキゾチズムゆえに一躍メルヴィルを売れっ子作家にした処女作『タイピー』でメルヴィルは蛇のイメージを読者の意表をつく形で効果的に利用している。

少しくつろいでから、ぼくらはまた登坂を始めたが、少し勢いをつけてよじ登ったので、たちまち頂上をきわめそうになっていた。しかしながら、ここで尾根づたいに歩いたら、下の谷にいる原住民からは丸見えのはずだし、その気になればいとも簡単に押し寄せられそうな地点でもあるのだから、用心深く山腹の片側を四つん這いになって前進したのだが、それも見つからないように草の葉に隠れて滑っていったのだから、その格好といったらちようどすべるように進む二匹の蛇そっくりだった。この不愉快な運動に一時間も費やしたあげく、ぼくらはまた立ち上がり、勇気を揮って尾根の頂き沿いの道を進んだ。(Melville 52)

ヌク・ヒヴァ島の原住民ではなく、島に侵入した語り手たち二人のアメリカ人をメルヴィルは蛇に喩えているのである。しかも語り手は、後になって知った話だがと断りながら、南太平洋の全島嶼は毒蛇がまったくいないことで評判が高いと言い、極悪の毒をもつ爬虫類もいなければ、蛇と名のつく蛇も谷のどこにも見当たらないと言う。

しかし、この場合も蛇は邪悪なものの象徴である。メルヴィルは『タイピー』では文明を蛇と重ねて描く。文明の象徴である火を起こす原住民の姿は、「両手でつかんでいる小さな毒蛇がのた打ち回って逃げようとするものだから、頭から尻尾まで串刺しにしたぞといわんばかり」である。原住民の間で火起こしほど骨の折れる仕事はなく、この作業が蛮族と文明社会との間に横たわる格差を象徴するわけで、文明人は黄燐マッチの助けを借りれば火などわけなく起こせると語り手は言う。ところで黄燐マッチは英語では lucifer であり、これはサタンが地獄に墮ちる前に天上で呼ばれていたとされる名前でもある。

メルヴィルにとっては、南太平洋の楽園へ入りこんでキリスト教化しようとする白人の文明こそが「蛇」だったのである。語り手は、「一語にしていえば、でもまた、僕らが蛮族と呼ぶ人間の中に文明を持ちこむときはいつでもそうなのだが、文明は悪を拡散し、祝福を抑制するのだ」(Typee 234) と言う。

随罪の報いはタイピー溪谷にはきわめて薄い影を落としているだけだ。火を起こす重労働のほか、額に汗するような仕事をしている人間はひとりも見たことがなかった。生計のために穴を掘り、溝を掘るなんてことは全然未知のものだ。自然はパンの木とバナナを植林していて、然るべき季節がくれば、それらを熟成せしめ、怠惰な蛮族は手を伸ばし、食欲を満たす。

悪しき運命に生まれた人びとよ！ 今後数年がこの地上楽園のねぐらに  
いかなる変化をもたらすかと思うと身震いがする。そしておそらく、もっ  
とも破壊的な悪徳、文明への最悪の供奉が谷からいっさいの平和と幸福を駆逐  
する時がきて、寛大なるフランス人がマルケサスはキリスト教に改宗したと  
全世界に向かって宣言することだろう！ そして、カトリック世界は間違い  
なくこれをほめまつべき出来事だと見なすのだろう！ 天よ願わくば「絶  
海の島嶼」を助けさせたまえ！——キリスト教世界が彼らに感じる同情が、  
ああ、悲しむべし、彼らの破戒となった事例があまりにも多いとは！ [……]

蛮族を文明化するのはいい。だが、恵みがあるように、悪を伴わぬように  
文明化せよ。淫祠邪宗を撲滅するのはいい。だが邪宗の徒を撲滅せしめては  
ならない。アングロ・サクソンの蜂は北米大陸の大部分から異端を根絶した。  
だが、それとともに赤銅色のインディアンの大部分をも根絶したではない  
か？ 文明は次第に地上から異端の残り香を掃蕩しつつあるが、それと同時  
に、その不幸な礼拝者の萎縮した姿をも掃蕩しているのだ。(Typee 229-30)

次に悪魔的象徴としての蛇のもうひとつの例としてマーク・トウェインの『ハ  
ックルベリー・フィンの冒険』を見てみよう。蛇の抜け殻をつかんだら恐ろしい  
災いが訪れるという黒人奴隷ジムの戒めを聞かずに蛇の抜け殻をつかんだハック  
に、実際には身代わりとなったジムに、災いが訪れる場面である。

災いはその通りやってきた。二人がそんな話をかわしたのは火曜日だった。  
ところが、金曜日の夕飯のあとで、僕は尾根の上手の端れで草の中に寝こ  
ろびながら煙草を取り出した。僕は岩穴からもう少し煙草を持ってこようと  
思い、きてみるとガラガラ蛇がいた。僕はそいつを殺し、ジムの毛布の裾の  
ところにいかにも自然にとぐろを巻かせておいた。ジムが見つけたとき観物  
だと思ったからだ。ところが夜になったら僕は蛇のことはすっかり忘れてし  
まった。それで、僕が灯をつけている間、ジムが毛布にごろっと横になると、  
さっきの蛇の連合いがきていてジムに咬みついた。

ジムは大声を上げて飛び上がり、灯の光で最初に見えたものは、毒蛇がと  
ぐろを巻き、まさにもう一度飛びかかろうとしている姿だった。僕は間髪を  
入れず棒で蛇を殴り殺し、ジムはおやじのウィスキー瓶をひつつかんでガブ  
ガブ飲んだ。

「ジムははだしだったので、蛇は腫のところを咬んだのだ。それというのは、  
僕が死んだ蛇をそのまま置いておくと、必ずその連合いがやってきてそのま

わりからみつくということをおかにも忘れていたから、こんなことになったのだ。(Twain 675・76)

ジムの踵を噛ませていることからわかるように、このガラガラヘビは創世記の「彼〔女のすえ〕はお前の頭を砕き、おまえは彼のかかとを砕く」を想起させるトウェインの小道具である。聖書ではキリストが蛇（サタン）の頭を砕き、蛇がキリストの踵を噛むことになっているのだが、ここでは蛇がジムの踵を噛み、ハックがその蛇を殴り殺している。ジムとハックのいずれがキリストの役割を担わされているのか、あるいは双方がお互いにその役割を果たすことになるのか興味尽きないが、この点の解釈は他の機会に譲るとして、ここで注目したいのは、ジムの踵を噛むガラガラヘビが悪魔のイメージをもたされている点である。

この後でジムはぐいぐいウィスキーを飲み、ときどき頭がへんになって暴れまわったり喚いたりし、正気に返るたびにまたウィスキーをがぶ飲みするが、それを見たハックは、おやじのウィスキーにやられるよりも蛇に咬まれるほうがましだと思う。ハックが思い起こす父親の姿である——

どのくらい長く眠っていたか知らないが、いきなり、恐ろしく悲鳴が響いたので、ぼくは目を覚ました。見るとおやじが凶暴な目つきでところかまわず跳ねまわり、蛇のことをわめき叫んでいた。蛇が足に這い上がってくるといつては飛び上がって悲鳴をあげ、一匹は頬に噛みついたというのだが——しかし、ぼくには蛇など一つも見えなかった。おやじは部屋中ぐるぐる駆け回りながら、「こいつをのけてくれ！ こいつをのけてくれ！ おれの首に噛みついてやがるんだ！」と、怒鳴った。ぼくはこんな凶暴な目をした人間を見たことがなかった。〔……〕おやじはところかまわずものを蹴飛ばし、両手で空を打ったりつかんだりして悲鳴をあげ、悪魔につかまると言った。

(Twain 652・53)

作品の最後で再び蛇が登場する。トム演出によるどたばたジム救出劇で、囚われの身になっているからにはガラガラ蛇をペットにしていなければならないと言い張るトムに対し、ジムはガラガラヘビだけは勘弁してほしい、どうしてもというんなら自分の手を切るとまで言う。根負けしたトムはシマヘビで手を打つが、ハックはこの後の場面で「ところで、蛇は美しくて縞があった。そして百万匹いても少しも害がないのだ」(Twain 886)と言う。このシマヘビはジムの踵を噛んだ悪魔的象徴としてのガラガラヘビとは明らかに異質の蛇として描かれている。

ジムと同じように毒蛇にかまれる黒人が登場する作品にフォークナーの「赤い葉」がある。アメリカ・インディアンの酋長の死に伴い殉死を運命づけられている黒人が、恐怖のあまり逃げ出してしまい、その途中で沼蝮に噛まれてしまう話である。

日が沈んで、先ほど見つけておいた蛙のいる場所に向かって川岸をはっていくと、沼蝮が突然二の腕に深くゆっくり噛みついた。蛇はへまな噛みつき方をしたので、腕にまるで剃刀の傷のような長い二つの傷をこしらえ、勝手に勢い込み怒り猛って半分へたばってしまい、自身の不手際に猛毒の怒りによって一瞬完全に身動きできなくなってしまったように見えた。「がんばるだ、じいさん」と黒人は言った。そしてその頭に障り、それがふたたび三度自分の腕を深く、引っかくように、不手際に、噛みつくのを眺めていた。「これというもの、おらは死にたかねえからだ」と黒人は言った。ついでもう一度そのことばを——「これというもの、おらは死にたかねえからだ」——とゆっくり、ぼんやり驚きながら、おだやかな口調で言ったが、あたかも、そのことばが口からひとりで吐かれるまでは自身そんなことは知らなかったようであり、それともまた、それまで自分の欲望の深さと広さを知らなかったかのようだった。(Faulkner 78)

毒蛇が自分の二の腕を噛むのを眺めながら、「がんばるだ、じいさん」「これというもの、おらは死にたかねえからだ」と黒人が言うのは、毒蛇に噛まれてひどく傷ついてしまえば、死後の世界で酋長の世話を見ることができなくなるので殉死の資格がなくなるというのがその理由である。ということつまり、この黒人にとって沼蝮はいわば救い主のような存在ということになる。黒人はこの後ゴルゴダの丘へ登るキリストを髣髴させる描かれ方がされるが、かといってここでの蛇はキリストの踵を噛む蛇ではない。あくまでも黒人を殉死から救う可能性を秘めた存在である。

さて、周知のようにアメリカを象徴する動物は白頭鷲である。ところが、18世紀半ば、イギリス本国との間が怪しくなりかけた時期にアメリカの植民地の象徴として選ばれたのはガラガラヘビであった。自他共に認める植民地のオピニオン・リーダーであったベンジャミン・フランクリンが、「同盟か死か」という標語入りのガラガラヘビの図版(図版3)を1754年5月9日付の「ペンシルベニア・ガゼット」紙に掲載して、植民地間の結束を訴えようとしたのがその発端である。当時、イギリス本国に対する姿勢が植民地によってまちまちであったため、蛇の

体をジョージアを除いた8つに切断し、同盟を結ばない限り植民地はこの蛇のように死ぬしかないのだ、と訴えたのである。なお、フランクリンがガラガラヘビを選んだ理由は、冬になると無数の蛇が絡み合って寒さを耐え忍ぶ冬眠の姿が、当時の危機的状況におかれた植民地のとるべき姿にふさわしいという点と、他の動物の獲物を横取りする鷲は正義を主張する植民地の象徴としては不適格である、という点であった。コネチカット植民地は白頭鷲を押しただが、その図柄が不評で、こんな七面鳥のような無様な鷲を植民地の象徴とするわけにはいきまい、というフランクリンの主張が通ったのである。その後、ポール・リヴィアが1774年7月7日付『マサチューセッツ・スパイ』紙のマストヘッドに植民地を象徴する図案としてガラガラヘビを採用した(図版4)。右のドラゴンがイギリスでそれに立ち向かう左のガラガラヘビが植民地である。以後、独立戦争を通じて植民地軍の軍旗として「われを踏むなかれ」という標語入りのギャズデン旗(図版5)が採用され、ガラガラヘビが軍旗(特に海軍旗)の図案としてアメリカを象徴する動物となった。

悪魔の象徴から一転してアメリカを象徴する動物へと移り変わっていった蛇の表象性の変化をもたらした背景には18世紀という時間的要因があった。キリスト教、特にピューリタニズムは自然を人間の墮落とともに墮落した世界と捉えていた。自然であるとはすなわち罪深いということであり、自然人(natural man)は罪びと(sinner)と同義であった。ただし罪びととはいつでも罪を犯した人間という意味ではなく、生まれたままの状態でもまだ神の恩恵に与かっていない人間のことである。その自然のままの人間である罪びとが恩恵に与り回心を経験してはじめてキリスト教徒(saint)に生まれ変わるというのが、生まれ変わりのキリスト教としてのピューリタニズムの基本的な立場である。ところが、17世紀末からキリスト教に代わって約1世紀のあいだ西洋の思想を支配した啓蒙思想は、それまでキリスト教が墮落した世界と見なしていた自然をいかなる性質にも染まっていない白紙の状態(タブラ・ラーサ)と見なすようになった。また啓蒙思想とともに発展した自然科学は、神話的要素を剥ぎ取ってありのままの自然の姿を観察しようとした。したがって自然の中に生息する動物である蛇も、啓蒙思想の時代に入ると、それまでの文字通りお仕着せであった聖書的な悪魔の衣装を脱ぎ捨てることになったのである。

しかもアメリカ・インディアンにとって蛇は鷲と並ぶきわめて重要な動物である。ケツァルコアトルにも見られるように蛇はアメリカ・インディアンにとって守護神でもある。ニューイングランドに入植した白人と周辺のアメリア・インディアンの関係は征服する側とされる側という単なる一方向性ではなく、白

人が自らの政治体制の確立に当たってアメリカ・インディアンから影響を受けるなど双方向性の関係であった。そのアメリカ・インディアンの守護神でもあった蛇が、白人たちの蛇のイメージの変化に影響を与えたことは大いにありうる。ガラガラヘビがアメリカを象徴する動物に採用されるに至った背景には、このような啓蒙思想とアメリカ・インディアンの文化との接触があったと考えるのが妥当であろう。

そうした蛇のイメージの変化は、当然のことながら、文学の世界にも反映されている。その最も早い例はクレヴクール『アメリカの農夫の手紙』の第十の手紙であろう。アメリカの自然の美しさをたたえる文章としてハズリット、ゴドウィン、シェリー、コールリッジをはじめとする多くのヨーロッパのロマン主義者から賞賛されたその文章は、水蛇とクロナメラの雄雄しい戦いをリアルに描いたものであった。クレヴクールが描いたのは、絡み合いながら互いに牙を向いて相手を食いちぎろうとし、あらん限り猛り狂って噛みつきあいながら闘う二匹の蛇の激闘である。めったにみられぬすばらしい光景として描かれているのは、自然の生き物としての美しさととりりしさに満ちあふれた蛇であり、そこには聖書の象徴性・神話性など微塵もない。

ソローの『ウォールデン』にも同じような描写がある。

ある日、斧の柄が抜けてしまったので、ヒッコリーの若枝を切って楔を作り、それを石で打ち込んでから、木を膨張させるために斧をそっくり湖の深いところに沈めたとき、ふと見ると一匹のシマヘビが水の中に入ってゆき、わたしがそこにいる間、十五分以上も平気で水底によこたわっていた。まだ十分に冬眠状態から抜け出していなかったのかもしれない。同じような理由で、人間は現在の低級で原始的な状態から抜け出せないように、わたしには思われた。だが、もし春の中の春の作用が自分を呼び覚まそうとしているのを感じるならば、ひとは必ずや、もっと高い、もっと靈的な生活に向かって立ち上がるだろう。わたしは以前にも、霜のおりた朝、まだからだの一部がかじかんで動けないままの蛇が、太陽の熱に溶かされるのを待ちながら、わたしの通り道によこたわっているのによく出会ったものだ。(Thoreau 355)

二匹の蛇の戦いをどちらに肩入れするでもなく沈着冷静に観察するクレヴクールの筆致に比べると、冬眠から覚めていく蛇の姿を低級で原始的な状態からさらに高い靈的な状態へと昇華していく人間の姿になぞらえるなど、このソローの文章

にはロマン主義的色彩が色濃く漂っている。さらに次の文章では、ロマン主義者が好んで取り上げた毛虫からさなぎを経て蝶への変態を不完全ながら絡ませるなど、さらにその色を濃くしている。

われわれの古着がいくらぼろぼろになり、きたなくなっても、とにかく行動を起こし、事業を企て、船出した結果、自分自身が古い服を着た新しい人間になったように感じ、また、古着のままですと、新しい酒を古い革袋に入れておくのに似ていると感じるようになるまでは、決して衣服を新調すべきではあるまい。鳥類の換毛期と同じように、人間の更衣期は、生涯でも危機的な局面を迎えたときと決まっている。アビはこの時期を乗りきろうと、ひとり湖にひきこもる。また、蛇が皮を、毛虫が毛の衣を脱ぎ捨てるのも、内部の努力と成長によってである。衣服は人間にとって一番外側の表皮であり、形骸に過ぎない。(Thoreau 341)

この文章を書いたとき、ソローの脳裡にはエマソンの『自然』の次の文章が浮かんでいたのかもしれない。

森のなかにも、人間は、ちょうど蛇が皮をぬぐように、おのれの年齢をぬぎ捨てて、たとい人生のどの時期に達していても、いつも子どものままだ。森のなかにはいつまでも失われることのない若さがある。こういう神の植林場には、ある種の神々しい儀礼が支配していて、終わることを知らぬ祭礼が美々しく催され、招かれた客は、たとい千年を経ても、よもやこれほどのものに飽きることはあるまいと思う。森のなかで、われわれは理性と信仰をとりもどす。そこにいれば、わたしは自分の人生に、自然がつぐえないようなことは何ひとつ——どんな恥辱も、どんな災いも起こることはない(わたしに目だけは残してくれる)と感じる。むき出しの大地に立ち、——頭をさわやかな大気に洗われて、かぎりない空間のさなかに昂然ともたげれば、——いっさいの卑しい自己執着は消え失せる。わたしは一個の透明な眼球になる。いまやわたしは無、わたしにはいっさいが見え、「普遍者」の流れがわたしの全身をめぐり、わたしは完全に神の一部だ。(Emerson 10)

エマソンの思想を集約しているとも言えるこの文章は、アメリカ文学の中で蛇をあしらった文章の白眉とも言える文章である。

エマソンの言う森という無限の空間での人間の変身は、罪と時間性を捨てた後、いっさいの卑しい自己執着が消え失せて一個の透明な眼球になり、「いまわたしは無、わたしにはいっさいが見え、普遍者の流れがわたしの全身をめぐり、わたしは完全に神の一部」になるというプロセスをたどる。そのプロセスをエマソンは蛇の脱皮に喩えるのである。

エマソンは、森の中に入ると人間はおのれの年齢を脱ぎ捨てて子供に帰るというが、この年齢とは時間性の象徴であり、年齢を脱ぎ捨てるとは人間は時間の支配から脱却して永遠の世界に入るという意味である。アダムの墮罪の結果、死がこの世に罰としてもたらされ、人間が死すべき時間的存在になり下がったのであるから、罪と死、さらには罪と時間は表裏一体をなす関係にある。時間性とはモータリティのことであり、人間が不滅の存在ではなく死ぬべき運命にあることの象徴である。人間の世界にモータリティ、すなわち死をもたらせたのは罪であるから、この年齢を脱ぎ捨てるという行為は罪と死の支配からの脱却をも象徴することになる。さらに楽園に罪をもたらした張本人である蛇を喩えに用いている点も重要である。すでに触れたように、蛇が悪魔と結びつけられる不吉な動物と見なされることとなった原因はまさにこの脱皮である。脱皮をすることで永遠の生命をもっていると思われた蛇は、神にしか許されない永遠性を持つということで神と同様に超自然的存在である悪魔と結びつけられるようになった。その蛇をエマソンがここで持ち出した理由の一つは、『自然』にユニテリアニズムというキリスト教に対する絶縁状の意味を持たせる必要があったからであろう、という推測も成り立つ。が、しかし、これまでみてきたように、18世紀に入って蛇のイメージが大きく変わり、アメリカを象徴する動物とまで見なされるようになっていたという背景を考えれば、ここで蛇の脱皮を引き合いに出す際、エマソンの側にはそれほど大きな反キリスト教意識はなかったのかもしれない。ともあれ、蛇はエマソンにいたって人間の神格化を象徴するイメージにまで高められたのである。

さて、このエマソンの文章を意識していたに違いないと思われるロレンスは、アメリカ人がヨーロッパからアメリカへ渡ってきた理由を次のように指摘している。

彼らがアメリカにやって来た理由は二つあった。

- 一、ヨーロッパの古い意識を完全に脱皮する。
- 二、表面下に新しい皮膚を形成し、新しい形態を作る。この第二の過程は隠されたまま動いていた。

当然、この二つの過程が同時進行する。表面下に新しい皮膚が次第に作られてゆくと、古い皮膚が次第に脱ぎすてられていくのである。そしてこの不死の

蛇は、異様な紋様をした新しい皮膚の燦然たる光沢が自らをおおっていくのを感じ、時々大きな至福感を覚える。と思うと、ときには古い皮膚から脱出しようと、もう一度身をよじって皮膚を自分の身体から捨て去ろうとし、あたかも自分の内臓が引き裂かれるような気分の悪さを味わうこともあるのだ。

抜け出る！ 抜け出るんだ！ さまざまな腕曲的表現を使って彼は叫んでいる。だが、抜け出るためには、その前に、どうしても新しい皮膚を自分のモノとしなければならない。

そして、新しい皮膚が真に自分の皮膚になるためには、なんといっても古い皮膚から抜け出ていなければならない。

そのため彼は、引き裂かれ、分裂した一個の怪物の姿となっている。

これこそアメリカ人の本当の姿である。殻から抜け出ようと長時間のたうち続けている蛇に似ている。

なかには蛇でも脱皮できないことがある。古い皮膚を破ることができないのだ。そうなると蛇は、古い皮膚に包まれたまま、病気になる死をむかえる。そうなると新しい紋様は、誰も見るができない。(Studies 57)

ロレンスが指摘している古いヨーロッパの意識から新しいアメリカへの意識の変貌としての蛇の脱皮こそ、エマソンの文化的独立宣言にほかならない。エマソンは『自然』の冒頭をこう切り出している。

われわれの時代はふり返ってばかりいる。たとえば父祖の墓を建てる。あるいは伝記や歴史や批評を書く。われわれに先だつすべての世代は面と向かって神と自然を直視したが、われわれは彼らの目をとおしてだ。われわれだとて宇宙に対して独自な関係を結んでもいいではないか。われわれだとて伝来ののではなく、洞察の詩と哲学を、過去の宗教の歴史をではなく、われわれに対する啓示に基づく宗教を持ってもいいではないか。しばらくのあいだ自然の懐にいだかれてあり、その生命の豊かな川がわれわれをめぐりわれわれを貫ぬいて流れ、それが与える力によって、自然に比肩する行為へわれわれを誘えば、われわれだとて過去の干からびた白骨のなかを手探りし、あるいは生きているいまの世代を過去の色あせた衣裳で仮装させているにはおよぶまい。太陽はきょうも輝いている。野にはまだ羊毛もあり亜麻もある。新しい土地があり、新しい人間があり、新しい思想がある。われわれ自身の仕事と法則と礼拝を要求しようではないか。(Emerson 7)

イギリス製の衣服を破棄してホームスパンの衣装をまとうという独立戦争時代の戦意高揚運動を髣髴させながら、ヨーロッパの過去の干からびた骨をまさぐったり、現代の世代に色褪せた衣装をまとわせて仮装させるのではなく、アメリカの大地に育つ羊毛や亚麻製の服をまとうのではないかという訴えがエマソンの言う蛇の脱皮の背景にはある。ヨーロッパという罪と死と経験の世界からアメリカという無垢と永遠の世界への脱皮である。さらにエマソンによって人間の神格化というロマン主義的テーマを重ねられたことにより、蛇は神性を回復する。この蛇の脱皮こそがロレンスの言うアメリカ人の経験である。

ところでエマソンを常に反面教師として意識していたホーソーンはこの蛇の脱皮のメタファーを『緋文字』で巧みに利用している。詳細は稿を改めるが、森という自然の「無限の空間」の中で人間は蛇が脱皮するように時間性（モータリテイ）の衣を脱ぎ捨てて最終的には神になるというエマソンの主張をドラマ化してみせる。森の中でヘスターに「無限の空間」に罪の象徴である緋文字を捨てさせておきながら、「森には緋文字を隠す力はないのだわ」（Hawthorne 300）と言いながら再び胸につけ直させることによって、ホーソーンはエマソンのロマン主義的「人間の神格化」を退けるのである。

ホーソーンの場合、「若いグッドマン・ブラウン」にも見られたようにアメリカを舞台としながらもその描く世界はあくまでも聖書のメタファーによって支配された世界である。エマソンにしても、ソローというアメリカ・インディアン文化に大きな関心を寄せた人物が身近にいたにもかかわらず、その意識はやはり白人の意識を超えてはならず、直接的にアメリカ・インディアンの文化の影響が見られるわけではない。しかし、啓蒙主義の時代に高貴な野蛮人のイメージがヨーロッパ人の意識を大きく変え、やがてロマン主義の自然観に結実していった事実を省みれば、エマソンの思想もやはりロレンスの言う「地の霊」の影響を大きく受けた思想であると言えよう。

さて、以上、新大陸における「地の霊」の影響を蛇のイメージの変遷を通して検討してきたが、冒頭で述べたヨーロッパのヘレニズム世界に進出することによって白色化されたキリスト教が、新たに新大陸と遭遇したことにより再び有色化する可能性、あるいは必要性を強調したのはロレンスである。ロレンスは「アメリカよ、汝自身の声に耳を傾けよ」で、アメリカはアメリカ・インディアンの偉大で薄暗い大陸と一体化せねばならない、と訴える。

アメリカよ、今まで否定され、ほとんど壊滅され尽くしたと言ってもいい  
アメリカそのものに心を向けようではないか。アメリカ人は、今一度振り

返って、その暗い原初の大陸が持っている霊を捕らえなくてはならないのだ。ピルグリム・ファザーズやスペイン人に忌み嫌われ、悪魔と呼ばれ、野蛮なアメリカの黒い鬼神と呼ばれたもの、この偉大な原初の霊をこそアメリカ人はもう一度認め、受け入れなければならない。われわれの祖先が呪詛し悪魔と呼んだために、われわれの求めている神を見えなくしているのだ。アメリカ人はコルテスやコロンブスが殺してしまった生命の鼓動を取り戻す必要がある。偉大で美しい生の形態が完成を見ずに、モンテスマと共に崩壊してしまった。この生の形態をもう一度よみがえらせ完成する責任は、新しいアメリカ人に委ねられているのだ。全責任を負うべき時だ。  
(*Phoenix* 90-91 要約)

そのためにはヨーロッパの古い生の形態を超え出なければならない。ヨーロッパの古い道徳、倫理から離れ、古い感情や感受性の領域から離れることこそが急務である。古い感情はヨーロッパの美しい遺物の中に完全に硬化してしまっている。だからそれをヨーロッパに、古い掟や倫理規範とともに、生とは無関係なものとしてその埠外に置き去りにしてしまおう。新たな行為、生命の新たな進展に対して、アメリカ人は心構えをしなければならない。限界を越えて進まなければならない。「汝の住むべきところに向かって進んでいけ、アメリカよ。汝自身の声に耳を傾けよ。ヨーロッパには耳を傾けるな。」(*Phoenix* 91) とロレンスは声を大にして訴える。

「はるばるアパッチの土地へやってきて、初めてアメリカ・インディアンと接触した時のタバをわたしは決して忘れはしないだろう。現実には、わたしの予測していたものとは違っていた。ちょっとした衝撃だった。またもやわたしの魂の中で何か壊れてしまった。そして失われた過去、太古の闇、今まで気づかなかった恐怖、これまでにない根源の悲しみ、太古からある古い豊かさに触れたのだった。」とロレンスはアメリカ・インディアンとの出会いの衝撃を語る。  
(*Phoenix* 95)

ロレンスにとってニュー・メキシコは最大の体験であった。ニュー・メキシコは文明化された物質と機械の大いなる現代という時代からロレンスを解放した。それまでもロレンスはオーストラリアで貴重な体験をしていた。が、ニュー・メキシコはオーストラリアとはまるで異なる世界であった。輝かしく誇り高く朝日がサンタ・フェ砂漠の空高くに輝いているのを見た瞬間、ロレンスの魂の中で何か静かに立ち上がった。オーストラリアの朝日の光に包まれていると夢の中に入り込んでしまうのだが、ニュー・メキシコの壮大で猛々しい朝日に照らされ

ていると、目覚めさせられる、魂の新たな部分がむっくりと起き上がり、古い世界が退き、代わって新しい世界が到来する、とロレンスは言う。

ロレンスが永続的な宗教感情を感得しえたのは、ニュー・メキシコへ行き、そこで古くからの人間臭い部族体験の内へ深く入り込んだ時であった。ロレンスという一人のヨーロッパ人が、古い地中海地方や東洋へ立ち寄った後、アメリカで真の宗教体験を得、生きた宗教感覚をアメリカ・インディアンから得たのである。しかし、ロレンスは、セロファンの外側にあるニュー・メキシコの日常的、表面的な様相を取り上げるつもりはない、表面の下にある世界へと入っていききたいのだ、と言う。ロレンスの関心を捉えて離さないものは、アメリカ・インディアン本来の姿なのであり、ロレンスが本来のアメリカ・インディアンの姿であると思う、古い古代部族に連なる本体であり、宗教的な主体なのである。そのロレンスにとって、アメリカ・インディアンは、ギリシア人よりも、いやインド人やヨーロッパ人、さらにエジプト人よりもずっと古いように思われる。南部に住んでいて、タブーやトーテムの段階を超えて文明化されてはいるが、真に宗教的人間であるアメリカ・インディアンは、たぶん、宗教ということばの最も古い意味で、そして最も深い意味で、宗教的であり、今なお生きている最も宗教的に奥深い人種の生き残りなのだ。ある部族がその宗教を保持し、宗教上の儀式を保ち続け、その部族の各人がその儀式に加わっている間は、部族としての一体性と脈々と生き続ける伝統とが存在しうるのである。その伝統は、キリストの誕生はおろか、ピラミッドを超え、モーゼを超えたはるかかなたまで遡るものである。かつて地上を支配した巨大な古い宗教は、ニュー・メキシコにおいて、今なお続いている儀式の中にその名残をとどめている。それは、まだ宗教とは言えないオーストラリア原住民のタブーやトーテムを除けば、たぶん、世界のあらゆる宗教の中で最も古いものなのだ、とロレンスは言う。

それは宏大な古い宗教であって、われわれの知っているどの宗教よりも偉大であり、宗教そのものがあらわにむき出しのまま顕われている。神はいないし、神という観念も存在しない。あらゆるものが神なのだ。しかしそれは、われわれもよく知っている「神は、あらゆるところに、あらゆるものの中に、存在している」と、唱えているパンセイズムなどではない。最古の宗教においてはあらゆるものが生きていた。超自然的な形ではなく、自然のままに生きていた。ただ、生の深い深い流れ、この上なく宏大な生の顫動があったのだ。だから岩も生きていた。だが山は、岩よりもずっと深く宏大な生を持っていた。[……] 仲介物や仲介者なしに、真に赤裸々な接触を得ようとする

努力が宗教の根本の意味なのだ。[……] それは宏大で純粋な宗教であり、偶像とか聖像を持たず、精神的な影像すらもない。それは最古の宗教であり、万民に共通の宇宙宗教であって、特定の神や救世主、宗教体系に分裂していない状態のものである。それは神なる観念の存在する以前のものであり、それゆえ神を奉るあらゆる宗教よりも偉大で深遠である。(Phoenix 146-47)

ニュー・メキシコではこの神の宗教が今なお残っていて、短い期間ではあったが、それをロレンスが啓示として体験するには十分に長い期間であった。

しかしながら、現実とは言えば、最新の民主主義が最古の宗教を追い出しにかかっている。この最古の宗教が放逐されてしまうやいなや、民主主義とそのすべての付属物が崩壊してしまうだろう。だが、人間が戦争などしなかった時代から今日までずっと伝わってきた最古の宗教がもう一度よみがえるだろうという気がする。摩天楼はアザミの冠毛のごとく風に乗って飛び散っていき、真のアメリカであるニュー・メキシコがふたたびそれ本来の道を進み始めるだろう。今は空位時代なのだ。(Phoenix 147)

ロレンスは『羽蛇』でこの「今は空位時代なのだ」というテーマに取り組む。『羽蛇』は最初『ケツアルコアトル』のタイトルで執筆されたが、その後書き改められ、タイトルも『羽蛇』に改められた。アメリカ・インディアンが神として崇める動物の代表格は鷲と蛇であるが、このケツアルコアトルの名前は、鳥を意味するケツアルと蛇を意味するコアトルとからなり、その双方を兼ね備えた神である。

この作品でロレンスは、メキシコの革命という政治問題とケツアルコアトル神話とを融合させようと試みたが、その試みは必ずしも成功しているとは言えず、いわば原石をそのまま提示している感が否めない。作品としての評価はロレンスの長編作品中最悪と言っても差し支えなさそうだが、作品のテーマは純粋に宗教的な探求である。

メキシコに滞在しているヒロインのケイトは、しばしばメキシコが自分の運命の前途に、まるで宿命のように横たわっていることを感じる。しかも「それは何かひどく重苦しく、押しひしぐような、自ら身をもたげかねるかに見える巨大な蛇のとぐろのようなものだった。」メキシコは女がひとりであるのには楽な国ではないと思うケイトは、メキシコからののがれ去ろうとして、羽ばたくのだが、「胴体を蛇にまかれた小鳥のような気持ち」に襲われる。「メキシコは、蛇であった。この国の奇妙な魔力は、人間を下へ下へ引きずりこんでゆくようだった。」ロレンス

はヨーロッパの意識を象徴するケイトを小鳥に喩え、そのケイトを捕らえて離さないメキシコを、さらにはアメリカ大陸を蛇に喩える。

そして時折りケイトはアメリカ大陸の謎を解く手がかりを求めて首をひねる。

本当にアメリカ大陸は巨大な死の大陸であって、ヨーロッパ大陸やアジア大陸、さらにアフリカ大陸の「肯定」に対する巨大な「否定」ではないのだろうか。じつのところ、アメリカ大陸は、創造的な諸大陸から来た人びとが溶融されて、新しい創造へ吹き分けられず、等質の死へ還元される巨大なルツボであろうか？ アメリカ大陸は巨大な破滅の大陸であって、そのすべての住民は秘教的な破壊の手先なのであるか！ 人間内部の創造された魂を、ひっきりなしにむしりとりつつけ、しまいには生きている芽をむしりとり、人間を機械的な自動的反抗の生物にする手先、生きとし生ける自然的な生物から中枢をむしりとする靈感、欲望だけを持った手先なのであるか。

これがアメリカ大陸の謎を解く手がかりであろうか、と時折りケイトは頭をひねる。アメリカ大陸は巨大な死の大陸、他の諸大陸がつくりあげたものをまた破壊する大陸であろうか？ 地の霊が神の顔から目をつつき出すことだけに必死になっている大陸、それがアメリカ大陸であろうか？ (*Plumed Serpent* 82-83)

アメリカ大陸には地の霊が厳然として存在している。その地の霊がヨーロッパ大陸から渡ってきた白い文明、あるいはその根底にあるキリスト教精神を破壊しようとしているのであろうか？ という不安がケイトを襲う。

確かにヨーロッパ人はアメリカ大陸を征服した。アメリカ・インディアンは征服された人種であり、コルテスは、鉄の踵と鉄の意志をもって、征服者としてやって来た。これは紛れもない事実である。

だが、征服された人種は、新しい靈感をもって融和させないかぎり、奇怪な夜の静寂と絶望的な意志の暗鬱さのなかに、徐々に征服者の血を吸い取る。したがって今日、メキシコにおける征服者の人種は、柔弱な骨のない子孫となり、無力な絶望の底で悲鳴をあげているのである。

これがこの大陸の暗い否定というものであろうか？

メキシコの国立博物館の石像を見るたびに、ケイトは暗鬱と戦慄をおぼえずにはいられない。排泄物のようにとぐろを巻いている蛇、どんな戦慄の夢想も圧倒する毒牙と翼をそなえた蛇。そのようなものばかりなのだ。サン・

フアン・テオティワカンの重々しくどっしりしたピラミッド、あらゆる蛇族中の王者である蛇が花輪のように巻いているケツアルコアトルの神殿、この蛇の巨大な毒牙は、これを造った人間が生きていた悠遠の古代と変わりなく、今日でも白く清浄である。この蛇は死んではいないのだ。この森羅万象を巻いているメキシコの恐怖の竜は、スペイン人の教会のように死滅してはいないのだ。(Plumed Serpent 84-85)

地の霊ケツアルコアトルは死んではいない、厳然として生き延びている。死んだのはヨーロッパ人が運んできた白い教会なのだ。

イエスにしても、メキシコ人にとっては、救世主でも何でもない。イエスはメキシコ人の墓のなかの死んだ神なのだ。坑夫が主坑道の土の崩壊によって地下に埋められるように、あらゆる民族がメキシコ人の過去のゆるやかな崩壊の下に埋められてしまうのだ。だれか救世主が、救う者が現われて、太陽への新しい道を切り開かないかぎりには。

だが、白人はメキシコになんの救いももたらさなかった。逆に、白人は自分自身が、自分の死んだ神や征服された人種ともともに、ついに墓場のなかに閉じこめられたのに気づいているのだ。

これが現在の実情なのである。(Plumed Serpent 145)

こうして新大陸を白色化しようと試みた白い文明の再有色が始まる。アメリカ大陸の墓の中で死んだ神となったイエスは、太陽への新しい道を切り開くために現れた救世主、ケツアルコアトルに席を譲る。

そして一つの微かな星が、ものうげにためらいながら、通りすぎようと待っていた。

われ〔ケツアルコアトル〕は声高く呼ばわった——『だれなのか？』

『わが名はイエス、われはマリアの子。

いまやわれは帰路にある。

わが母なる月はいと暗い。

兄弟、ケツアルコアトルよ

荒ぶる熱き太陽をおしとめよ。

われの通る間、陰をもって縛りたまえ。

われを帰らせたまえ』(Plumed Serpent 243)

イエスからケツアルコアトルへの救済主交代の預言が語られる、神話と現実がない交ぜとなった世界アメリカ大陸で、ケイトは自分が別の世界の人間であることを思い知らされる。ケイトはアメリカ大陸の上空に羽ばたくような、こんなすさまじい自然的な意志の世界の人間ではなかった。年がら年中、意志、意志、意志、悔恨も仮借もない。これがケイトにとってのアメリカ大陸であった。「絶対的な意志！」(Plumed Serpent 413) これがケイトにとってのアメリカ大陸のすべてである。それまでは怖るべきものに思っていた「神の意志！」(Plumed Serpent 413) ということばの意味を、ケイトは理解しはじめる。森羅万象の中心から、神秘的な絶大な意志が、すさまじい光線と震動を、膨大なタコのように送り出しており、その震動の先端で男どもが、創造された男どもが、不気味な潜勢力につつまれて立ち、神か悪魔のように、その意志に対して意志をもって呼応している。

かくして新しい意識から古い意識への交代劇が始まる。アメリカ大陸では、古いノアの洪水以前の投影が強く、人類の有史時代はケイトの意識から消えうせ、ケイトは「古い意識の様式、古い神秘的な意志、死への無関心、大脳系ではなく脊椎系の微妙な、古い神秘的な意識」に近づきはじめていく。それは「人間の心と力がまだ血液と背骨のなかにあつて、強力な脊椎から人間と人間、人間と獣とのあいだに不思議な、神秘的な相互交流がおこなわれた時代」である。

メキシコ人はなおこの時代にとどまっていた。アメリカ大陸の土着民は、今も洪水以前の世界、知的な精神的な世界が出現する以前の様式に属している。したがって、アメリカ大陸では、白人の知的な精神的生命は処女地に大きな雑草を投げ入れたように、急激に生い茂る。恐らくまた急速にしおれるだろう。巨大な死が来る。そしてその後には生成してくるのは、新しい胚種、新しい人間生活の構想だろう。それは古い血液や脊椎の意識と、白人の現在の知的な精神的な意識との融合から、発展してくるであろう。二つのものが、一つの新しいものへ解消的發展をとげるのである。

ケイトは何よりもアイルランド気質が強く、その魂の底には、原始的なケルト族、あるいはイベリア種族の幽暗な神秘主義がひそんでいた。それは記憶の残花、洪水以前の世界から生きつづけていて、消滅されないものなのだ。ひとりよがりの公明正大な現代世界よりも古く、もっと永久的に強力なものなのである。(Plumed Serpent 444)

ケイトの中で再び目覚めようとしている古い意識とは古代ケルトの意識である。

ノアの洪水以前の世界から生きつづけていて、ひとりよがりの公明正大な現代世界よりも古く、もっと永久的に強力な原始的なケルトの幽暗な神秘主義である。

5世紀における聖パトリックによるキリスト教伝道を境に、古代ケルトの意識は消滅し、以来アイルランドは白いキリスト教世界へと変貌を遂げていった。この聖パトリックによるキリスト教伝道の偉業はアイルランドからの蛇の追放としても語られ、伝説では、巨大な蛇という説もある戦いと死の神クロウ・クルーウァッハの像を聖パトリックが打ち壊したとされる。その蛇に象徴される古代ケルトの意識、それがケイトの身内で蘇るのである。それゆえ

ラモンが実現しようとしていることが、ケイトには多少ともわかってきた——この融合！ シブリアーノがケイトにとって、自分のすべての過去、夫たちや子供たちよりも、意味ぶかいものになったのは、どんな理由からか、ケイトにはわかってきた。それは古い洪水以前の血の男性が、ケイトとの調和的結合へとびこんできたからだった。みずから気づかなかったものの、ケイトの最深奥の血が、これをもとめて絶えず波打っていたのであった。  
(*Plumed Serpent* 444)

シブリアーノは、ロレンスの言うあらわにむき出しのまま顕われている宗教そのものの、キリストの誕生はおろか、ピラミッドを越え、モーセを超えたはるかかなたまでさかのぼる、かつて地上を支配した巨大な古い宗教の世界に生きる人間、「洪水以前の地の男性」にほかならない。そのシブリアーノが、「何よりもアイルランド気質が強く、その魂の底には」、「記憶の残花、洪水以前の世界から生きつづけていて、消滅されないもの」である「原始的なケルト族、あるいはイベリア種族の幽暗な神秘主義がひそんでい」るケイトとの調和的結合へと飛び込んでくるのである。

ロレンスはキリスト教化された「科学的な、公明正大なヨーロッパは、もういちど古い巨人たちと交わらなければならない」と言う。

アイルランドはあの古い神秘的な壮麗な生き方を忘れようとしないうし、忘れることはできないだろう。トゥアサ・デ・ダナーン族は西方の海の底に沈んでいるかもしれない。だが、生きている血の底にも沈んでいて、けっして黙殺されてはいない。いまやふたたび出現して、新しい結合を成しとげなければならないのだ。科学的な、公明正大なヨーロッパは、もういちど古い巨人たちと交わらねばならないのである。

だが、この変化はあまりに早く、急激に起こってはならない。さもなければ

ば、わたしは破裂して死んでしまうだろう、とケイトは思った。古い様式には、ぞっとするものがある。重々しい足どりで大地をふむ原始的なメキシコの精神は、ぞっとケイトをおびえさせ、つむじ曲りにするかもわからなかった。希望や躍進がなく、ゆるやかに、屈せず、がんばってゆく原始的なアメリカ大陸の人びとの生き方は、ときどきケイトを気が狂いそうな思いにした。個人的な生存を、つまらぬものと見なしながら、ゆるやかに、暗黒の幾世紀を生き抜いてきた暗鬱な意志！ 人間的であるよりも、悪魔的なねばり強さ。そして突発的に現わす獰猛さ、計り知れない怖ろしいものを呼びさます突発的な死への渴望。[……]

希望！ 希望！ これらの暗黒の魂のうちに希望を復活させ、新しい人間世界への唯一の段階である結合を実現することが、はたして可能であろうか？ (*Plumed Serpent* 444-45)

ケイトの中で目覚めていく古い意識とシプリアーノの中に流れている洪水以前の血との結合を通して、ロレンスが求めているのはキリスト教以前の真の宗教への回帰である。ロレンス自身この結合の実現が果たして可能であると信じていたのかどうかの答えは、『ケツアルコアトル』を『羽蛇』に書き改める際に加えた結末の変化に見取ることができよう。

ところで、ケツアルコアトルとキリストの関係が論じられることがある。その多くはケツアルコアトル神話をスペイン人がキリスト教化して記録に残したことを指摘するものだが、逆パターンとしてケツアルコアトルとモルモン教会の関係がしばしば指摘される。モルモン教会の側でも正式の見解としてではないようだが、キリストはケツアルコアトルであるとの見解が発表されている(例えば Johnson 参照)。征服した神が被征服者の神々に征服・教化されていった一例と言えよう。

キリスト教が有色人種の宗教であるという意識が、果たして中世以降の西洋文化の中に存在していたのかどうかはなはだ心もとない。繰り返しを恐れずに言えば、キリストのみに限らず、旧約新約を問わず聖書に登場する人物を白人の姿で描いてきた西洋の美術に如実に現れているとおり、西洋世界はキリスト教を白い西洋の宗教と見なしてきたのではないか。サイドのオリエンタリズムにしても、キリスト教西洋世界対イスラム教東洋世界という構図の中で、前者が白人の文化であり、後者が有色人種の文化であるという色分けが暗黙のうちに出来上がっていたのではないか。だからこそ 2001 年 3 月の BBC の放送が衝撃を与えたのではないか。文字通り洋の東西を問わず、キリスト教は白人の宗教であると見なされてきたのではないだろうか。

中世以降のキリスト教はヘレニズム化されたヘブライズムであった。そのヘレニズム化のプロセスが「地の霊」の作用による変容であったのだが、ヘレニズムの色に染まったヘブライズムは、意識的にか無意識的にか、その出自を隠してきた。そのキリスト教が大西洋を渡って再び有色文化と遭遇したとき、キリスト教は完全に白い宗教として、特に北アメリカではアメリカ・インディアンの文化を白いペンキで塗りつぶしにかかった。ところが、坩堝の中で溶けて合金となる金属のいずれもがその性質を変えて新しい合金となるように、このアメリカというメルティング・ポットの中での壮大な文化のアマルガメーションにおいてもどちらかの文化が無傷のまま他の文化を飲み込むことはできなかった。

自然児ハックのように、ヨーロッパから渡ってきたアメリカ人の運命はサリーおばさんのキリスト教世界を出て「インディアン居住地」に赴くことである。

ぼくはほかの連中よりも先にインディアン居住地に出かけなければならないと思う。サリーおばさんがぼくを養子にして、人並みの人間にしようとしているからだ。そして、ぼくにはそんな辛抱はできないからだ。前にもう経験済みである。(Twain 912)

フォークナーはさらに「熊」で、森の主である大熊オールド・ベンが死んだ後に原始の森の主としてガラガラヘビを登場させている。

[……]この老いぼれめ、大地のここかしこに巣くう年老いて呪われたやつ、宿命をになう孤独なやつめ [……] あらゆる知恵と [……] 浮浪性と死を呼びおこすにの持主。ついにそいつは動いた。頭は別だ。鎌首をもち上げたその頭の高さは、そいつが彼からするすると遠のいていくときも変らなかつた [……] ゆっくりと遠ざかるその頭の背後で移動し流動するあの影の全体が、実はただ一匹の蛇だということを彼は信じることができなかった、動いているなど思ううちにそいつは消えた、彼はようやく上げていた左足をおろしたが、自らはそのことに気づかず、かつて六年前のあの日の午後、サムが彼を荒野に導いて教えてくれたとおりに片手をあげて立っていた、こうして彼はもはや子供であることをやめ、あの日サムが語ったあの言葉を、彼もわれ知らず口にするのだった、「かしらよ」、彼はいった、「じいさまよ。」(Faulkner 318-19)

「熊」は少年アイクのイニシエーション物語である。そのアイクを大自然の力の中に導いていくのはアメリカ・インディアンのサム・ファーザーズである。そして大熊オールド・ベン、猟犬ライオン、サムが死んだ後、アイクは一人森の中に入り、ガラガラヘビと出会うのである。ガラガラヘビはまさしく大自然の力を象徴する「かしら」であり「じいさま」である。アイクのイニシエーションは単なる大人へのイニシエーションではない。時計も磁石も捨てなければ参入することのできない世界へのイニシエーションなのである。

時間を馴致する道具としての時計、空間を馴致する道具としての磁石は、自然を飼いならして築き上げた白い文明の象徴と言えよう。その白い文明の象徴を捨て去らなければ入ることのできない世界、それが最終的に新大陸と遭遇した白い人種が赴かねばならない世界である。この世界はロレンスが『アポカリプス』で言及したコスモスでもある。

さて、ふたたびアポカリプスに戻るが、この書に対してわれわれはまたもや二重の印象を懐かせられる。開巻ただちに吾々の眼を奪うものは、コスモスの力と壮大に酔っていた古代異教的光輝と、その宇宙のうちの星の一つとして在った人間とである。突如としてわれわれはヨハネの時代をはるか遠ざかる昔の、こうした古代異教世界への郷愁をふたたび感じるのだ。それは現在の弱々しい生活のけちくさい個人的葛藤からのがれて、人間がいまだ「怖れ」を知らなかったあの遠い世界に復帰しようとする憧れである。われわれは、小さな硬い殻の自働的「ユニヴァース」を去って、「未開の」異教徒たちが棲んでいた偉大にして生氣あるコスモスにかえりたいのだ。

異教の徒とわれわれとの間に横たわる最も大きな相違は、おそらくコスモスへの両者の結びつきのちがいにあろう。われわれにあってはすべてが個人的である、風景と大空、こうしたものまでが個人的生活の甘たるい背景になっている。が、ただそれだけなのだ。科学者のいうユニヴァースも、われわれの個人性に較べてどれほど大きな拮りがあるというのか。ところが異教徒にとっては、風景とか個人的背景とかいうものはまささほど重要なものではなかった。が、しかしコスモスは真に切実な存在だったのである。人間はコスモスと共に生き、それが自我よりも偉大なものであることを知っていた。(Apocalypse 75-76)

このコスモスでは、当然のことながら、蛇はまだ悪魔の化身に墮してはいない。かくして未開の異教徒たちが棲んでいた偉大にして生氣あるコスモスへの帰還を

無事果たした白い人種は、アメリカのアダムへと生まれ変わるのである。

オゴルマンは四大陸を四人の人間に喩えながら、アメリカがヨーロッパの歴史的地平に出現した状況を説明した——アメリカという突然現れた新来者は、人間性の認められない歪んだ怪物のような被造物として、あるいはせいぜいのところその瞬間までの生活には真の人間の意義がなかった被造物として、現われることになるが、新来者は他の三者の社会に加わったとき、自身の従来の個性的な精神的存在を剥脱され、無へとおとしめられる。残された唯一の可能性とは、いつの日にかヨーロッパ的基準にしたがった意義のある生活を送る現実的人間になれるというものである。ヨーロッパのレプリカとなることによるのみアメリカは共同社会の一員、つまり世界の精神的意味における人間になれる。こうすることによってのみ、アメリカは自分自身になれる。「新世界」という概念は「旧」世界であるヨーロッパのレプリカへと自らを転化できる限りにおいて世界でありうる。アメリカは、発見されたのではなく発明されたのであり、しかもその発明者のイメージにより発明された。これが有名なオゴルマンのアメリカ発明説であるが(オゴルマン 177-78, 185-86)、このオゴルマンの説には修正を加える必要がありはしないか。少なくとも本稿での議論に基づいて言えば、単なるヨーロッパのレプリカではないアメリカが登場していることは確かである。

16世紀初頭以来、オゴルマンも述べているようにアメリカ・インディアン祖先はベーリング地峡を渡ったアジア人であったと見なされてきた。つまり純血のオリエン特である。そして冒頭に引いたサイドによれば、オリエン特とは、むしろヨーロッパ人の頭のなかで作り出されたものであり、ヨーロッパの一種の代理物であり隠された自己でさえある。オリエン特からみずからを疎外することによって、みずからの力とアイデンティティーとを獲得したヨーロッパが新大陸というオリエン特と遭遇した。新大陸をヨーロッパが征服したのとは裏腹に、ケツァルコアトルに代表される新大陸の文明に知らず知らず影響を受け、新大陸へ導入されたキリスト教が有色化し、黒いキリスト像が生まれた。あるいは、ヨーロッパの新大陸との出会いは、キリスト教徒としての白人のアイデンティティーがオリエン特であることの発見だったと言ってもよいかもしれない。ヨーロッパの新大陸との遭遇は、黄色人種、黒人、白人の三種類の人種に分化する以前、すなわち洪水以前の世界への回帰のヴィジョンを生み出した。そうして白い想像力によって生み出された理想的人間像が高貴なる野蛮人であり、アメリカのアダムであった。地の霊が勝利を収め、征服した神が被征服者の神々によって征服・教化されていったのである。

## 引証資料リスト

- ド・フリース, アト. 『イメージ・シンボル事典』. 山下主一郎主幹. 荒このみ他訳. 大修館書店, 1984年.
- Emerson, Ralph Waldo. *Essays and Lectures*. Ed. Joel Porte. New York: Literary Classics of the United States, 1983.
- Faulkner, William. *The Portable Faulkner*. Revised and Expanded ed. Ed. Malcolm Cowley. New York: The Viking Press, 1974.
- Fiedler, Leslie A. *The Return of the Vanishing American*. New York: Stein and Day, 1968.
- Hawthorne, Nathaniel. *Nathaniel Hawthorne: Novels*. Ed. Millicent Bell. New York: Literary Classics of the United States, 1983.
- Johnson, Eric. *Quetzalcoatl--Jesus in the Americas?* El Cajon: Mormonism Research Ministry, 1993.
- 小林致広. 「神々を媒介とした出会い——インディオと侵略者の対話——」. 『歴史評論』. 第481号 (1990年), 45-54.
- Lawrence, D. H. *Apocalypse*. London: Penguin Books, 1995.
- . *Kangaroo*. London: Martin Secker, 1923.
- . *Phoenix: The Posthumous Papers of D. H. Lawrence*. Ed. Edward D. McDonald. New York: The Viking Press, 1936.
- . *The Plumed Serpent*. London: Martin Secker, 1926.
- . *Studies in Classic American Literature*. Ed. Ezra Greenspan, Lindeth Vasey and John Worthen. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Longfellow, Henry Wadsworth. *Evangeline, The Song of Hiawatha and The Courtship of Miles Standish*. New York: AMS, 1966.
- Melville, Herman. Herman Melville: *Typee, Omoo, Mardi*. Ed. G. Thomas Tanselle. New York: Literary Classics of the United States, 1982.
- Miller, Perry, ed. *The American Puritans: Their Prose and Poetry*. Garden City: Doubleday & Company, 1956.
- オゴルマン, エドモンド. 『アメリカは発明された』. 青木芳夫訳. 日本経済評論社, 1999年.
- Said, Edward W. *Orientalism*. New York: Random House, 1979.
- Thoreau, Henry David. *Henry David Thoreau*. Ed. Robert E. Sayre. New York: Literary Classics of the United States, 1985.
- Twain, Mark. *Mark Twain: Mississippi Writings*. Ed. Guy Cardwell. New York: Literary Classics of the United States, 1982.

引用に当たっては既訳を借用させていただいたが、引用の都合により変更を加えた場合もある点をお断りしておく。

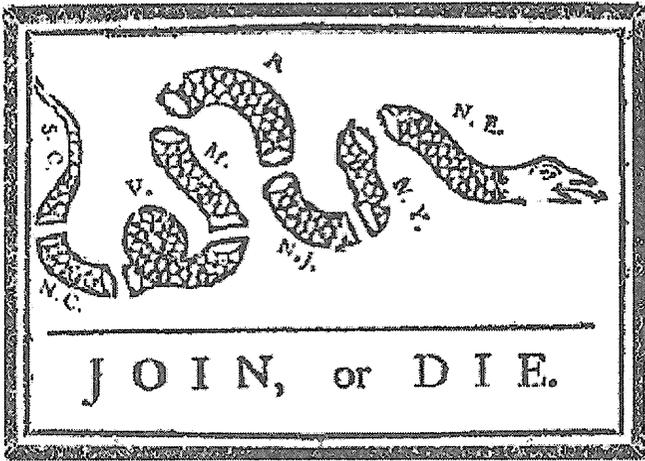


図版 1 エスキューラスの黒いキリスト像

1594年、先住民がこの地にキリストが降臨するのを見たことにより興った町。いわばメキシコのグァダルupesの聖母のようなものである。こういう奇跡のキリスト像や聖母像は、中米には多い。

図版 2 BBC 放送のコンピュータ・グラフィックスによるイエス像  
(2001年3月27日放送)

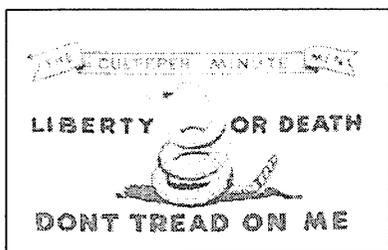




図版3 ベンジャミン・フランクリン

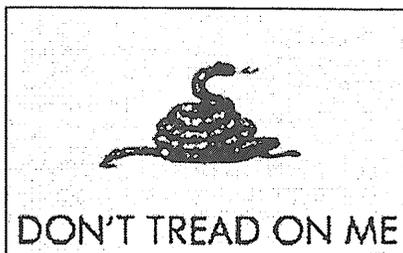


図版4 ポール・リヴィア『マサチューセッツ・スパイ』

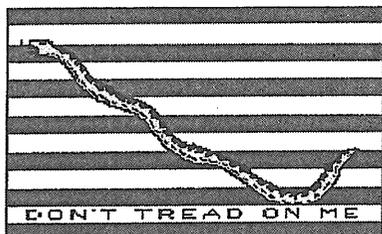


図版 5-1

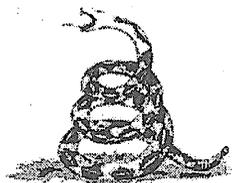
いずれもギャズデン・フラッグ



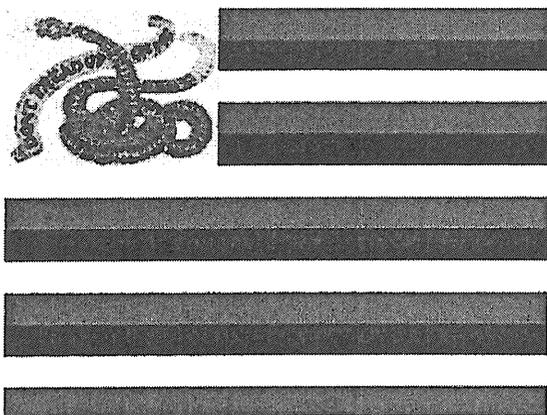
図版 5-2



図版 5-3 独立戦争時の海軍旗



図版 5-4 独立戦争時のミニット・マンの旗としてポッシングが収録しているが現物は存在しない



図版 5-5 南北戦争時南部離脱派の旗の1つとされているもの



## ＜ペンタゴン＞とアメリカ人の表象

入子文子

はじめに

19世紀半ばのアメリカの作家ナサニエル・ホーソーンは『ピーター・パーレー世界誌』において、アメリカをアダムとイヴから生まれた地球家族の集合場所と考えている。チグリス・ユーフラテスから発してアジアを経て東回りで移住して行った各人種と、ヨーロッパ、アフリカを経て西回りで移住していった各人種の統合体とみなしていたのである。このようにしてアメリカ人を広い意味での人種と捉えるならば、表象としてのアメリカ人はどのように解されるのであろうか。シンポジウムはホーソーンの人種観を足がかりに論を立ち上げ、アメリカ人の表象の問題を主体に論じた。そのためタイトルにずれが生じていることをお断りしておきたい。

2001年9月11日、ニューヨーク世界貿易センタービルに突入する飛行機の映像がテレビの画面に映し出された時、私の脳裏に国防総省＜ペンタゴン＞の建物がよぎった。不吉な予感である。果して間もなく＜ペンタゴン＞は、無惨な姿を晒した。折から文部省私学学術推進事業関西大学学術フロンティア・センターの一環として進められていた関西大学工学部主導の都市計画研究プロジェクトの一員として、五年に亘る研究の最終年度を迎えてまとめの段階に入っていた。その矢先の事である。私の担当するテーマは、＜ペンタゴン＞に関する研究であった。偶然とはいえ不思議な一致である。不吉な予感は、＜ペンタゴン＞に関して最も鋭敏になっていた私の想像力によって喚起されたのであった。

＜ペンタゴン＞はアメリカの軍事力の中枢である。アメリカの武力の象徴でもある。これを破壊することは、軍事力の機能停止のためにも軍事力の象徴破壊のためにも、アメリカに多大なダメージを与える事になる。しかし、アメリカ経済を象徴する都市ニューヨークに聳える世界貿易センタービルという構築物が、経済的に繁栄するアメリカ人の表象として攻撃を受けたとすれば、アメリカ政治を象徴する都市ワシントン DC で攻撃すべき構築物は、何といたってもアメリカ政治を象徴する国会議事堂であるはずだ。自由の女神を頂に飾る、ドームを冠した壮麗な白亜の建物は、アメリカ人の総体であるアメリカ合衆国の象徴として堂々と聳えているではないか。国会議事堂を破棄することこそが、アメリカ人の精神に計り知れない衝撃を与えることになったのではないかと。

もかかわらず、何故＜ペンタゴン＞のごとく地味な構築物が標的になったのであろうか。

このことを考える時、攻撃を仕掛けたのがイスラム教を信じる人達であったことを念頭におく必要がある。宮崎興二も言うように彼らは植物を除く生物体の借形を好まず（宮崎 91）、刻まれた具象の像を拝むことを禁じられている。モスクを埋め尽くす抽象的にして絢爛豪華な幾何学模様の聖性に、特別敏感な人種なのである。古代ローマ滅亡後、イスラム圏に流入したプラトン思想が、その文化に色濃く反映したとも言われる。彼等は、単に＜ペンタゴン＞をアメリカ陸海軍総司令部という軍事の中枢として見ただけではなく、その構築物の五角形の幾何学形態をアメリカ人の精神の神聖の表象と見たのではないか。しかし不思議なことに、事件後のメディアは、＜ペンタゴン＞という＜もの＞の、五角形の形態の＜意味＞については黙して語らない。

この小論は、＜ペンタゴン＞という五角形の構築物が、如何にアメリカ人の精神の神聖を表象するかを考察することを目的とする。なお、ここでアメリカ人と言う時、広い意味での人種を意味し、総体としてのアメリカ人即ちアメリカ合衆国にも敷衍するものとする。

### ＜ペンタゴン＞——五角形の構築物

時は遡り 1998 年夏のこと、私は、ポトマック河を挟んでワシントン DC と対峙するヴァージニア州アーリントン地区に＜ペンタゴン＞を訪れていた。「国防総省」という、いかにも厳めしいお役所、日本ではさしずめ入場お断りだ。だが、さすがは民主主義の国アメリカ、私のようなお上りの<sup>のぼ</sup>さんでも、パスポートと X 線による所持品検査のみで入場を許可された。一見してアングロ・サクソン系と分かる色の白い軍人さんの、いかにも軍隊での訓練を思わせる見事な歩調の、しかも後ろ向きの行進による案内で、省内の廊下を一巡。開け放たれたドアから各部屋の様子が見て取れ、写真撮影も可能である。ここを訪れてまず驚いたのは、誰にも開放的なアメリカ人の、この懐の大きさである。

＜ペンタゴン＞の名の如く、この建物は五角形（図 1）。1941 年の初め、太平洋戦争を勝ち抜くために大統領による国会での要請で始まり、1943 年、突貫工事で竣工した。急いで買い求めたパンフレットによれば、この建物が目指すのは、「美ではなく機能」（Scoggan 6）。五角形の形態は当初予定の敷地の不規則な形に合致させるための工夫の偶然の賜と言う（Scoggan 4-6）。

実際ペンタゴンは機能的に出来ている。靴屋からスポーツ・ジムまで生活のた

めのあらゆる物が揃い、聖職者常駐の礼拝堂まで備わり、さながら一つの都市の観を呈しているのである (Scoggan 4・6)。しかし、五階建て、五角形、リング間に五層の入れ子をなす廊下、そして真ん中の五エーカーの緑の中庭とあっては、<五>に拘り過ぎではないか。都市も建物も中味を入れる容器、人間で言えば身体にあたる。とすればそこには魂が入っているはずである。

<ペンタゴン>のあるアーリントン地区は、コロンヴィア特別区の外ではあるが、両地区はほぼ一体とみなされる (図2)。南北戦争で命を落した兵士や、ケネディー大統領夫妻を始めアメリカ合衆国の要人達の眠るアーリントン墓地 (南軍総司令官リー将軍のプランテーション跡地) の丘の上の、リー将軍旧屋敷前の一等地に、総体としてのアメリカ人の表象である首都ワシントン DC の都市計画 (図2) を担ったピエール・ランファンの立派な墓石 (トゥームストーン) が置かれ、ポトマック河越しに特別区を見晴らかしている (図3)。北軍のワシントン総司令官のもとで働いたフランス軍人にして建築家の墓である。アメリカ人の表象ワシントン DC が、ランファンの基本理念に立ち戻っては入念に都市づくりを進めてきたことを考えると (入子 39-52)、その一環である<ペンタゴン>の建物も同一理念に基づくと考えられる。<五>に拘るペンタゴンの構造には、ランファンの何らかの基本理念が宿り、アメリカ人の表象としての重要な<意味>が内在しているのではないか。(『アメリカを読む』)。事実、五角形はある時期からアメリカ人の表象としての意味を帯びてくる。アメリカ国璽のアメリカの星が五角星と決まる頃からであろう。

#### アメリカの旗のあゆみ

アメリカ人の表象であるアメリカ国旗の図柄を構成する五角星は、いつ決まったのであろうか。その論に入る前に、S.M.グインターを参考にアメリカ国旗の前史として、植民地時代からの旗の変遷を辿ってみる。図柄が様々に変化していることが見て取れる。17世紀アメリカの、国王の権威下にある政府施設や砦では、ユニオン・ジャックが翻っていた。しかしこの慣例は常に従われるわけではなかった。第一世代のピューリタン指導者達は、政治・宗教上の理由からニューイングランド内の旗に修正を加えた。ナサニエル・ホーソーンが短篇 'Endicott and the Red Cross' に記したように、総督ジョン・エンディコットは、1634年に「法王や暴君」の印である聖ジョージの「赤い十字」を「ニューイングランド旗から切り取る」(Hawthorne 9:441) よう命じた。

イギリス政府に抵抗する民兵達の掲げた連隊旗も多様であった。まず「蛇」の図柄がある。ベンジャミン・フランクリンは、「植民地の分断状況を訴え」、「植民地の統合を議論するために」、部分に切断された蛇の図像を描いて1754年5月9日『ペンシルヴァニア・ガゼット』紙に発表した(図4-a)。この蛇の図像は1764年に再度注目されてサウスカロライナ海軍の旗のモチーフとなり(図4-b)、1774年から1776年にかけては、とぐろを巻いたガラガラ蛇の図像として旗に描かれた。モットーは「我を踏むなかれ」である(図-c)。

ニューイングランドで知られた「自由の木」とそこから派生した「自由の柱」の図像は、ボストンの革命組織「自由の息子たち」によって有名になった。ニューイングランドには「松の木」の図像もあり(図-d)、1776年4月にマサチューセッツ海軍の公式の旗となった。「抵抗のストライプ」は「自由の息子たち」の旗としてアメリカで初めて使用された。赤と白が交互に九本並んだこのストライプは、大陸旗に再現される。

大陸旗は1775年から1777年にかけて使用された。後世にグレート・ユニオン旗、もしくはグランド・ユニオン旗として知られる。1776年ワシントン将軍は、大陸軍創設を祝ってこの旗を揚げさせた。十三本の赤と白のストライプが交互に並び、カントンにイングランド王権の表象聖ジョージの十字と、スコットランド王権の表象聖アンドリューの十字が残されている。国王への反抗を象徴するには曖昧な図像である。1776年7月4日の独立宣言時にも、大陸会議は国旗のデザインに言及していない。1777年5月、邦の海軍当局は、「新国家の標準的な艦船旗の制作費としてエリザベス・ロスに14ポンド12シリング2ペンス」を支払っているが、デザインは確認できない。1777年6月14日の国旗制定決議以前に、カントンに「星をあしらった」旗が公式にせよ非公式にせよ、用いられた証拠はない。1777年6月3日、先住民からの国旗制定の要望書が大陸会議に提示された。先住民は様々なヨーロッパの旗を「白人のしるし」と捉えた。イギリス政府は彼らとの公式の交渉の場で、彼らに平和を保証し指示を促すために常に旗を提示していた。そこで先住民は大陸会議との接触の際の保護を求めて、国旗を要請したのである。6月14日、大陸会議は次のように決議した。「決議。合衆国国旗は赤白交互の十三本のストライプからなり、カントンには青地に十三の白色の星が新しき星座を形作るべし」。

この時点では旗のデザインの指定は曖昧で、研究者の間でも議論は定まらない。カントンの部分の星のデザインは、伝説的ないわゆる「ベッツィ・ロスの旗」(図5-c)のように、十三の星が円形に並べられていたのだろうか。また星は五角星だったのだろうか。決議には星の配置に関しても星の形態に関しても言及はない。ただ

し、1782年、第三次国璽制定委員会は「合衆国の正式の国旗」について言及し、カントンの部分に星を円形に配したデザインを指示した。ベッツィー・ロスの旗の配置である。ただし決定者は彼女ではなく、紋章学に造詣が深く、独立宣言にも署名しているフランシス・ホプキンソンであるらしい（グインター 19-29）。

### アメリカ人の表象——星条旗と五角星

では星の形態が五角星と決まったのは何時であろうか。

実際に使われていた国旗の星の形や配列に関しては、様々なヴァリエーションがあった（グインター 30-43）。従って五角星が正式に何時決まったかは推測の域を出ない。

一般に人口に膾炙しているのは次の話である。1814年、第二次英米戦争でワシントンDCが壊滅状態になった後、ボルティモアの要塞が奇跡的に死守され、アメリカに勝利をもたらすことになった。勝利の朝、ボルティモアの要塞に翻った旗に五角星が描かれていたことから、アメリカ国旗の星は五角星と決まった。この出来事を契機に星条旗は次第にアメリカ人の愛国心を喚起するものとなった（グインター 43, 52）。

しかし、時系列的にまとめてみると次のようになる。国旗の星がほぼ五角星に統一される以前に、「最初期は八角星の図柄の国旗が作られるが、1780年代初めまでには五角星の図柄の国旗が幾つか作られており、1800年代初めまでには事実上全てのアメリカ国旗が八角星や六角星の代りに五角星を持った」（Williams 10）と言う（図5・a,b,c）。恐らく1782年に国璽委員会最終案として提出し、大陸会議が6月20日に認可したアメリカ国璽の星の図像が（図6：プーロー 151）、決定要素となったであろう。この国璽の星が五角星であるからだ。既に述べたように同委員会は、「合衆国の正式の国旗」の「新しき星座」として、カントンの部分に星を円形に配したデザインを指示しているが、星の形態については言及がない。けれども、国璽の星を五角星にしたその委員会が国旗をも制定していることから、国旗の星も五角星を想定していたと考えるのが妥当であろう。

ここで問題になるのは、国璽の星を八角星でも六角星でもなく、五角星とした理由である。国璽の決定に携わった委員達は、五角星、五角形を如何に解釈したのであろうか。委員の一人パートンの説明文が「紋章や図像学の用語をふんだんに使った術学的」（プーロー 145）文章であるところから、五角星は古典的図像学体系を背景にしていると考えられる。

## マッケンリー要塞と星形五角形

ここで浮上するのが、星形五角形の要塞であるボルティモアのマッケンリー要塞である。マッケンリー要塞はワシントン DC のすぐ北、メリーランド州ボルティモアの、太平洋側入り江の突端に位置する海の岬である（図7）。スコット・S・シーズによれば、この地に砦を構築する計画は、レキシントンでイギリス軍が発砲した九ヶ月後の1776年1月20日に始まる。ボルティモアに要塞建設の必要性を感じたメリーランド州の決定により、ボルティモアは18世紀ヨーロッパの築城術と戦争理論に詳しい二人のアマチュア技術者を雇う。F・L・マッセンバッハとジェイムズ・オルコックである。選定・測量されたのは、ボルティモアから2マイルのホエットストーン岬（Whetstone Point）にある土地である。1776年砲台と木製の兵舎が置かれ、続いて土塁による「星の要塞」が計画されて1777年に完成する（Sheads 2-3）。稜堡の付かない単純な星形五角形である。

独立戦争後、拡大するナポレオン戦争の不安に備えて、1794年、国会はニューイングランドからジョージアまで十六の砦の建設を決定、後のマッケンリー要塞も含まれていた。1802年にハドソン河畔のウェスト・ポイントに陸軍士官学校ができる以前のことである。外国人の軍事技術者を雇い、当時のヨーロッパの要塞理論に基づく設計を準備する。基本的な設計要素は、フランスのヴォーバンによって採り入れられたヨーロッパの伝統的理論である。メリーランドの人、陸軍長官ジェイムズ・マッケンリーは、マッケンリー要塞構築のために三人の外国人技術者を次々に雇うが、最終的には1799年から1802年までのフランス人技師フォンサン（Foncin）が設計した独自の設計を採用、星の要塞に代えてマッケンリー要塞を構築することに決定。レンガ張り、五つの稜堡を持つ星形五角形の要塞の石工事は1802年には完了する（Sheads 6-7）。1813年にはV型の半月堡が置かれる（Sheads 8）。これが1814年にアメリカに勝利をもたらした時点でのマッケンリー要塞の姿である（図8）。独立戦争のみならずその後もアメリカと協力関係を結んでいたフランス人にとっても、マッケンリー要塞は忘れることのできない要塞と言えよう。

我々には殆どなじみのないこの要塞がアメリカ人にとって如何に大きな意味を持つかは、その地を訪れてみればわかるであろう。ガタガタと音をたてて走る、決して快適とは言えない、アメリカらしいバスに揺られてボルティモアから三十分、マッケンリー要塞に到着。厳めしい門構えや軍の標識とは裏腹に、構内は造船設備の領域を除いて自由に出入りできる国立公園となっている。歴史的に由緒ありげな建物や像、樹木、大砲が点在する広々とした芝生の向こうに海が広がり、

爽やかな風に頬をくすぐられて一日中のんびり過ごせる空間である。湾に出入りする全ての船舶をチェックできる突端に、稜堡付き星形五角形の要塞が見える。予想に反して小さい。

管理事務所に入り、アングロ・サクソン系とおぼしき軍人さん達からチェックを受け、階上に導かれる。いかにも精悍な軍人さんによる歓迎の挨拶と簡単な説明に続き、映像を通して今やアメリカ神話と化したマッケンリー要塞の攻防戦と、それにまつわるエピソードを学ぶ。夏休みのせい、大人に引率された年齢層に幅のある三十人程の子供達と一緒にいる。

国旗をめぐるアメリカ神話とは次のような内容である。1812年から始まった英米戦争は、アメリカに不利な展開を繰り返した。1814年ワシントンDCを焼き払い、ラトローブの言葉を借りれば「最も壮麗な廃墟」(入子 41)となさしめたイギリス軍は、ボルティモアでトドメの一撃を加えようとしていた。9月13日6時からイギリス艦隊は星形五角形のマッケンリー要塞の砲撃を開始、次の日の夜明け近くまで激しい攻防戦が続き、突如発砲はやむ。戦いにすり切れた「要塞にはためくアメリカ国旗」(Kent 15)に代り、五角星をもった巨大な真新しい国旗が星形五角形の要塞の頭上に勝利のしるしとして揚がる。

こうして星形五角形の要塞に翻る国旗の五角星は、アメリカ人の表象となった。1818年9月、アメリカ国旗の基本的デザインが制定される。十三植民地を表す紅白十三本のストライプと、現時点での連邦加入州の数を表すカントンの五角星とからなるデザインである(グインター 54)。

### ヨーロッパにおける要塞

それでは、アメリカ人の表象となった五角星には如何なる<意味>が込められているのだろうか。この疑問は、アメリカの星が何故八角星や六角星でなく五角星なのかと言い換えてもよい。ボルティモアの歴史協会図書室の専門家集団は、星条旗に関する何冊かの資料を持ち出して調べて下さったが、解決は得られなかった。マッケンリー要塞の管理事務所の軍人さんからも答は得られなかった。

しかし視点を移すと解決の糸口は見えてくる。アメリカのこの星は、少なくともアメリカ国璽の五角星やマッケンリー要塞の星形五角形と関係している。しかも五角星は星形五角形の範疇にある。そこで星形五角形の要塞に込められた<意味>を探ることから始める。

星形五角形のマッケンリー要塞の背後にはヨーロッパ・ルネサンスの要塞の伝統が拵がっている。1562年のチャールズ要塞以来、アメリカの沿岸に並ぶ要塞は、

ヨーロッパ列強の国籍を持つ軍事技術者達が旧世界で見慣れていたおなじみのデザインを再現しようとしたものである (Lewis 14)。当のマッケンリー要塞もフランスの軍事技術者フォンサン設計である。そこでこのセクションでは、ヨーロッパの要塞の歴史の検討を通して星形五角形の意味を考察し、そこからアメリカにおける星形五角形の意味の考察へと進む。

ルネサンスは15世紀の自由都市フィレンツェの、マルシリオ・フィチーノを中心とする人文主義者のカレッジに花開いた。この文化運動は、古典古代のギリシャ・ローマを理想とし、政治・学問・芸術など文化のあらゆる面に魅りの息吹を吹き込む。特に古代ローマのユリウス・カエサルとアウグストゥスとに仕えた建築家ウィトルーウィウスに、ルネサンスの人文主義者は注目した。その『建築十書』(紀元前33-22)は再解釈され、同時代に適應する建築・都市を生み出す原動力になった(森田354-55)。

プラトンの『国家』における理想の共和国を出発点にして、ウィトルーウィウスの建築論は理想都市国家論として読まれる。およそ都市にあるべき建築物のあるべき姿を扱うからである。中嶋も説明するように、ウィトルーウィウスを基盤にして15世紀には、三次元のを二次元の紙の上に表す透視図法を初めて科学的に定義したブルネッレスキ(1377-1446)や、ブルネッレスキの仕事を解説し一般化したアルベルティ(1404-72)、フィラレーテ(1400-69)などによって、理想の都市空間が考えられた(中嶋15)。特にアルベルティの意見はフィチーノのカレッジで引用されることが多かった。ウィトルーウィウスを時代にふさわしい形で解釈したアルベルティの『建築論』(1450頃)もこの運動に深く浸透し(シャステル199)、後続のルネサンス人文主義者達の必読の書となった。

ヨーロッパの要塞はこのような文脈に置いて考えられるべきである。理想都市には当然、ウィトルーウィウスの『建築十書』の1-3-1にあるように、「城壁や塔や城門を敵の攻撃が常に撃退されるように予め考慮」(ウィトルーウィウス15)して割り出す防御的機能が含まれる。鉄砲を初めとする新しい武器が発達すると、理想都市の防御的機能が現実に重要な要素と考えられるようになる。そこで安全と幸福を志向する理想都市はおのずから要塞都市となる。ウィトルーウィウスの手法に基づきながら、各建築家はその解釈を発展させつつ、独自の計画を実現させてゆく。主としてアルガンとロウズナウに従ってまとめれば次のようになる。15世紀にはアルベルティの専制君主の要塞都市(図9)、ディ・ジョルジョ(1439-1502)のウルヴィーノ公の要塞都市、16世紀前半にはミケランジェロ(1475-1564)のフィレンツェにおけるやっこ形稜堡付き要塞都市計画、ドイツのアルブレヒト・デューラー(1471-1528)の要塞都市計画がある。マニエリスム期に

入った 16 世紀以降には、対内外の戦争が増加。それに伴いイタリア、ドイツの要塞都市理論と計画は、その他の国に広がる。セルリョ(1475-1554)は、1541 年フォンテンプローの設計者として指名され、イタリアからフランスに要塞を伝播させ、強力な影響を与えた。またアルベルティに多くを負い、その百年後に活躍して、後のヨーロッパ全体の都市や建築に多大な影響を及ぼしたパラディオ(1508-80)も、古代の軍事科学を研究し、要塞計画に筆を染めた(ウィットコワー 109-11)。

フランスのヴォーバン(1633-1707)は、このような時代に現れる。彼は太陽王ルイ十四世に仕え、パリを初め多くの要塞都市の計画と建設を手掛け、その後のフランスの要塞都市計画に影響を与え続けることになる。ワシントン大統領やジェファソン大統領の指揮のもとに進められたワシントン D C の都市計画やマッケンリー要塞は、このようなフランスのヴォーバン系列の理想都市及び要塞都市理論に由来する(Sheads 6)。ワシントン DC のランファンも、マッケンリー、インペンドダンス両要塞のフォンサンも、フランスの軍事技術者であったからだ。

#### 星形五角形の要塞

マッケンリー要塞の星形五角形は、ウィトルーウィウスを基盤に置いた、ヨーロッパ・ルネサンスから連綿と続く理想都市や要塞の、形態に関する理念に則っている。

ウィットコウワーに従ってまとめると、ルネサンスの人文主義者達は次のように理解していた。人間は神に似せて作られた聖なる神殿である。小宇宙たる人間は神意により神の大宇宙の秩序ある調和を具体化したものである。そこで完璧な図形である方形と円形の中に描き込まれたウィトルーウィウスの人体図形は、小宇宙と大宇宙との間の数理的融和の象徴となる。当時の建築家達はここから、調和を表象する完全な幾何学形態として円形と方形を読みとり、両者の組み合わせから生まれる、円形のヴァリエーションとしての六角形、八角形、十角形、十二角形などを調和を表象する理想的形態とみなした。方形と円形に合わせて神殿という場を建設することが、人間の神に対する関係を最もよく表現する。総合的な調和の場としての理想都市が、円形とそのヴァリエーションである多角形から成るのも同じ理由による。ただし、ここには五角形は含まれていない。

理想都市が形態に拘ったのと同じ理由から要塞都市もまた形態に拘った。そこにあるのは、ウィトルーウィウスをモデルとする共通の理念である。都

市全体であれ、城塞であれ、「私人の家」であれ、神々の「聖なる殿堂」であれ、実用的な公共の場である「港」や「劇場」であれ、いずれの構築物も都市を構成する一つの場であることに変わりない。場の形態は、完全な調和を意味する形態を理想とする。実際、レオナルドの「教会設計図」や、セルリョの『建築論五書』(1547)における聖堂の様々な理想形態(図 10)を眺めていると、ディ・ジョルジュの要塞都市モデル(図 11)やカターネオ(1510?-72?)の『建築四書』(1554)の軍事的理想都市(図 12)、セルソーの『建築書』(1615)における「要塞化された邸宅」、ペレの『建築技巧論』(1601)における要塞都市の形態が重なって見えてくる。聖なる神の場である聖堂と、人間の戦いの場である要塞は、ともに宇宙の調和に導かれる神聖な場としての祈念を充満させている。

だが、今みただけの、完全な調和を表す形態の哲学を示す華麗なカタログに関して不思議な思いにとらわれるのは、セルリョやカターネオの聖堂と要塞に、五角形の形態が存在する事である。円形と方形を基本とする人体比例から、完全な調和の表象として円形、四角形、六角形、八角形、十角形・・・があり、その理論には五角形は存在しなかつたはずである。にもかかわらず、五角形が聖堂にも要塞にも出現している。しかも五角形の出現の意味は明らかにされていない。ウイトコウワーは、ジョルジュの五角形を構成する「円形に従う人」(図 13)の像を提示しながら、五角形が出現した理由と意味を明確にしない。「円形図中における人間は、世界の映像である」というジョルジュの章の表題を報告しながら、「この図形の宇宙の意味は明確にされていない」(ウイトコウワー 36)と述べるに留まっている。五角形は調和を示す形態ではないのだろうか。だとすれば何故、完全で神聖な神の幕屋である聖堂や、平和を希求する要塞設計図に五角形が出現し、五角形の人体図が「世界の映像」、すなわち宇宙の調和の表象と銘打たれるのか。

#### 都市計画における五角形の観念

ルネサンスの理想都市の理念は、15 世紀後半にアルベルティ(1404-72)から始まるが(中嶋 26)、不思議なことに五角形の要塞がプラン上で出現するのは 16 世紀に入ってからである。15 世紀には、五角形が調和を示す神聖な理想的形態とは認められなかつたと考えられる。

では 16 世紀に入って五角形が理想都市や聖堂のプランに登場し始めるのは何故だろう。ウイトコウワーが示す、当時の正方形や円に内接する幾つかの理想的人

間像を比較してみる(図14・a,b,c)。すると、これまで人体の単なる一部として扱われたに過ぎない人間の頭部が、人間の手足に加えて第五の要素として別格に考えられ始めたことが伺える。即ち<五>は<四>プラス<一>の意なのである。16世紀初期には、特に正方形が意識された。ドイツの第一級の人文学者であるアルブレヒト・デューラーが、トマス・モアの『ユートピア』方形の理想都市プランから11年後の1527年に出版した、理想的要塞都市プランは、円形と四角形に限られている。円と四角形に由来する六角形や八角形、十角形、十二角形等の多角形を調和形態とする当時の人文主義の流れにあって、デューラーがあくまで円と四角形に拘るさまは、奇異な感じを与える。中嶋も次のように述べる。

デューラーが採り上げる文献は、ヴィトルーヴィウスだけで、イタリア初期ルネサンスの建築書を読んでいただろうかはわからない。いずれにしろ彼の描いた理想都市は、フィラレーテやディ・ジョルジュとは形がぜんぜん違っていて、むしろ古代ローマの町をモデルにしているようにみえる。モアが描いたユートピアの方形プランに影響されたのかも知れない。(中嶋 56)

デューラーほどの人物が、まるで時流に逆らって後ろ向きであるかのような印象である。

ここで思い出すのは、デューラーがフィチーノと同様に<四>を地上世界の基本数と考える、四大元素や四体液説の信奉者であったことだ。四体液論に基づく<メランコリー>理論に惹きつけられた銅版画<メレンコリア1>(1514)や、四体液四気質を表す「四人の使徒」(1526)を発表していた。これらのことから<四>は彼にとって極め付きの数であるかのようにみえる。

しかし、円と方形に拘り、<四>を重視したデューラーは、実は五角形に無関心だったわけではない。それどころかパノフスキーによれば、円及び正方形から割り出す従来の方式では展開できないような多角形、即ち「五角形や九角形・・・十五角形などの作図」、特に五角形の作図に意を用いた。しかもデューラーのこの「五角形作図法」は、「十六世紀後期のイタリアの幾何学者の、一種の固定観念にまでなり」、「カルダーノ、タルターリア、ベネッティ、ガリレオ、ケプラー」、さらに『五角形作図法——アルベルト・ドゥレロによって作図された』(ポローニャ、1570年)に関する専攻論文を著したかのピエートロ・アントーニオ・カタールディのごとき諸人物の想像力をおおいにかきたてた」(パノフスキー 260・63)。

しかもデューラーは、中嶋の推測に反して、イタリア初期ルネサンスの建築書に通じていたはずである。ニュルンベルクを訪れたヴェネツィアの画家ヤーコ

ポ・デ・デルバリにより、「人体比例論に強い関心を抱くようになった」(山本 338)。またイタリアへは 1494 年から 1495 年と、1505 年から 1507 年の二度赴き、イタリアの人文主義者たちと親しく交わり、様々に知識を吸収していた。最初の旅では人体解釈と表現法、二度目の旅では特に四体液理論の知識を深め、「透視画秘法の<芸術>」(パノフスキー 254)を学んだ。後に『コンパスと定規による測定法教則』(1525)や、『城、都市、町、村の防備設備に関する理論』(1527)、死後出版の『人体比例に関する四書』(1528)に結実する。「コンパスと定規」は幾何学と建築家の表象であり、「透視画」は都市・建築を表現するために用いられる、ルネサンスの新しい理論による画法である。「人体比例」は大宇宙・小宇宙の照応というネオプラトニズムの主要な理論であり、人文主義の建築理論と不即不離の関係にある。彼はウィトルウィウスのみならずイタリア初期ルネサンスの建築書から多くを学び、その結果、正方形と五角形に惹きつけられた、と結論することができよう。

それにしても、<四>に拘ったデューラーはなぜ五角形の作図法に熱心だったのであろうか。彼の中で<四>と<五>は如何なる関係にあったのであろう。

#### 第<四>の大陸アメリカ

このようなデューラーの<四>と<五>の考察は、アメリカの<発見>と関わってくる。16 世紀における<四>は、アメリカ(人)の表象と言っても過言ではない。フィラレーテが従ったアリストテレスやガレノスを初めとするギリシャ以来の体液生理学の理論は、地上の世界が四大元素から成り立つという四性論に従っていた。しかし、四性論にとってそれまでの世界は都合の悪い、収まりの悪い世界だったに違いない。なぜなら、中世の TO 図(図 15 に代表されるように、16 世紀になるまで地上には大陸が三つしか存在しないと考えられていたからだ。地上の世界が全て四大元素で構成されるという理論は、こと大陸に関する限り崩れる。従って、新大陸アメリカの存在が確認された時の人文主義者たちの喜びの衝撃がいかばかりであったか、想像に難くない。四番目の大陸<発見>は、地上の世界が<四>で成り立ち、神の神聖な力が<四>で成り立つこの世界を支配していることの証明だったのである。

特にフィレンツェの人文主義者達は、ジェノヴァの人コロンブスと不思議な縁に結ばれていた。それだけコロンブスへの関心も強かったはずである。というのは、コロンブスに地球球体説を確信させ、西への航海を決定付けたのは、フィレンツェの医師であり天文学者であり地理学者でもあった「トスカネッリからコロ

ンプスに宛てて送られた書簡とそれに付された地図」(織田 101)であったからだ。トスカネリは復活した古代ローマのプトレマイオスの地球球体説に則った地図をもとに、マルコポーロのカタイヤジパングの位置を推定して地図上に示していた。さらに言えば、イタリアの人文学者達は、コロンブス以前にすでに地上の世界が円盤ではなく球体であると信じており、コロンブスは彼らの説を証明したことになる。

フィチーノを中心とするフィレンツェのプラトン・アカデミーは、1470年から1480年まで存在し、1499年にはフィチーノもこの世を去っている。しかし、イタリアに生れ、スペインでコロンブスと会い、南アメリカに四回の探検に出かけたアメリゴ・ベスプッチ(1451・1512)の書物は、フィレンツェの人文主義者達に伝わっていたに違いない。織田によればヴェスプッチは、1503年に『新世界』を、二、三年後に『四航海』をイタリア語で出版し、コロンブスやカボットにより新しく<発見>された土地がアジアなどではなく、世界のこれまで知られていなかった第四の大陸であり、また新世界と称するにふさわしい大陸であることを明らかにした。また、ドイツのロレーヌのヴァルトゼーミュラー(1470・1518)が1507年に『世界誌序説』を表し、ヴェスプッチの『四航海』を付して、世界の第四の大陸がアメリゴ・ヴェスプッチによって<発見>されたこと、大陸名は女性名を用いる慣わしに従い、アメリゴにちなみ「アメリゴ」の女性形「アメリカ」と称すべきと提唱したことも(織田 124・26)、同様に知られていたに違いない。

新大陸<発見>という出来事は、二つの面で世界観の変革を求め大変な出来事だった。一つは、第四番目の大陸が<発見>されたからには、地上の世界はやはり<四>を基本に成り立っていること、もう一つは、地上の世界がオケアノスに囲まれた円盤などではなく、球体であるということだ。古代の文献堀起こしによる人文主義者達の推測は、確信へと変わる。それに応じて彼等の中で、地上の基本数<四>という数や、地上の完全な調和を示す四つの角を持つ正方形や、地上の世界の形態である球形への関心が一挙に高まっていったに違いない。大陸が四つであること<発見>の意義は、それ以後の古地図に何うことができる。堀渾一の研究にあるように、巨大な地図の四隅には、四季や四大元素とともに四大大陸を表象する人物像が描き込まれているからである(堀 108・30)。

#### <ペンタゴン>——もう一つのアメリカ人の表象

この様な文脈において、五角形が目に見える姿をとって表れ始める。レオナルドが五角形と六角形で構成される、球体とも言える 32 面体を図示し、パチョリがそ

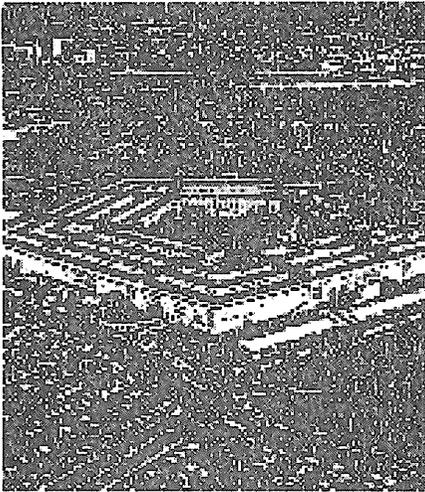
れを『神聖比例』に載せる(図16)。完全な調和を表す形態である球の構成要素として<五>が存在する。<五>は神秘的な数である。折からイタリアにやってきたデューラーがそれらに接し、五角形作図法に夢中になる、というように。デューラーにとって五角形は<一>なるものから出てこの世界を無限に埋め尽くし、<一>なるものに帰する形態、即ち神聖比例、黄金比例で構成される神聖な形態であった。また五角形は、大宇宙、小宇宙の照応から、<四>から成る人間の肉体を神聖で高貴な<一>なる靈魂が<一>に統一するように、<四>から成るこの世の物質世界を神聖で高貴な宇宙の靈が<一>に統一するという、身体と頭を図式化したものとも考えられる。人体の構図と宇宙の構図は重なる。デューラーの《メレンコリア1》の背景に輝く光も、四性論の<四>を統べる<一>なる光を表しているのであろう。パトリーツィの言葉で言えば、「個々の靈魂とそれらの身体との関係は、世界靈魂と全体としての宇宙との関係に類似している」(クリステラー 186)。

世界が四つの大陸から構成されていることを証明し、世界観を変化させたアメリカ大陸の<発見>は、完全な調和を表す五角形を顕現させた画期的なく<発見>であった。ピュタゴラス学派のシンボルマークである星形五角形は、神聖な五角形を内在させる光の表象である。イスラム世界にビザンチン文化とその前のヘレニズム文化によってピュタゴラスが深く浸透していたとすれば、モスクに五角形の「不思議なアラベスク」(宮崎 91)が存在するのも頷ける。<ペンタゴン>を攻撃したイスラム教徒は、<ペンタゴン>の建物の五角形にモスクの神聖な五角形の幾何学模様を読みとり、アメリカ人の総体としてのアメリカ合衆国の、神のもとなる<多からなる一>という完全な調和の表象と祈念を見て、破壊の標的としたのではなかっただろうか。

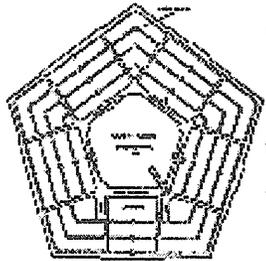
#### Works Cited

- Hawthorne, Nathaniel. *Twice-told Tales*. Vol.9 of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*. Ed. William Charvat et al. Ohio State UP, 1974.
- Kent, Deborah. *The Star-Spangled Banner*. Chicago: Children's Press, 1995.
- Lewis, Emanuel Raymond. *Seacoast Fortifications of the United States: An Introductory History*. Naval Institute P. Annapolis, 1979.
- Sheads, Scott S. *Fort McHenry*. Nautical & Aviation. Baltimore, 1995.
- Williams, Earl P. Jr. *What You Should Know about The American Flag*. Gettysburg: Thomas, 1987.
- アルガン, ジュウリオ・C 『ルネサンス都市』 堀池秀人・中村研一訳 井上書院 1983.
- 入子文子「壮麗なく丘の上の町」——ワシントン DC とアメリカの夢」入子・加勢田・藤田・植条・若田・白木 『アメリカを読む』大修館 1998/2000.3-51.
- ウイトコウワー, ルドルフ 『ヒューマニズムの建築』 中森義宗訳 彰国社 1970.

- ウィトルーウィウス 『ウィトルーウィウス建築書』 森田慶一訳注 東海大学出版会 1979.
- グインター, S. M. 『星条旗』 和田光弘・山澄・久田・小野訳 名古屋大学出版会 1997.
- クリステラー, P. O. 『イタリア・ルネサンスの哲学者』 佐藤三夫監訳 みすず書房 1993.
- シャステル, アンドレ 『ルネサンス精神の深層——フィチーノと芸術』 桂芳樹訳 平凡社 1989.
- 高階秀爾 『芸術空間の系譜』 鹿島研究所出版会 1967.
- 中嶋和郎 『ルネサンス理想都市』 講談社 1996.
- パノフスキー, アーヴィン 『アルブレヒト・デューラー——生涯と芸術』 中森義宗・清水忠訳  
日貿出版 1984.
- ヒエロニムス, ロバート 『アメリカ国璽の秘密』 山内雅夫訳 三交社 1993.
- ブロー, アラン 『鷲の紋章学』 松村剛訳 平凡社 1994.
- 森田慶一 「あとがき」 『ウィトルーウィウス建築書』 森田慶一訳注 東海大学出版会 1979.
- 宮崎興二 『多面体と建築——その謎と形』 彰国社 1979.
- 山本哲士 「デューラー略年譜」 『デューラー展——水彩・素描・版画』 1992.
- ロウズナウ, ヘレン 『理想都市』 西川幸治監訳 理想都市研究会訳 鹿島出版 1979.



How To Find Your Way Around In The Pentagon.



- 1. Find a room
- 2. Find the main
- 3. Find the way
- 4. Find the way
- 5. Find the way
- 6. Find the way
- 7. Find the way
- 8. Find the way
- 9. Find the way
- 10. Find the way

THE FIFTH FLOOR PLAN

Steps of the Pentagon are available in the Mail or River Kitchens. And the Clock is only for convenience in going to the parking, except by special case, or by private, except of a Pentagon employee.

図1 <ペンタゴン>の建物

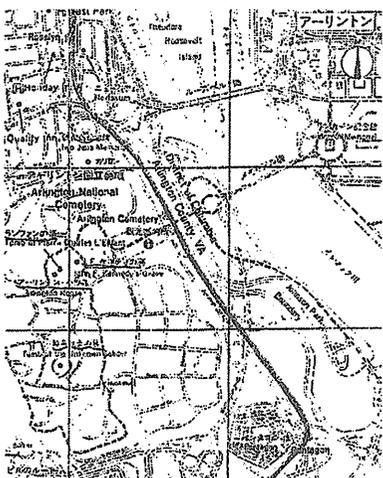


図2 アーリントン地区



図3 ランファンの首都ワシントン計画図

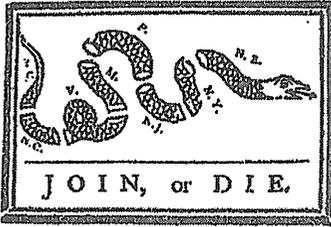


図 4-a フランクリンの手になる旗

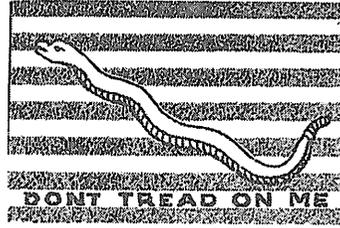


図 4-b ガラガラ蛇のモチーフをあしらった  
サウスカロライナ海軍旗

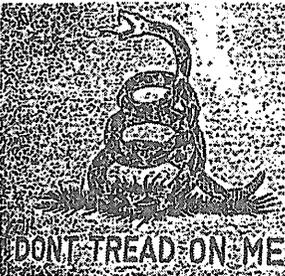


図 4-c 鎌首をもたげたガラガラ蛇  
のモチーフ



図 4-d 松の木のモチーフによるニュー  
イングランドの旗

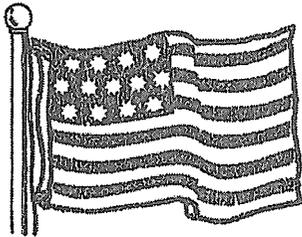


図 5-a 八角星の星条旗  
(John Shaw Flag)

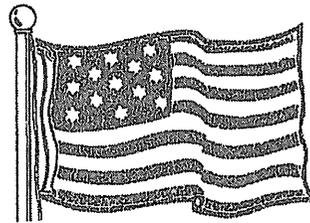


図 5-b 六角星の星条旗

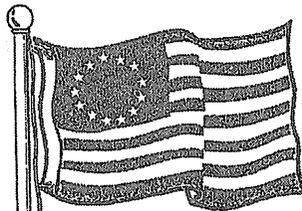


図 5-c 五角星の円形の配列の星条旗  
(いわゆる"Betsy Ross Flag")



図 6 アメリカ国璽の五角星

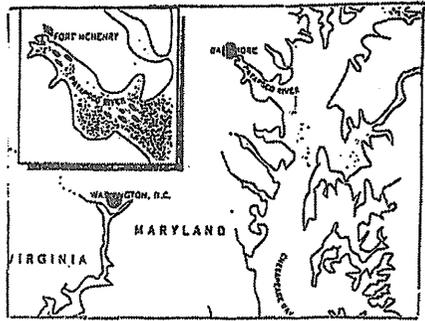


図 7 マッケンリー要塞とワシントン DC

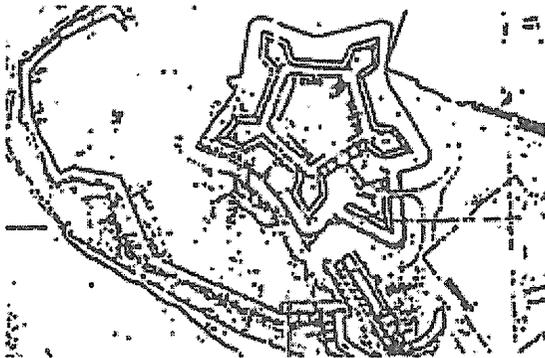


図 8 マッケンリー要塞 (1819)

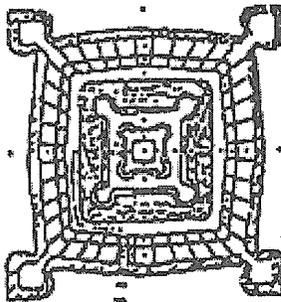


図 9 アルベルティ専制君主の城塞

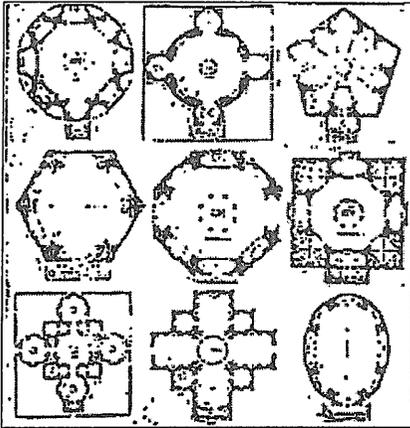


図10 セルリョの集中式聖堂プラン  
『建築論五書』(1547)

図11 デイ・ジョルジョの  
要塞都市モデル(1492)

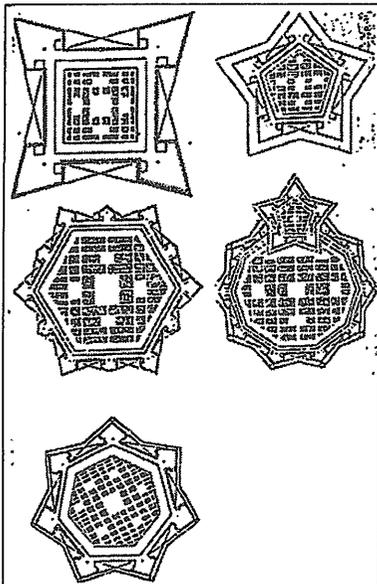
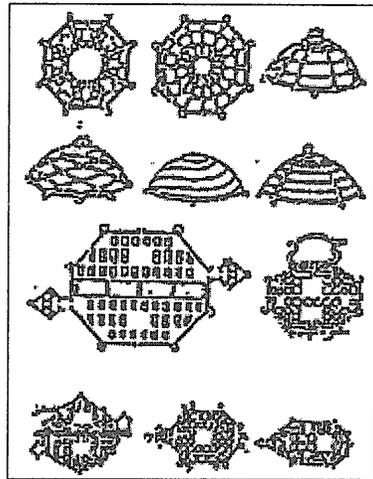


図12 カターネオの軍事的理想都市  
『建築四書』(1554)

ini tenet, eadem figura terminari accedit  
in sphaeram in anima/sensibilem utroque in



cem in circulari mensura reperitur pro-

図 13 ジョルジュの「円形に従う人」  
『宇宙調和論』(1525)

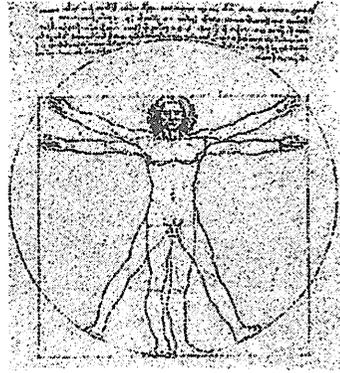


図 14-a レオナルドのウィトルーウィウスの  
人間像 (15世紀)

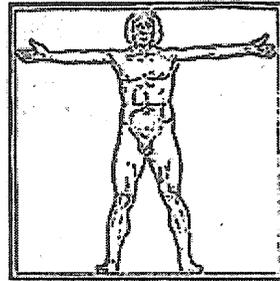
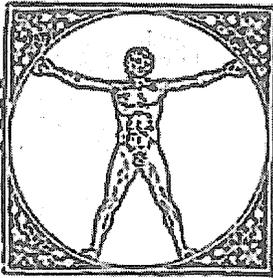


図 14-b,c ウィトルウイスの人物像(1511)



図 15 TO 図

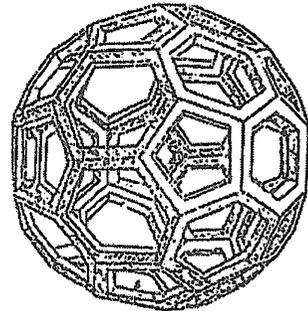


図 16 レオナルドの32面体を描いた  
パッチョリ『神聖比例』(1509)

『荒涼館』——デッドロック夫人の逃避と死の意味——

大森幸享

SYNOPSIS

In *Bleak House*, the plot of Lady Dedlock's secret centers on her inner struggles in which she felt despairing anguish of disguising her real feeling. The novel employs Esther's narrative and the third-person narrative, and these two narratives bring out a clue to understand Lady Dedlock's feeling and conscience. Therefore the central concern in the plot of Lady Dedlock's secret is to probe into the mind of her and see what her real feeling is. This paper focuses on Lady Dedlock's boredom as the cover of her real feeling, and examines the purport of her escape from the Dedlock family toward her death.

1. 「死ぬほど退屈」の根源

デッドロック夫人(Lady Dedlock)の秘密に関する物語は、大法官裁判所訴訟事件を描いた物語とともに『荒涼館』(*Bleak House*, 1852-53)全体を二分している。これらふたつの物語は、夫人の娘エスタ(Esther)による手記の形をとった語りと、出来事のありのままを淡々と伝える三人称の語りとによって統御される。夫人に関する物語では、真実と偽装との狭間で苦悩する夫人の心理と行動が、徐々に彼女の素顔をあらわにし、物語に伏せられた謎を解く手がかりを与える。言い換えれば、自分らしく生きようとするデッドロック夫人がそれを抑圧しようとする社会や慣習に裁かれようとするとき、彼女が選んだ道が最終的におとずれる彼女の死とどのように結びついているのかという点が議論となる。つまり、夫人が犯した道徳的罪自体が問題視されるのではなく、罪を背負った人間がどのように生きていくかに焦点が当てられる。デッドロック夫人は若い頃にホードン(Hawdon)と婚約し結婚はしなかったが私生児を生んだという秘密を隠しもっている。夫人はホードンとの子どもを死産したと思い込んだままレスタ卿に求婚され結婚した。デッドロック夫人の過去に暗い影を落とすのは、彼女が当時の社会的・倫理的規範を超えたからであり、彼女自身や彼女を取り巻く情景描写が陰鬱なものを象徴する。“My Lady Dedlock's 'place' has been extremely dreary.”、“The view from my Lady Dedlock's own windows is alternately a lead-coloured view, and a view in Indian ink”。<sup>1</sup>

また、夫人の肖像に差した光が庶子を暗示する盾形紋章の左帯（バンド・シニスタ）を示すように、彼女がデッドロック家の正統な位置を占めるに相応しくない女性であることをほのめかす（12章）。

しかしながら、デッドロック夫人の扱われ方に関して J. Hillis Miller が述べるように、自分の過ちを後悔するデッドロック夫人がホードンを思う気持ちは是認され、むしろ彼女の過ちを恥じ非難する彼女の姉バーバリ (Mrs. Barbary) は歪んだキリスト教精神をもつ堅物として否認される。<sup>2</sup> バーバリがデッドロック夫人のコントラストとして存在しながら、その過剰な禁欲と奉仕の精神がかえって非人間的な社会を作り上げるというところに、夫人の生き方・あり方・存在の可能性が残されている。

冷淡な態度で退屈感をあらわにする夫人の姿が真実ではないことは、物語が進むにつれて徐々につまびらかとなる。上流社会で手に入れられるものはすべて手に入れた夫人ではあるが、それでも彼女の手の届かないものがある。デッドロック夫人はレスタ卿と結婚して以来、出産の秘密が発覚しないように内面や心の弱みを見せることなく、貴婦人然として振舞い続けることに神経をすり減らし、繰り返される形式的な社交が彼女を退屈な世界に縛りつける。夫人は四半世紀ほどその状態を続けてきたが、それが彼女に倦怠と精神的疲弊をもたらす。

My Lady Dedlock, having conquered *her* world, fell, not into the melting, but rather into the freezing mood. An exhausted composure, a worn-out placidity, an equanimity of fatigue not to be ruffled by interest or satisfaction, are the trophies of her victory. (10-11)

夫人は美貌、自尊心、野心、驕慢さによって押すに押されぬ社交界の華となるが、その華やかな世界で確固たる地位を築いても満足を得られない。ただ、彼女はスキャンダルを隠し持ちながら何事にも動揺することなく平静を装う態度を身につけ、准男爵夫人の身分を勝ち取った。それが “the trophies of her victory” といえよう。つまり、彼女が高慢な態度で貴婦人として生きることが、知られてはいけない部分を隠し守る行為であり、誇り高き貴婦人の装いの下には、悲しみに暮れる素顔がある。

デッドロック夫人の退屈感は、現在の状況とは対照的に、どうしても忘れることの出来ない別のもっと自分らしくいられる状況との対比から生じているといえる。<sup>3</sup> 社交界で輝こうと、パリへ外遊しようと、そうした上流社会の暮らしは時間を埋め尽くしても、彼女の心の隙間を埋めることにも退屈の慰みにもならない。

三人称の語りが“My Lady Dedlock (who is childless)” (9)と語った後に、屋敷の自室から眺めた、番人小屋の家庭的な一コマをじっと見つめる夫人の様子を描く (2章)。夫人は、小屋に明るい火と立ち上る煙、それから女に追いかけられ雨の外に飛び出した子どもが雨具に包まった男に走りよる光景を目にして不機嫌になる。この場面で夫人が感じた退屈感は、ある種の寂しさを防御しようとする心理から生じる感覚である。

## 2. ホードンへの隠された思い

2章で彼女が顧問弁護士タルキングホーン(Tulkinghorn)によって報告されるジャーナリス対ジャーナリス訴訟に関する法律文書のなかにホードンの筆跡を目にし、卒倒する場面からも明らかのように、ホードンに関する話題が彼女にとって退屈感とは正反対のある種の事件となる。エスタが自分の娘であることを夫人がはじめて知るのは、29章でケンジ・アンド・カーボーイ法律事務所の下級弁護士ガッピー(Guppy)が、エスタの本名がエスタ・サマソンではなくエスタ・ホードンであると聞かされるときであることから、それまで夫人が心の内に隠し、公になることを避けていたことはホードンとの関係ということになる。<sup>4</sup>

ホードンは陸軍大尉であった。かつて彼の部下であったジョージ・ラウンズウェル(George Rouncewell)の証言によると、ホードンは若い頃は希望に燃えた美男子であった。また、クルック氏(Mr. Krook)の下宿で見つかったホードンの死体を検視した顔見知りの医者話によると、粗野な態度のなかにもどこか身分の立派な様子があったと印象を述べる。デッドロック夫人とホードンとの関係がどのように終わり、またなぜ終わったのかについての確かなことは語られない。とはいえ、ジョージの証言をもとに推測すると、ホードンは船から転落して溺死したために夫人はあきらめて彼との関係を終わりにしたと考えられる (21章)。苦楽をともにした側近のジョージですらホードンが溺死したものと信じていたのであるから、夫人がホードンを死んだものとあきらめたのは無理もない。ホードンが夫人の妊娠を認知していたか否か、彼が溺死したのはエスタが生まれる前か後か、これらの疑問も明示されることなく推測の域を出ない。確かなことは、夫人とホードンとの関係が愛の破局によって終止符が打たれたわけではないということである。

ところが、タルキングホーンによれば、ホードンは放蕩者で陸軍大尉としてなにひとつまともなことはできずに終わったとされる (40章)。確かに、タルキングホーンの話は夫人の秘密をほめかした遠まわしな言い方であるから、すべて

を事実どおりであると鵜呑みにすることは出来ないかもしれない。しかし、ホードンがスモールウィードから借金をしていた事実や、ホードンの生活を知るジョージの証言は、ホードンの生活が上手くいっていなかった証拠を固める。

“... he carried on heavily and went to ruin. I have been at his right hand many a day, when he was charging upon ruin full-gallop. I was with him, when he was sick and well, rich and poor. I laid this hand upon him, after he had run through everything and broken down everything beneath him – when he held a pistol to his head.” (275)

ホードンがピストル自殺しようとしたほどに生活に行き詰まり、苦しい行進を続けた末に破滅したというジョージの話は、デッドロック夫人がホードンとの結婚をあきらめなければならなかったもうひとつの理由を示唆する。さらに、ジョージはホードンが船から転落したことが故意だったのか事故だったのかを疑問のままに残し、自殺の可能性を漂わせる。

夫人にとってホードンとの関係を示すいかなる証拠も残っていることは許されない。ホードンの筆跡と思われる法律文書を目にしたときに夫人は驚きと心配の入り混じった強い感情を表に出さないように必死に平静を保とうとするも意識は朦朧としてしまう。このことから、夫人がこの文書を目にすることがいかに唐突な、思いもかけないことであるかが分かる。

失神したことがタルキングホーンに懸念をいだかせ、それ以後彼女の身边を詳しく調べ始める。そして、彼がその法律文書の代書人を職務上調べはじめたことで夫人に不安が募る。タルキングホーンがその代書人の下宿先に訪れた際、彼がその人物の死体の第一発見者となり、駆けつけた医者の話では、死後3時間経っていた。この時点ではまだその代書人がホードンであることは明らかにされず、身元はネーモー(Nemo)すなわち、「だれでもない人」という匿名だけが実証される。また、語りが“the lonely figure on the bed, whose path in life has lain through five-and-forty years, lies there” (133) と述べることから、ホードンは享年45歳であると思われる。やがてタルキングホーンの報告によってその代書人が死んでいたと聞かされてはじめて夫人はホードンの死を知るのだが、死亡を知らされてもなお彼女の不安は消えることはない。夫人はタルキングホーンにその人物の名前は何かというのか、看護をした人はいたのか、他に手がかりはなかったのか尋ねる。もちろん夫人は本心からその人物の消息を知りたがっているのだが、彼女の本意はその死人がホードンという名の人物で夫人と何か関係があるという手がかりが

発見されたのではないかということを知りたがっている。もし看護人がいたならば証人として秘密が漏れる恐れがあり、ホードンと断定されるものが残っていれば夫人に危険が及ぶことが予想される。

こうした夫人の心配は、ホードンが埋葬されているとされる無縁墓地に彼女がこっそり見に行く行為にも窺われる。ホードンと思しき人物の死に伴い、道路清掃人ジョー(Joe)に死因審問がなされる。その審問のことが新聞に載っていることを知った夫人は、暗くなってから女中の姿に変装してこっそり出かけ、道路清掃をしているジョーを呼び、新聞に書かれてあったその死人に関する場所を案内させる。彼女が案内させた場所はホードンが法律文書の代書を頼まれた場所、彼が住んでいた部屋、それから彼が埋葬されている墓地である。夫人はホードンが足跡を残しているであろう場所を見て回る目的があったと考えられるが、それは単に忘れえぬホードンへの思いからそうしただけではなく、彼の身元を証明するものの存在を危惧したためであるとも取れる。とくに埋葬場所にはひよっとすると彼の名前が明記されているものが残っている恐れがあった。

つぎに夫人が心配したホードンの証拠物品はガッピーが入手しようとした手紙の束である。エスタに求婚するガッピーは彼女に取り入れるために彼女の出生の秘密、つまりエスタがデッドロック夫人と血縁関係にあるかどうかを独自に調べるうち、デッドロック夫人と接触するようになる。彼はエスタの生まれと育ちの謎を解明する手がかりの一つとしてその手紙の束をじきに入手できるので持参すると夫人に言う。つまり、その証拠品によってエスタ、パーバリ、ホードン、そしてデッドロック夫人とのつながりを調べる。それに対して、夫人は “You may bring the letters, . . . if you choose.” (373) とそっけなく応え、ガッピーに乗り気がないと不審に思われると、“You may bring the letters, . . . if you please.” (373) と少し丁寧に言い直す。夫人は本来ホードンが残した手紙が発見されては都合が悪いが、秘密保持を貫けばかえって疑いを招くと考える。ガッピーの口からエスタ・サマソンやミス・パーバリ、それからホードンの名がでてきて彼らとの関係性を尋ねられても、夫人は頑なに平静を装いながら関与を否定し続ける。33章でガッピーが入手しようとした手紙の束がその所有者クルックの死にともない入手不可能になったと知らされたとき夫人が安堵することからも、いかに彼女がホードンを知る手がかりの発見と彼との関係の露呈を恐れていたかが分かる。<sup>5</sup> また、エスタが自分とホードンとの子どもであることがわかったときの夫人の瞬間の動きの描写は、映画のカット割りのように多角的に彼女の表情の細かな変化をとらえる。

Mr Guppy stares. Lady Dedlock sits before him, looking him through, with the same dark shade upon her face, in the same attitude even to the holding of the screen, with her lips a little apart, her brow a little contracted, but, for the moment, dead. He sees her consciousness return, sees a tremor pass across her frame like a ripple over water, sees her lips shake, sees her compose them by a great effort, sees her force herself back to the knowledge of his presence, and of what he has said. All this so quickly, that her exclamation and her dead condition seem to have passed away like the features of those long-preserved dead bodies sometimes opened up in tombs, which, struck by the air like lightning, vanish in a breath. (371)

思いもかけない真実の露見に衝撃を受け絶句する夫人の心理は、彼女の顔色の変化や唇の震えなどによって、その心の底で蠢く制御しがたい苦悶を実写する。夫人がガッピーの報告に対し訴えるように ‘And what is *that* to me?’ (372) あるいは ‘Still I ask you, what is this to me?’ (372) と繰り返す態度には、ガッピーの口から発せられる決定的な一撃を促すかのような言葉にも取れる。

### 3. 夫人の逃避と死の意義

デッドロック夫人がレスタ卿のもとを去り、死を決意する引き金となったのは、タルキングホーン殺害の容疑がかけられ、彼女の秘密がレスタ卿の知るところとなると思い、“All is broken down” (687) と悟ったときであることに着目したい。窮地に追い込まれた夫人は、これまでどおり誉れ高き貴婦人として生きていくという選択肢は絶たれる。これまでどおり生きていくことが不可能となり、彼女の心に忍び寄る恐怖と不吉な影から逃れるためには、彼女に残された選択肢はひとつしかない。

Thus, a terrible impression steals upon and overshadows her, that from the pursuer, living or dead—obdurate and imperturbable before her in his well-remembered shape, or not more obdurate or imperturbable in his coffin-bed, —there is no escape but in death. Hunted, she flies. The complication of her shame, her dread, remorse, and misery, overwhelms her at its height; and even her strength of self-reliance is overturned and whirled away, like a leaf before a mighty wind. (688)

夫人がエスタに真実の告白をし、その罪の赦しを請う場面ではまだレスタ卿のもとを去るつもりも、死ぬつもりもなかった。夫人がエスタに話すように、夫人はこれまでどおり社交界の華として生きていくつもりであると決心する。そのことが夫人にとって死ぬほど退屈で精神的に苦痛なことであるにせよ、彼女は上流社会という自分にとって偽りの世界を捨てるという選択はしない。“I dread one person very much.” (464) と言って夫人が警戒するタルキングホーンの死が、彼女に安心ではなく、さらなる逃れられない恐怖をもたらし、夫人に死を現実のものとして実感させる。

まず、彼女の逃避行為を事の結果として考えた場合、その原因は彼女がこれまで隠し続けてきた秘密が露見しレスタ卿の知るところとなった恥辱である。事実、ガッピーによって夫人の秘密がレスタ卿に密告されたと知らされたときにはすでに、スモールウィードとチャドバンド夫人(Mrs. Chadband)がデッドロック夫人の秘密を種にレスタ卿を恐喝していた (54 章)。夫人は最も恐れていた一撃によって半ば精神的混乱に陥り、恥と恐怖と悔恨と悲歎によって打ちのめされ、彼女の強い自負心すらも崩れ去ろうとする。夫人がレスタ卿に残した置手紙には、強い自負心で絶望感に耐える夫人の姿がある。

*‘I have no home left. I will encumber you no more. May you, in your just resentment, be able to forget the unworthy woman on whom you have wasted a most generous devotion – who avoids you, only with a deeper shame than that with which she hurries from herself – and who writes this last adieu!’ (688)*

夫人はこれまで隠し続けてきた過去の罪に対する恥辱から逃れようとする。この暇乞いの手紙の中で夫人はタルキングホーン殺害については身の潔白を弁解するも、過去の秘密については否定しない。レスタ卿の寛大な心で許されようとも、デッドロック家に迷惑をかけ恥をぬってはいけないという夫人の義務感が “a most generous devotion” の部分に強く表されている。

つぎに、夫人はレスタ卿の寛大さを踏みにじり、エスタに不幸な運命を背負わせた良心の呵責を抱く。エスタ宛てに書き残した夫人の手紙に彼女が死のうとする理由が述べられている。

*‘Cold, wet, and fatigue, are sufficient causes for my being found dead; but I shall die of others, though I suffer from these. It was right that all that had sustained me should give away at once, and that I should die of terror and my conscience.’ (732)*

死を決意して一路死へ向かっていく夫人がエスタに手紙を書く必要がないことを考えると、これはエスタにあてた手紙であるとはいえ、実質的に作者による夫人の死の意味の説明である。この手紙は彼女が逃走中にレンガ職人の家に立ち寄った目的の解説と、彼女の逃走を手助けしたレンガ職人の妻ジェニー(Jenny)の弁護、それから自分が死ぬ理由の説明となっている。夫人が死ぬのは病のためではなく恐れと良心の呵責によると断るところに、罪の重さに慄き苦悩する偽らざる夫人の感情が現れている。

#### 4. 結論

デッドロック夫人は自分の罪を後悔しその罰を当然のものとして背負いながらも、ホードンに耽溺することなく、レスタ卿やエスタの社会的体面に及ぼす影響に配慮する点で、墮落した女性として非難されない。デッドロック家の歴史に汚点を残した夫人は、デッドロック家の親族として歴代の先祖とともに葬られる。レスタ卿もときおりその霊廟をおとずれることから、夫人が赦された人間であることが分かる。Robert Higbie は、ディケンズ後期の作品の結末は現実を超越した理想的な世界に求める妥協であると考えた上で、『荒涼館』の結末には理想と現実が混在するとはいえ、不幸な結末とはならず、そこでは理想と現実との軋轢を解決しようとしていると述べている。<sup>6</sup> 夫人の過去の罪が若気の至りであり運命のいたずらであることは否定できず、社会的には赦されないとしても、夫人の過去の過ちは人間として必ずしも罪悪ではないのだと作者は解決を与えている。

貴婦人として生きることが夫人の社会的対面であり、彼女の冷淡で驕慢な態度は、内に隠された耐え難い寂しさや孤独を心理的に紛らわす行為であったと言えよう。彼女が実の娘だけに真実を告白し、数通の手紙の中で本心を語るのは、誰かに自分を理解してもらいたいという人間自然の情である。夫人がエスタへの手紙で語るように、夫人はたったひとりで苦しみ、身近にいる誰からも愛してはもらえず、救いの手も差し伸べられることはない。その耐え難い寂しさに衝き動かされて、親密な人との充実した関係を胸に思い描いたとき、夫人はホードンとの関係に抛り所を見出し、レスタ卿夫人としては満たされなかった十分な情緒の安定を取り戻した。デッドロック夫人はレスタ卿夫人という偽りの自分を捨てることで、それまで我が身を縛り苦しめ続けてきた罪の意識から解放され、安らかで自由な悟りの境地に達する。未来に絶望した夫人がひとりの人間として新たな生き方を求める姿こそ、自然的感情を取り戻したデッドロック夫人の姿にほかならない。

## 注

- 1 Andrew Sanders, ed., Charles Dickens, *Bleak House* (London: J. M. Dent, 1994) 9. 以下、テキストの引用は頁数を括弧内に示す。
- 2 J. Hillis Miller. "Interpretation in *Bleak House*." *Bleak House: Charles Dickens*. (New York: Macmillan Press, 1998) 39.
- 3 Bertrand Russell がその著書 *The Conquest of Happiness* の 'Boredom and Excitement' の項で指摘している退屈の本質的要素は、デッドロック夫人の倦怠感を考える上で非常に興味深い。  
 'One of the essentials of boredom consists in the contrast between present circumstances and some other more agreeable circumstances which force themselves irresistibly upon the imagination. It is also one of the essentials of boredom that one's faculties must not be fully occupied. . . . Boredom is essentially a thwarted desire for events, not necessarily pleasant ones, but just occurrences such as will enable the victim of ennui to know one day from another. The opposite of boredom, in a word, is not pleasure, but excitement.' (Bertrand Russell. *The Conquest of Happiness*. London: Unwin Books, 1965) 37.
- 4 デッドロック夫人はエスタを出産後、姉のバーバリから死産であると聞かされたため、それ以後自分の娘は死んだものと信じてきた。エスタが自分の娘であることを夫人が知るのは、29章でガッピーがエスタの本名はエスタ・サマソンではなくエスタ・ホードンであると聞かされるときである。  
 ' . . . and she then told her that the little girl's real name was not Esther Summerson, but Esther Hawdon.' (371)  
 'O my child, my child! Not dead in the first hours of her life, as my cruel sister told me; but sternly nurtured by her, after she had renounced me and my name! O my child, O my child!' (373)  
 また、36章のエスタの語りでは、デッドロック夫人が自分の娘が生きていることをはじめて知ったのは、エスタが天然痘の病に倒れているときであるとエスタは語る。  
 My unhappy mother told me that in my illness she had been nearly frantic. She had but then known that her child was living. She could not have suspected me to be that child before. (464)
- 5 その手紙の束は後にスモールウィード (Smallweed) の証言でデッドロック夫人がホードンに書き送った手紙であることが分かり、夫人のファーストネーム「オノリア」 (Honoraria) と署名されていることが判明する (54章)。
- 6 Robert Higbie. *Dickens and Imagination*. (Gainesville: University Press of Florida, 1998) 118.

## 参考文献

- Ayres, Brenda. *Dissenting women in Dickens' novels: the subversion of domestic Ideology*. Westport, Connecticut: Greenwood Press, 1998.
- Harvey, John. *Victorian Novelists and Their Illustrators*. New York: New York University Press, 1971.
- Higbie, Robert. *Dickens and Imagination*. Gainesville: University Press of Florida, 1998.
- Jordan, John O. ed. *The Cambridge Companion to Charles Dickens*. Cambridge: Cambridge University Press, 2001.
- Korg, Jacob, ed. *Twentieth century Interpretations of Bleak House: a collection of critical essays*. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice-Hall, 1968.
- Leavis, F. R., Q. D. Leavis. *Dickens the Novelist*. Harmondsworth: Penguin Books, 1972.
- Russell, Bertrand. *The Conquest of Happiness*. London: Unwin Books, 1965.
- Shatto, Susan. *The Companion to Bleak House*. London: Unwin Hyman, 1988.
- Steig, Michael. *Dickens and Phiz*. Bloomington: Indiana University Press, 1978.

Tambling, Jeremy ed. *Bleak House: Charles Dickens*. New York: Macmillan Press, 1998.

西條隆雄『ディケンズの文学—小説と社会—』東京：英宝社，1998年。

西條隆雄編『ヴィクトリア朝小説と犯罪』東京：音羽書房鶴見書店，2002年。

新野緑『小説の迷宮—ディケンズ後期小説を読む』東京：研究社，2002年。

松村昌家『ディケンズの小説とその時代』東京：研究社，1989年。

Henry James の作品における〈退場〉する女性と読者の評価  
—— “The Liar”を中心として ——

中井 誠一

SYNOPSIS

Henry James has some works where a main character “exits” from the stage after a climactic incident for some reason or other, which greatly hinders readers from appreciating the works. In “The Liar,” unlike other similar works, Everina, the main character in question, reenters the stage later and makes her plea, but after all she tends to be considered a liar the same as her husband. A close scrutiny, however, reveals that she is not lying, at least positively, and her false charge of destroying the portrait is dexterously laid by the narrator. The conventional evaluation of Everina as well as the characters in other “exit” stories has been and in some way *is* influenced by the Victorian norm of women, typified by the phrase “the Angel in the House,” that is, a virtuous wife and kind mother. It can be said that what is tested by James’ art of viewpoint is not only the readers’ imagination but also their prejudice.

I

Henry James には、物語の途中、特に山場を過ぎた時点で主要な登場人物が表舞台から姿を消す、あるいはしばらくいなくなるという作品が幾つかある。その理由は、本人の病とそれに続く死であったり、子供の死による引きこもりであったり、旅行であったりと様々だが、中にはその〈退場〉の理由づけが曖昧に思われるものもある。理由が前後関係からある程度必然性を有している場合でも、その人物が退場することによって物語の山場となっている中心的事件に対する当事者の考えが直接本人からもたらされず、作品理解は大きく阻害されることになる。

たとえば、主要人物の〈退場〉の最も顕著な例として後期の三大長編の一つ *The Wings of the Dove* (1901) があげられる。不治の病に冒された Milly Theale は、ヴェニス のレポレルリ宮殿で人生最後の時を十全に過ごそうと「女王」のような生活をしていた時、自分を慕ってくれていると思っていた Densher が実は Kate と婚約をしていることを知らされる。衝撃を受けた Milly の病状はそのまま悪化し、ついにはヴェニスで客死してしまう。しかし、その時点では Milly はすでに読者の前に姿を見せなくなっている。Mark 卿が Densher の不実を注進に及んだことも、Milly が顔を壁に向けてし

まったことも、すべて Milly の *confidant* である友人の Stringham 夫人から、Densher が間接的に聞かされたことである。ついに Milly は、この事件に対する自分の考えや感情を直接自らの言葉で伝えることなく舞台から退場することになる。結果的に Milly は Densher に財産を遺すのだが、このような経緯から導き出される解釈、つまり、Milly がロンドン社交界や Kate Croy に代表される〈悪〉と Densher の裏切りを経験しながらも、それを通じて最終的に高次元の精神性へ至り、従容として死を迎えるという最も一般的な解釈も、こうして Milly の証言不在のまま行われているのである。

同様に、病とそれに続く死によって舞台から退く人物に、後期の傑作短編 “The Beast in the Jungle” (1903) の May Bartram がいる。この短編も、John Marcher を優しく見守る May の謎めいた態度と Marcher の「野獣」の正体を巡って様々な議論が交わされてきたが、May の巫女的性格も、そして彼女には認知できたという「野獣」の正体も、彼女の死による舞台からの〈退場〉のためにその実体は永久に知り得ぬ謎となってしまう。

しかし、*The Wings of the Dove* のような大作、あるいは“The Beast in the Jungle”のような問題作であれば、退場した人物の思惑に関しても様々な解釈がなされており、その評価も多様性を見ているが、“The Author of ‘Beltraffio’” (1884) のような小品はさほど注目されていないということもあって、退場した人物に対する詳細な分析は余り行われることがなく、評価が固定化してしまう傾向にあるといえる。特にそれが Milly や May のように読者にとって肯定的に見える人物ではなく、むしろ否定的人物とみなされる場合はなおさらであろう。

この作品中の退場者は、“Beltraffio”という傑作小説を書いた作家 Mark Ambient の妻 Beatrice Ambient である。彼女は、息子 Dolcino が夫の芸術の毒牙にかかり精神的に退廃するよりはむしろ命を犠牲にすることを選び、病気で倒れた Dolcino を見殺しにした非道な母親とされている。しかし、その当事者である Beatrice は病床の息子とともに部屋に閉じこもった時点から読者の前に姿を見せず、完全に表舞台から退場してしまうのである。語り手である青年が Beatrice に再び会うのはそれから六ヶ月後のことで、その時点でさえ、この出来事に対する直接的な弁明を Beatrice 本人からは一言も聞くことはできない。しかし、Dolcino の死の前後の様子を綿密に検討してみると、Beatrice が子供を見殺しにした恐ろしい母親であるというイメージは、Beatrice が退場している間に彼女と対立していた作家の妹 Gwendolyn によって作り上げられた虚像であることが分かるのである。<sup>1</sup>

このように、こうした作品に共通するのは、ある出来事の当事者が退場させられ、弁明の機会を奪われている間に、その出来事に繋がりをもつ別の人物による過剰な〈解釈〉が行われているということなのである。

## II

これまで取り上げた作品は、主要な登場人物が表舞台から退場し、最後まで当人が弁明の機会を与えられない例であるのに対して、“The Liar”(1888)では、ある事件の後、それに関わる登場人物が一旦退場し、読者の前に姿を見せないという設定は同じであるが、その後しばらくして再び表舞台に姿を現すことになる。つまり、彼らは一応は自己弁護の機会を持つことができるということである。しかしここでも、彼らの退場の間に読者は視点人物による〈解釈〉の洗礼を受け、それによって人物理解が阻害されてしまうことになる。

“The Liar”も“The Author of ‘Beltraffio’”のように、当初はそれほど注目を集めた作品ではなく、表面上筋立てやテーマに大きな問題点を含んでいるようにも見えなかった。それにも拘わらずこの作品を *The New York Edition* に加えた James の主な意図としては、同じ巻の *The Turn of the Screw* (1898) と同様〈視点〉の問題が考えられる。発表当初は、主人公 Oliver Lyon に寄り添った三人称限定視点の語り手の〈語り〉をそのまま受け入れるような表面的な解釈が主であった。しかし、Edmund Wilson の *The Turn of the Screw* 論以降起こった James 作品見直しの余波を受けて、この作品も、一人称や三人称によって書かれた James 的〈視点〉を焦点にした解釈がされるようになった。Marius Bewley が *The Complex Fate* で Lyon の嘘と罪を暴き、Wayne C. Booth が *The Rhetoric of Fiction* の中でこの作品を取り上げ、Lyon の嘘を詳しく検証したのは周知のことである(Bewley 84-7, Booth 347-54)。この時点での批評上最大の問題点は、嘘つきは Capadose 大佐ひとりだけなのかということであった。つまり、かつて自分の結婚の申し出を断った Everina が、人を傷つけるようなひどいものではないとはいえ、“the most contemptible, the least heroic of vices” (349)<sup>2</sup> である嘘を臆面もなく口にする男と結婚していることに対する嫉妬心が、Lyon を〈悪意ある嘘つき〉にしているのではないかという指摘である。

その指摘に最も関連する出来事は、物語の山場の一つである肖像画破壊の場面と、それに続く登場人物の〈退場〉である。Lyon は、大佐の肖像画を描くことになるが、その肖像画は、彼の内面、つまり「嘘つき」であることが露呈するような、性格描写の絵にするつもりであった。その肖像画がほぼ完成したある日、休暇から戻ってきた Lyon は自分のアトリエに Capadose 大佐夫妻がいるのを知り、階上から様子を窺う。Everina は肖像画を見て、“It’s all there—it’s all there!”(374) と泣き崩れ、夫の内面が絵に「すべて表れてしまっている」ことを嘆く。大佐は、状況がよく分からないまま、アトリエを去る前にその肖像画をずたずたに切り裂

いてしまうのである。興味深いことに、この事件のすぐ後、Lyon はすぐさまフランスに渡り、二ヶ月もイギリスに戻って来ない。しかし、視点人物は相変わらず Lyon のままなので、結局大佐と Everina は強制的に表舞台 —— Lyon の視点の物語 —— から退場させられ、読者の前にしばらくの間姿を見せられないということになる。

BewleyやBoothの指摘以降、この物語は、無邪気ともいえる〈虚言癖〉のCapadose大佐と、嫉妬から〈悪意ある嘘〉をつく画家 Lyon という、性質の違う二人の嘘つきという側面から解釈されることが多くなっている。その論証についてはここで今更繰り返すまでもなく、大方納得できるものだと思う。この物語の中心的題材である「嘘つき」は、二つのタイプの嘘つきによって重層的に描き出されていると言ってよいだろう。

それでは、大佐の妻 Everina の評価に関してはどうだろうか。それはこの肖像画破壊事件と密接に関わっている。Capadose 大佐に対する見方を当初の全否定から脱し、Lyon の〈悪意ある嘘〉を前面に押し出す現在のほとんどの批評においてさえ、Everina が肖像画破壊の件で大佐に同調して嘘をついているということについては何の疑問も示されていないようである。Everina はその場に夫といたのだし、その後の弁明においても、一貫して夫と口裏を合わせ、その嘘を後押ししているからだ、というのである。しかし、子細に状況を再検討してみると、Everina が大佐に感化された嘘つきであるという主張には、問題点があるように思える。

確かに Everina が夫を非常に愛していることは誰の目にも明らかである。また、彼女は夫の虚言癖についても十分認識しているし、そのことで心を痛めてもいる。だからこそ、大佐の内面が抉り出されているという肖像画を見て、あれほど悲嘆にくれたのである。しかし、肖像画破壊事件は一旦置くとして、Everina が夫の嘘に積極的に荷担しているという事実は、彼女に対する David 卿の評言以外は物語のどこにも描かれていないのである。たとえば、かつて Everina の肖像画をインドの壺と交換に大公に譲った、という夫の虚言と思われる話を、彼女が Lyon から直接聞かされる場面がある。しかし、Everina は狼狽しながらも、それを肯定も否定もしない。ただ、“In the Grand Duke’s? Ah, you know its reputation? I believe it contains treasures.”(333) と、明確な返事を避ける答えをしているだけなのである。こうした態度に彼女の苦悩の様が典型的に表れている。Everina としては、愛する夫を裏切らず、かつ自らの誠実を保つためには、否定も肯定もしないという態度しか選択の余地がないからである。もちろん、こうした曖昧な態度は、彼女の複雑な状況と意識を理解しないものには、不徳な行為と映ることだろう。夫の嘘を否定しないのは、肯定していることに他ならないと。David 卿の Everina に

対する評価も、こうした態度から導かれたものだと解釈できるかも知れない。しかし、もし Everina を夫の嘘に追従する恥知らずな妻という設定にしたいのなら、James は彼女に積極的に夫の嘘を肯定させる場面を描いたのではないだろうか。結局、Everina が嘘をついたという〈事実〉は、この段階ではどこにも描かれていないのである。

それでは、Everina が夫と同様嘘つきだと見なされることとなる肖像画破壊の際の口裏合わせはどうであろうか。大佐が、肖像画を切り裂いた罪を、その時アトリエ近くをうろついていたという Geraldine という女に被せた時、誠実なはずの Everina がそれに追従して肯定したことは、彼女もまた嘘つきである〈決定的な証拠〉なのであろうか。

結論を先に言えば、ここでも Everina は嘘をついてはいないのである。実は、彼女はその女が犯人だとは一言も述べていない。彼女は、夫の証言に照らして自分の見たことを語っているに過ぎない。実際 Everina は夫が嘘をついていることを知らないのだと思われる。なぜなら、絵を破壊したのが夫自身であることを彼女はその場で見ていなかったからだ。ここで、大佐が肖像画を切り裂いた時、アトリエにいたのは大佐だけだったことに我々は注意を向けなければならない。その時にはすでに、Everina は泣きながら室外へ出ていってしまったのである。

“This way—we can pass,” he [the Colonel] added; and he drew his wife to the small door that opened into the garden. It was bolted, but he pushed the bolt and opened the door. She passed out quickly, but he stood there looking back into the room. “Wait for me a moment!” he cried out to her; and with an excited stride he reentered the studio.” (375)

これは重要な事実である。大佐はこの後短剣で肖像画を切り裂き、その罪を Geraldine に着せることになるが、彼女はたまたまそこを通りかかっただけで、大佐がとっさに犯人として利用しようとし、Everina にその存在を印象づけたと考えても不自然ではない。あるいはその女は Geraldine ですらなかったのかも知れない。後に、Everina は Lyon から、その女を本当に見たのかと聞かれ、こう答えている。“There was a person, not far from your door, whom Clement called my attention to. He told me something about her but we were going the other way.”(383) 確かに、Everina はその女の存在を認めており、先入観を抱いた読者には、彼女が大佐の嘘に口裏を合わせているように見えるが、その女が本当に Geraldine だったのかどうかは彼女と面識のある大佐にしか知りえず、虚心に読めば、彼女はただ単に、夫が注意

を向けた方向に女がいるのを見た、ということしか述べていないことが分かる。Lyon が、その女がやったと思うかと質問したのに対して、Everina は、“How can I tell? If she did she was mad, poor wretch.”(383) と答え、決して積極的にその女に罪を被せようとはしていない。犯人が誰かを知らない人間としては極めて当然な応答といえるだろう。

実は、Lyon 自身が、Everina が夫の肖像画破壊の事実を知らないという可能性を示唆している一節がある。

He [Lyon] had reminded himself repeatedly during the previous weeks that when her husband perpetrated his misdeed she had already quitted the room; but he had argued none the less—it was a virtual certainty—that he [the Colonel] had on rejoining her at once mentioned his misdeed. He was in the flush of performance; and even if he hadn't reported what he had done she would have guessed it. (381-82)

Lyon は意識の中では、Everina が夫の悪事を知らなかった可能性を認識しているのに、大佐が彼女に自分の罪を報告しただろうという単なる憶測を「ほぼ確実なこと」だと断定し、報告しなかったとしても夫の様子から察したはずだと、自らに言い聞かせるかのように強弁するのだが、その推測を裏付ける事実も証言も実際には提示されていないのである。Everina が嘘をついていないということに関して唯一の例外は、物語の最後の場面で、あの絵が本当に気に入っていたのかと Lyon が尋ねた時の彼女の答えである。彼女は“I loved it!” (386) と、自分の心を苦しめた当の絵について心にもないことを言う。しかし、これは「嘘」であろうか。もちろんこれは画家に対するお世辞であり、肖像画を描いてくれた相手を慮る言葉以外の何物でもない。ところが、Lyon は、彼女のその美辞の「嘘」を捉えて、“Truly, her husband had trained her well.”と断定してしまうのである。

このように、肖像画破壊の事件についても、Everina が大佐と同様嘘つきだと見なす明確な事実の裏付けは何もないのである。むしろ、Lyon の解釈をすべて排除して、ありのままの物語をたどっていけば、浮かび上がってくるのは、夫を愛しながらも、その虚言癖に悩み苦しんでいる、健気で優しい普通の Everina の姿に他ならない。それにもかかわらず、彼らが退場させられた間に行われた Lyon の多大な誘導的陳述によって、読者はいつしか彼と同じフィルターを通して彼女を見てしまう傾向にある。こうした Lyon の誘導的「語り」の背景には、大佐と Everina を共に「嘘つき」だと自らが納得したい心理的動機があることは明らかであろう。かつて求愛を拒んだ女性が虚言癖の男と結婚しただけでなく、それを知

りながらなお深く愛していることへの嫉妬心をなだめ、彼女を完全に諦めてしまう理由が彼には必要だったのである。しかし、この Lyon の〈悪意ある嘘〉は、あくまで自尊心の救済の段階でとどまっており、それを他の登場人物へ流布するような悪徳にまで及んでいるわけではないという点では、まだ酌量の余地があるといえる。人は日常生活の中で程度の差こそあれ、そうした自意識の防衛を行なうことがあるからである。その意味では、この物語は徹底して Lyon の内的心理劇であり、彼の「語り」は見事に成功しており、その結果として読者の先入観がどれほど強固なものとなったかは、“The Liar”の批評を具体的に検討してみれば分かるであろう。

たとえば、先述の Bewley は、Lyon の嘘を「他人の人格の誠実さを犯す」罪と断じながらも、“The Colonel and his wife secretly destroy the calumniating portrait, and when Colonel Capadose denies the act of vandalism his wife supports her husband in the life—supports him whole-heartedly, beautifully, competently.” (Bewley 85) と、肖像画破壊の行為自体を夫婦二人で行ったものと見なしているし、Bruce McElderry も“Horrorified at the ugly revelation, they slash the canvas to ribbons.” (McElderry 81) と、やはり二人ともに破壊の行為者として扱っている。さらには、S. G. Putt は “[S]he loyally destroys the tell-tale portrait [ . . . ].” (Putt 247) と述べ、まるで Everina が主犯であるかのような言及すらしているのである。その他の論文でも、Everina を行為者としなくても、彼女が夫に加担して嘘をついているという解釈は同様で、彼女の誠実さを弁明する研究者を見つけることは近年までできないのである。ようやく、1990年に Richard Hocks が次のように述べて、Everina が嘘をついていない可能性を初めて示唆した言及を行っている。

Lyon thus assures himself that the hitherto forthright Everina has herself finally lied for her husband in a crisis, although James provides a lovely little narrative “swerve” in the fact that Everina left the studio in tears (“Come away—come away,” she repeats) *before* her husband actually slashed the painting; hence Lyon can never know for certain that she lies at the end, although he assuredly persuades himself *she* has done so (Hocks 41).

Hocks は物語全体から Everina の清廉潔白を例証しているわけではないが、少なくとも肖像画破壊の件で Everina に決定的な嘘つきの烙印を押そうとする Lyon の精妙な誘導的陳述に疑義を唱えたのは画期的な視点だといえよう。しかしそれでも、以後 Everina への評価の転換が行われた形跡はほとんど見られない。たとえ

ば、翌年 Adeline Tintner は、“His wife loves him, sticks with him, and joins him in the destruction of the portrait that reveals his character.” (Tintner 44) と述べて、やはり Everina を肖像画破壊の共犯者としているのである。

### III

James の、一人称あるいは三人称限定視点の語り手の問題はこれまで多くの研究者に取り上げられ、論じつくされたかのような認識を我々は持っているかも知れない。確かに *The Turn of the Screw* のように、あらゆる角度から検討され、新たな議論展開の余地がほとんどないような作品もある。しかし、“The Liar” のように、読み直されたはずなのにそれが徹底されておらず、ごく近年になってようやく新たな読み直しを受けたもの、“The Author of ‘Beltraffio’” のようにまだ読み直しから抜け落ちているように思われるものがあるということは、留意すべき事実であろう。このことは何を意味しているのだろうか。もちろん、現代のポストモダンの批評理論の目まぐるしい展開によって、批評の方法論に焦点が移行したり、作品の外部的事項に依拠した研究が盛んであったことも見逃せないが、まだ多数の研究者がテキストの検討を文学研究の基盤としている状況においては興味深いことである。この作品ではとりわけ、肖像画破壊の際に Everina はその場にいなかったという基本的な事実にもかかわらず、あたかも共同行為者のような扱いをしている研究者がこれほど多いのは驚くべきことである。

ここで注意を向けたいのは、こうした作品の〈退場者〉の多くが女性であるという事実である。しかも、今あげた二作では退場者は共に〈妻〉という立場にある。作品が書かれた当時のヴィクトリア朝社会において女性がどのような存在であったかはここで改めて論じるまでもなく、数多くの小説や史書に描かれてきた。そして、James ほど、ヴィクトリア朝時代における女性の立場の矛盾を、階級的要因と心理的要因から描き出した作家はまれであることも周知の事実である。それは、彼が幾つかの作品で、女性家庭教師という当時もっとも階級的矛盾を抱えた職業の一つを効果的に使用していることでも指摘できる。そこには、アメリカ人作家 James ならではの、比較文化論的視点があることは言うまでもない。

『遙かなる道のり』の中で、川本静子は、Coventry Patmore の詩の題名に由来するという、ヴィクトリア朝時代の〈理想の女性像〉として「家庭の天使」という概念を紹介している。それは「つまり、両親に仕える従順な娘であり、夫を支えるよき妻であり、子供を慈しむ優しき母であり、かつ召使いを統べる賢い女主人である女性のことなのだ。彼女たちは常に優しく、正しく、清く、自己犠牲的な愛と献身によって周囲の人々を照らし導いていくのである」(川本 6) という。

また、古典的名著であるバンクス夫妻の『ヴィクトリア時代の女性たち』では、次のように述べられている。

女性の生物学上の本質についての当時の理論は、伝統的な宗教上の教えと結びついて、妻たる者の本質的に家庭的な役割という概念を強化した。すなわち女性の立場は、男性の「協力者」としてあり、不可避的に従属的なものであり、なによりも夫を喜ばすことが彼女の仕事であった。… さらにそのうえ、完全なる妻の務めは、夫に対する義務に限られてはいなかった。それは不可避的に母親としての義務を含むように広げられた。… ともあれ、母親というものは幼児期の子供の最良の乳母であり、少年期には最良の保護者であり教師である、と論じ立てられた。(バンクス夫妻 81-3)

もちろん、上記の概念がヴィクトリア朝の女性像のすべてだという単純な断言をするつもりはないが、これらはまさに当時の女性観のエッセンスだといえるだろう。こうした女性観は、この論で取り上げた作品の女性退場者たちの評価の枠組みにそのまま当てはまるように思える。つまり、Milly は自分を裏切った Densher を許した自己犠牲的女性であり、May は結婚はしなかったが最後まで Marcher を支え愛と献身に生きた女性であると見なされる。彼女たちの評価は概ね肯定的である。それに対して、Beatrice は子供を死に追いやった非道な女であり、Everina は夫を支え献身的ではあるが夫が嘘つきであるがゆえに彼女も不可避的に嘘つきという悪徳に染まっていると見なされる。そして、彼女たちの評価は総じて否定的になる。結局、彼女たちが退場している際の語り手の描写から受ける表層的印象がそのまま人物の評価に繋がり、それが作品解釈の基礎となる傾向にあるといえるのである。さらに、興味深いことに現在の批評も、このヴィクトリア朝的女性観を受けた解釈の枠組みの影響を微妙に引きずっている。Everina の評価は、Lyon に対する評価が大きく転換した後でさえもなお長い間、夫と、いわばセットでしか論じられなかったのである。

James は、ヴィクトリア朝社会の状況を巧みに利用した作品を多く書いており、“The Liar” の中でも、虚言癖の夫を庇いながらも誠実に生きていく女性を題材として取り扱っている。しかし、このような作品で James が我々に突きつけている課題の一つは、ヴィクトリア朝時代の女性の社会的立場の矛盾を読み取ることと同時に、作品を読む読者の姿勢の問い直しでもあるといえよう。James が施した視点技法の試薬によって検知されるのは、どれほど豊かな想像力と観察力を持っているかということだけではなく、どれほど偏見なく状況を読みとれるかという態度なのである。

## 注

\*本稿は、中四国アメリカ文学会第31回大会（2002年6月、於香川大学）における口頭発表の原稿を加筆修正したものである。

- 1 中井誠一「不幸と芸術——ヘンリー・ジェイムズの『ペルトラフィオ』の作者」（島根医科大学紀要 第18巻, 1995年）参照。
- 2 “The Liar”からの引用はすべて *The New York Edition of Henry James* 1971年の版により、括弧内に頁を数字で示す。

## 参考文献

- Andreas, Osborn. *Henry James and the Expanding Horizon*. The University of Washington Press, 1948. New York: Greenwood Press, 1969.
- Bewley, Marius. *The Complex Fate: Hawthorne, Henry James and some other American Writers*. Chatto and Windus, 1952. New York: Gordian Press, Inc., 1967.
- Bishop, George. “Passing Judgment on ‘The Liar’.” *When the Master Relents: The Neglected Short Fictions of Henry James*. Ann Arbor: UMI Research Press, 1988. 41-57.
- Booth, Wayne C. *The Rhetoric of Fiction*. 1961. Chicago: The University of Chicago Press, 1983.
- Gale, Robert L. *A Henry James Encyclopedia*. New York: Greenwood Press, 1989.
- Hocks, Richard A. *Henry James: A Study of the Short Fiction*. Boston: Twayne Publishers, 1990.
- Horvath, Brooke K. “The Life of Art, the Art of Life: The Ascetic Aesthetics of Defeat in James’s *Stories of Writers and Artist*.” *Modern Fiction Studies*, 28, 1982.
- James, Henry. *The Complete Notebooks of Henry James*, ed. Leon Edel and Lyall H. Powers. New York: Oxford University Press, 1987.
- . “The Liar,” Vol. 12 of *The New York Edition of Henry James*. New York: Augustus M. Kelley, Publishers, 1971. 311-88.
- McElderry, Jr., Bruce R. *Henry James*. New York: Twayne Publishers, 1965.
- Powers, Lyall H. “Henry James and the Ethics of the Artist: ‘The Real Thing’ and ‘The Liar.’” *Texas Studies in Language and Literature*, 3, 1961.
- Putt, S. Gorley. *Henry James: A Reader’s Guide*. Ithaca, NY: Cornell University Press, 1966.
- Segal, Ora. “‘The Liar’: A Lesson in Devotion.” *R. E. S. New Series*, Vol. XVI, 63, 1965. 272-81.
- Tintner, Adeline R. *The Cosmopolitan World of Henry James*. Baton Rouge: Louisiana State University Press, 1991.
- Wright, Walter F. *The Madness of Art: A Study of Henry James*. Lincoln: University of Nebraska Press, 1962.
- 青木次生『ヘンリー・ジェイムズ』芳賀書房, 1998.
- 北条文緒, クレア・ヒューズ, 川本静子編『遙かなる道のり イギリスの女たち 1830-1910』国書刊行会, 1989.
- 中村真一郎『小説家ヘンリー・ジェイムズ』集英社, 1991.
- バンクス夫妻『ヴィクトリア時代の女性たち——フェミニズムと家族計画』河村貞江訳, 創文社, 1980.

# 最小領域による裸名詞句副詞の認可について

根之木 朋貴

## SYNOPSIS

This paper provides a comprehensive account of bare-NP adverbs in English as originally suggested by Larson (1985). Larson insists that head nouns of bare-NP adverbs can be assigned inherent Case through the specific [+F] filter. But we point out several problems in his analysis of case where some ungrammatical sentences cannot be excluded from within a GB framework. Thus, we need to assume that inherent Case of bare-NP adverbs should be licensed without considering D-structure. Alternatively, we suggest a minimal domain analysis based on Chomsky's (1995) definition of domains. Moreover, we follow Chomsky and Lasnik's (1993) proposal that inherent Case is assigned by  $\alpha$  (NP or VP) to NP only if  $\alpha$   $\theta$ -marks NP. As a result, although it is not clear whether a minimal domain analysis should be applied to some phenomena, such as WH-movement, inherent Case of bare-NP adverbs can be licensed with  $\alpha$   $\theta$ -marking it as an adjunct within the internal domain, and while structural Cases of NPs are checked with  $\alpha$  selecting them as complements within the checking domain.

## 0. 序

本稿では Larson(1985)により提案された裸名詞句副詞(bare-NP adverb)に関する分析を基に、GB 理論ならびに極小主義理論の枠組みの中で最も適切な認可方式を提案する。Larson は裸名詞句副詞を(1)のように定義している。(下線部は筆者による。)

(1) a. The membership in the class of English bare-NP adverbs is determined on the lexical grounds. The ability of an NP to occur as a bare-NP adverb depends crucially on the specific noun that appears as its head.

b. Bare-NP adverbs have the internal forms of NPs, but the function and distribution of "adverbial categories" such as PP, ADVP, and S'.

(Larson 1985:599)

裸名詞句副詞は(1b)の下線部にあるように裸名詞句副詞の特定の主要部名詞はその意味として、時間(Temporal), 場所(Location), 方向(Direction), 様態(Manner)に分類される。(2a-d)ではそれぞれ<sub>[NP adv]</sub>の部分が裸名詞句副詞に該当する。

- (2) a. I saw John [NP<sub>adv</sub> that day]. (Temporal)  
 b. I saw John [NP<sub>adv</sub> some place you'd never guess]. (Location)  
 c. John was headed [NP<sub>adv</sub> that way]. (Direction)  
 d. Max pronounced my name [NP<sub>adv</sub> every way imaginable]. (Manner)

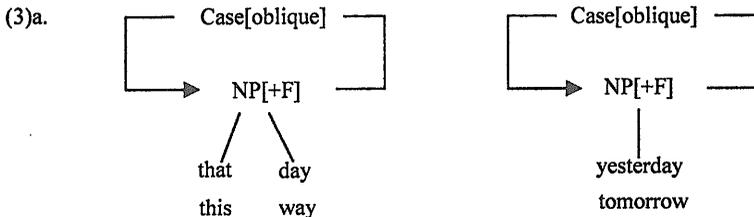
(Larson 1985:606-607)

本稿の構成は以下の通りである。第1節ではVPシェル構造に基づきD構造での内在格付与という形で裸名詞句副詞を分析したLarson(1988,1990)、Stroik(1990)、第2節では名詞句内部に生じ、名詞句を修飾する裸名詞句副詞は前置詞句の省略形であると主張しているMcCawley(1988)とSuzuki(1987)を取り上げる。そしてGB理論の枠組み内での彼らの分析では、D構造での内在格付与を阻止できないために不適切な構造を排除できず、またどのような名詞句構造で裸名詞句副詞が認可されるのかについても十分に説明することができない、などの問題点を指摘する。そのような問題点の解決案として第3節ではChomsky&Lasnik(1993)による内在格の定義を基に、裸名詞句副詞の内在格が主要部 $\alpha$ (動詞・名詞)とどのような選択関係のうえで認可されるべきかを明らかにする。具体的には、裸名詞句副詞が所有する内在格が、どのような構造で認可されるのかについてはChomsky(1995)による最小領域・照合領域・内部領域の定義に基づいた構造を用いる。本分析では、裸名詞句副詞はD構造で内在格が付与されるのではなく、主要部 $\alpha$ と併合の段階で付加詞として機能し、副詞的 $\theta$ 役割に基づき内在格が認可されると主張する。最後に今後の課題に触れる。

## 1. GB理論での分析とその問題点

### 1.1. 動詞句姉妹としての裸名詞句副詞—Larson(1985)とStroik(1990)

本節ではGB理論の枠組みで、VPシェル構造で動詞を修飾する裸名詞句副詞がどのような方法で認可されているのかについて概観する。まず、裸名詞句副詞は自ら斜格以外にも副詞的 $\theta$ 役割を付与する能力が兼ね備えられているというLarson(1985)の主張を考察する。裸名詞句副詞の内在的斜格は(3)のように認可される。



(3)では内在的な斜格が *day, way, yesterday, tomorrow* などの主要部名詞の持つ特殊な [+F] のフィルターを通じて付与される。また、Larson は(4)を提案し、裸名詞句副詞の持つ副詞的  $\theta$  役割を認可している。

(4) Adverbial  $\theta$ -role assignment

Assign an adverbial  $\theta$ -role to  $\alpha$ , where  $\alpha$  is any phrase. (Larson 1985:606)

(4)では(3)で概観した主要部名詞の持つ特殊な [+F] に基づいて副詞的  $\theta$  役割が付与されることを示している。

次に裸名詞句副詞の動詞句内部における生起位置について見ていく。Stroik(1990)は(5)-(8)を挙げ、二重目的語構文の間接目的語と直接目的語との間に非対称的な *c*-統御の関係が見られるように、直接目的語(NP)と副詞類(adv)との間にも同じような関係が見られると考察している。<sup>1</sup>

(5) Superiority

- a. Who<sub>NP</sub> did you see where<sub>adv</sub>?
- b. \*Where<sub>NP</sub> did you see who<sub>adv</sub>?

(6) WH-movement and Weak Crossover<sup>2</sup>

- a. Who<sub>i</sub> did Sue astonish everyday his<sub>i</sub> brother showed up t<sub>i</sub> drunk?
- b. \*Which day<sub>i</sub> did you read a poem about its<sub>i</sub> sunset t<sub>i</sub>?

(7) Each...,the other construction

- a. I photographed each man somewhere near the other's house.
- b. \*I photographed a man from the other's city each place I stopped at.

(8) Polarity Any<sup>3</sup>

- a. I showed no one<sub>NP</sub> anywhere<sub>adv</sub>.
- b. \*I showed anyone<sub>NP</sub> nowhere<sub>adv</sub>.

(Stroik(1990:656))

(5)では直接目的語である *who* は前置できるのに対して副詞類である *where* は前置することは不可能である。また、(6)で WH 移動が行われた場合、*who* は *his* を束縛できるのに対して副詞類 *which day* は *its* を束縛することはできない。(7b)の *each...,the other* 構文では、*each...*内の副詞類による *the other* への *c*-統御ができず、(8b)でも副詞類 *nowhere* による *anyone* への *c*-統御が不可能である。

以上の事実をまとめると、二重目的語構文の場合と同じように直接目的語(NP)と副詞類(adv)との間にも非対称的な *c*-統御の関係があるため副詞類は通常動詞の姉妹位置に生起することになる。従って、(5)-(8)の基本的な D-構造は(9)である。

(9) [<sub>VP</sub> Spec [<sub>V</sub>e [<sub>NP</sub>NP] [<sub>V</sub>-V Adv]]]

(Stroik 1990:657)

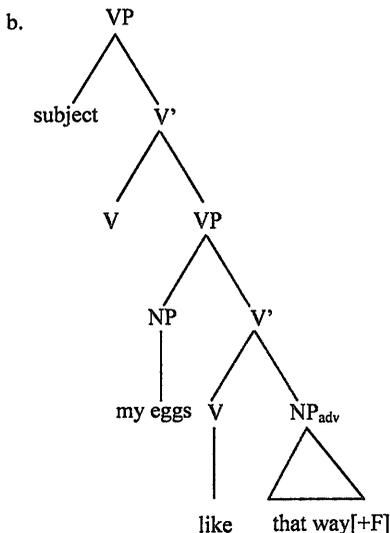
(9)を仮定して Stroik は Larson(1988, 1990)による VP シェル構造を基に裸名詞句副詞もまた同様に動詞の姉妹位置において認可される、と主張している。

次は具体的に(10)の裸名詞句副詞 *that way* がどのように認可されるかを検証する

(10) I like my eggs *that way*. (Stroik 1990:660)

(10)の D-構造と樹形図はそれぞれ(11a-b)となる。

(11) a. [<sub>VP</sub> t subject [<sub>v</sub> e [<sub>NP</sub> my eggs][<sub>v</sub>-like [<sub>NPadv</sub> that way]]]]



(11b)において裸名詞句副詞は *that way* には自ら内在格と副詞的  $\theta$  役割を付与する能力を兼ね備えられているため、動詞が繰り上がる前の D 構造の段階で内在格が認可される。

しかし、ここで(12)に見られる Larson(1985)と Stroik(1990)の分析の問題点を指摘したい。(下線部は筆者による。)

(12) a. We spent that day in New York.

b. That day passed very quickly.

(Larson 1985:60)

裸名詞句副詞 *that day* は目的語位置、主語位置に生起する。目的語・主語位置は構造格が与えられるため、彼らの分析では D 構造で与えられる内在格との間格の衝突が起こり非文法的になるはずである。そこで、このような問題点の解決策として提案された Arimura(1989)の分析を概観してみよう。この分析では、[+]<sub>F</sub>素性は裸名詞句副詞になる能力そのものを意味するので、付加詞位置に生起する主要部名詞はその[+]<sub>F</sub>素性によって裸名詞句副詞として機能するが、主語・目的語位置に生起する場合はその素性は働かず項として純粋な名詞句になる。<sup>4</sup>

## 1.2. D 構造と内在格

これまででは裸名詞句副詞を VP シェル構造内で、認可する仕組みを概観した。さらにそこで生じる問題点への修正案として裸名詞句副詞が項位置にあるときは構造格が与えられ、付加詞の位置にいるときは副詞類として内在格が与えられると結論付けた。

しかし我々はここで GB 理論の枠組み内では解決できないある問題点に直面する。Kobayashi(1987)、Emonds(1987)が提示した(13)-(14)を見てみよう。<sup>5</sup>

(13) a. *e* didn't seem [<sub>AP</sub> [<sub>NP</sub> that day]] [<sub>A</sub> ripe] (Kobayashi 1987:338)

b. \*It didn't seem that day ripe. (cf. That day didn't seem ripe)

(14) a. *e* was forgotten [<sub>NP</sub> that day]. (Emonds 1987:625)

b. \*It was forgotten that day. (cf. That day was forgotten)

GB 理論の枠組みでは、非文法的な(13b)と(14b)を排除することができない。その理由は、D 構造である(13a)と(14a)の *that day* はいずれも項であるため、純粋な名詞句として構造格が付与されなければならないのだが、裸名詞句副詞として構造の段階で内在格が付与されるので、(13b)と(14b)を誤って文法的であるとみなしてしまうからである。このように、Larson(1988,1990)と、Stroik(1990)分析の特徴は裸名詞句副詞の内在格を VP シェル構造内で認可しようと試みた点にあるが、GB 理論の枠組み内での彼らの分析では D 構造での内在格付与は阻止できないために非文法的な(13b)と(14b)を排除することはできない。

## 2. 名詞句内部の裸名詞句副詞

前節では、VP シェル構造内において動詞を修飾する裸名詞句副詞に関する過去の分析法を概観し、その問題点を指摘したが、次は名詞句内部に生じ、主要部名詞句を修飾する裸名詞句副詞について見ていくことにする。具体的には、McCawley(1988)の示す(15)の[ ]内の下線部がそれに該当する。

(15) a. The police will ask you about [your arrival last week].

b. We are surprised at [the repression of free speech this way].

c. He is afraid of [occurrences of malaria here]. (McCawley 1988:587)

(15)では裸名詞句副詞 *last week*, *this way*, *here* が主要部名詞 *arrival*, *repression*, *occurrences* をそれぞれ修飾している。<sup>6</sup> そこで本節では裸名詞句副詞は名詞句内部に生起することが可能であるという事実を踏まえ、McCawley(1988)と Suzuki(1987)による「裸名詞句副詞は前置詞句を省略した表現である」という主張を批判的に検証する。そして裸名詞句副詞の基本的な範疇は名詞句であることを様々な事実を用いて主張したい。

## 2.1. 前置詞句省略形としての裸名詞句副詞—McCawley(1988)と Suzuki(1987)

McCawley(1988)と Suzuki(1987)は、裸名詞句副詞は名詞句を修飾することができるため前置詞句の省略形だと主張している。彼らの主張の主要な点は(16)である。

(16) 裸名詞句副詞と前置詞句は、名詞句を修飾できるという点において共通している。また裸名詞句副詞の主要部名詞である way、day などは in、on などの前置詞句と意味的に結びついている。

しかし、(17)-(19)で示すように裸名詞句副詞は前置詞句とは様々な点で異なる。(下線部は筆者による。)

(17) a. It was (\*in) that way that she cooks dinner.

b. It was (\*in) that place that she was born.

(18) a. (\*In) that way, she cooks dinner.

b. (\*In) that place, she was born. (Arimura 1989:82-83)

(19) a. Peter worded the letter that way.

b. How<sub>i+<sub>j</sub></sub> did you tell her e<sub>i</sub>[that Peter worded the letter e<sub>j</sub>]?  
(Arimura 1989:77-78)

(17)において、裸名詞句副詞 that way は前置詞句 in that way と異なり分裂文の焦点位置に生起することができ、(18)に示すように話題化も可能である。また(19a)では動詞 worded は裸名詞句副詞 that way を下位範疇化しており、(19b)のように疑問詞化すると how となり項の位置に生起することが可能である。こうした事実は、裸名詞句副詞の基本的な範疇は前置詞句とは違うものであることを示している。

さらに、裸名詞句副詞は前置詞句の省略形ではないという事を示す証拠があり、(20)-(21)が示すように関係詞化を行う際に[+F]素性を持つ裸名詞句副詞の主要部名詞句 way は前置詞を残すことはない。<sup>7</sup>

(20) a. the [way / \*direction / \*course] (that) you traveled to France e

b. the [way / \*direction / \*course] for you to travel to France e

(21) a. the [way / \*manner / \*fashion] (that) you traveled to France e

b. the [way / \*manner / \*fashion]for you to travel to France e  
(Larson 1985:615)

逆に[-F]素性である名詞 direction, course, manner は関係詞化を行う際には必ず前置詞 in を残す。

(22) a. the [\*way / direction / course] (that) you traveled to France in

b. the [\*way / direction / course] for you to travel to France in

- (23) a. the [\*way / manner / fashion] (that) you traveled to France in  
 b. the [\*way / manner / fashion] for you to travel to France in

以上をまとめると(20a)と(21a)の D 構造は(24a)、(22a)と(23a)の D 構造は(24b)となる。

- (24) a. [<sub>NP</sub> NP<sub>i</sub> [<sub>CP</sub> O(that)<sub>[IP</sub> NP VP [<sub>NP</sub> e<sub>i</sub>]]]]  
 b. [<sub>NP</sub> NP<sub>i</sub> [<sub>CP</sub> O(that)<sub>[IP</sub> NP VP [<sub>PP</sub> Pe<sub>i</sub>]]]]

(24a)が示す通り裸名詞句副詞は、McCawley(1988)と Suzuki(1987)が主張するように前置詞句の省略形ではなく、基本的な範疇は名詞句であることが分かる。

## 2.2. 名詞句内部の裸名詞句副詞とその問題点

名詞句内部の裸名詞句副詞はどのようにして認可されるのだろうか。Larson(1985)は(25)で示す属格と同じプロセスで(26)と(27)の裸名詞句副詞 *every morning* と *yesterday* の内在格が付与されると主張している。

- (25) a. destruction of the city  
 b. city's destruction

- (26) a. lecture every morning  
 b. every morning's lecture

- (27) a. the refusal yesterday  
 b. yesterday's refusal

(Larson 1985:598)

しかしながら、(26a)と(27a)での裸名詞句副詞の認可方式にも問題が見られる。というのは、裸名詞句副詞は D 構造で自ら斜格を得るので、さらに(26b)と(27b)で属格が与えられると格の衝突を引き起こすからである。

また(28a)のように *then, now, there, here* が裸名詞句副詞として名詞句 *the lecture* を修飾する場合について考えてみる。その場合は(26)-(27)とは異なり、(28b)のように裸名詞句副詞を前置することができない。

- (28) a. the lecture then /now / there / here  
 b. \*then's /now's / there's / here's lecture

(Larson 1985:612)

以上の事実から、動詞句の場合と同様に名詞句内部に生起する裸名詞句副詞がどのような構造で内在格が認可されるかについては不明確であることが分かる。

## 2.3. GB 理論枠組みの限界

第1節では、VP シェル構造内において動詞を修飾する裸名詞句副詞、本節では名詞句内部において名詞を修飾する裸名詞句副詞の分析を概観し、そこで生じた問題点を指摘してきたが、これらの問題点を克服する修正案は(29)である。

(29) D 構造での内在格付与を阻止し、主要部(名詞・動詞)との併合の段階で裸名詞句副詞が内在格を得ることができる構造を仮定する。

(29)の要求を満たすためには、D 構造がない状況で、裸名詞句副詞の内在格が認可されることが望まれるが、これまで検証してきた GB 理論の枠組みの中ではこのような要求を満たす手立てはない。そこで次節では D 構造が破棄された極小主義理論の枠組みの中で裸名詞句副詞の内在格を適正に認可する。

### 3. 最小領域分析による裸名詞句副詞の認可

#### 3.1. 最小領域分析

本節では前節での GB 理論の枠組みで生じる問題点を克服するために、Chomsky(1995)の極小主義理論の枠組みの中で主要部との局所関係を踏まえた上で、裸名詞句副詞の内在格がいかなる構造で認可されるべきかを再考する。そのために最小領域・照合領域・内部領域といった領域の定義を用いた構造を土台にし、主要部との局所的な選択関係を基にして裸名詞句副詞の内在格が認可されるものとする。以下、領域という概念を用いて構造格だけでなく内在格の照合も行うこのような分析を、本稿では「最小領域分析」と呼ぶことにする。

##### 3.1.1. 内在格と領域の定義

まずは内在格と最小領域・照合領域・内部領域を定義し、最小領域分析の概要を明らかにする。(30)は Chomsky & Lasnik(1993)による内在格の定義である。<sup>8</sup>

(30) Inherent Case is assigned by  $\alpha$  to NP only if  $\alpha \theta$ -marks NP.

(Chomsky & Lasnik 1993:114)

(30)はあくまで項位置に生起する名詞句の内在格の定義であるため、本稿で取り上げている付加詞の位置に生起する裸名詞句副詞の内在格とは主要部  $\alpha$  との選択関係が少し異なるものであることに注意したい。つまり裸名詞句副詞は、主要部  $\alpha$  によって項としては  $\theta$  標示されないため、自ら付加詞として副詞的  $\theta$  役割に基づき内在格を得る、という選択関係が前提となる。そのように考えると、主要部  $\alpha$  (動詞・名詞)が名詞を補部として選択する場合は、その名詞句は項として機能するため構造格が付与されるが、逆に  $\alpha$  によって名詞が選択されなければ、付加詞として機能するため  $\theta$  標示に基づき裸名詞句副詞の内在格が認可されることになる。

次に(30)で定義された内在格は主要部  $\alpha$  といかなる位置関係で認可されるべきか、そしてそのような内在格は構造格とどのような点で異なるのかを検証したい。

(31)は Chomsky(1995)による領域・補部領域・残余領域の定義である。<sup>9</sup>

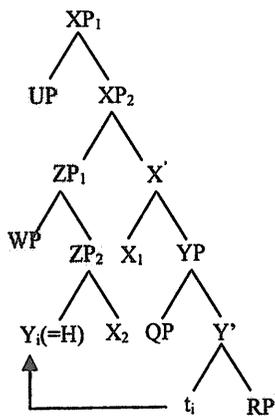
(下線部は筆者による。)

(31) 領域・補部領域・残余領域

- a. 主要部 X の領域は、X の最大投射 XP に含まれる節点から、X 自身と X の投射 X' と XP を除いた部分である。
- b. 主要部 X の領域のうち、X の姉妹要素とそれに支配される部分を X の補部領域と呼ぶ。
- c. 主要部 X の領域から X の補部領域を除いた部分を X の残余領域と呼ぶ。

我々に関心があるのは、主要部と補部とがいかなる文法関係を持つことができるかというさらに局所的な領域である。ゆえに領域・補部領域・残余領域の補部・指定部の内部の要素を除いた領域はそれぞれ最小領域・照合領域・内部領域となり、図式化すると(32)のようになる。

(32)



(Chomsky 1995:177-178)

まず、表示の基本的な要素は連鎖であるため、主要部 Y が移動し連鎖を形成することにより主要部と補部、そして付加部との局所関係が成立する。(31)に従うと連鎖(Y, ti)の最小領域は{UP, ZP1, ZP2, WP, RP}となる。連鎖(Y, ti)の照合領域は{ZP1, ZP2, WP}となり、それぞれ補部として選択され項として機能するため構造格が照合されることを示す。また、連鎖(Y, ti)の内部領域は{QP, RP}となり、QP と RP は主要部の補部としては選択されることはない。以上のことから照合領域には項として機能するもの、内部領域には付加詞として機能するものが生起することが予測できよう。

そこで我々は、裸名詞句副詞の内格は主要部が付加詞として併合の段階で選択関係

が決定されるものとして、内部領域において適正に認可されるべきであることを主張する。

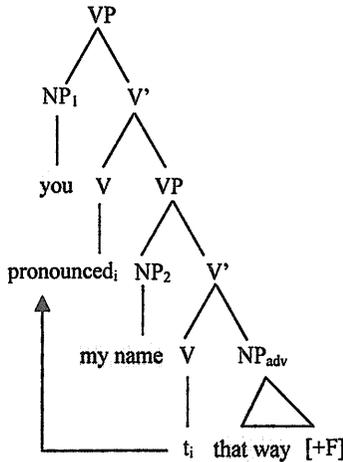
### 3.1.2. 内部領域の裸名詞句副詞

3.1.1.では内在格と領域を定義することにより主要部 $\alpha$ によって補部として選択される場合は構造格が与えられ、逆に選択されない場合は、内在格が認可される、と主張した。では具体的に最小領域分析を裸名詞句副詞 *that way* を用いた(33a)に適用することにする。(33a)の最小領域・照合領域・内部領域はそれぞれ(33b i-iii)で示す通りである。

(33) a. You pronounced my name *that way*.

(Larson 1985:598)

b.



i. 連鎖(*pronounced*,*t*)の最小領域 = { $NP_1$ (*you*),  $NP_2$ (*my name*),  $NP_{adv}$ (*that way*)}

ii. 連鎖(*pronounced*,*t*)の照合領域 = { $NP_1$ (*you*),  $NP_2$ (*my name*)}

iii. 連鎖(*pronounced*,*t*)の内部領域 = { $NP_{adv}$ (*that way*)}

(33bi)では主要部 *pronounced* が移動し、その結果生じた最小領域内で照合関係が決定される。(33bii)における照合領域内に位置する  $NP_2$ (*my name*)は補部として選択され、項として機能するため、構造格(対格)が照合される。しかし、(33biii)において動詞 *pronounced* は内部領域内の  $NP_{adv}$ (*that way*)を補部として選択しないため、裸名詞句副詞 *that way* は付加詞として機能し、併合の段階で副詞的 $\theta$ 役割に基づき内在格が認可されることになる。

3.2. 最小領域分析の帰結と残された問題点

3.2.1. 最小領域分析の利点

前節では最小領域分析を用いて、照合領域内では項として構造格が照合され、内部領域では付加詞として内在格が認可されると結論付けた。ゆえにこの分析の利点は、D 構造が破棄される極小主義理論においても、内在格と構造格の区分为可能になったことである。

では次に GB 理論内の枠組みでは排除することができなかった(13)-(14)(それぞれ(34)-(35)として再掲)に関しても最小領域分析を適用することにする。

(34) a. *e* didn't seem [<sub>AP</sub> [<sub>NP</sub> that day] [<sub>A</sub> ripe]]

b. \*It didn't seem that day ripe.

(34a)では *that day* は指定部に位置していると考えられるため項として機能し照合領域において構造格が与えられなければならない。しかし *that day* は補部として選択されず、構造格は照合されないため(33b)は非文法的である。

次に(35)を見てみよう。

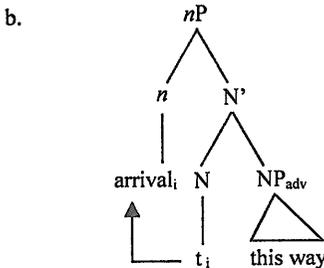
(35) a. *e* was forgotten [<sub>NP</sub> that day].

b. \*It was forgotten that day.

(35a)の *that day* は *forgotten* の付加部としてではなく、補部として解釈されるため、項として機能し構造格が与えられなければならない。しかし(35b)の *that day* は内部領域に生起しているために補部としては解釈されず、誤って付加部として解釈されるので、非文法的である。以上のように最小領域分析を用いることにより非文法的な(34b)と(35b)を排除することができる。

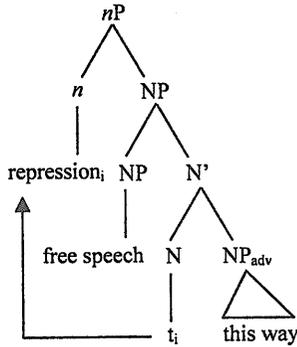
また第2節であげた(15a-c) (それぞれ(36a)(37a)(38a)として再掲)のように名詞句内部の裸名詞句副詞についても動詞句の場合と同様に(36b)(37b)(38b)で示す通り Radford(2000)が提案した名詞句のシェル構造を基にして、最小領域分析を適用することができる。

(36) a. The police will ask you about [<sub>your arrival</sub> last week].(=(15a))



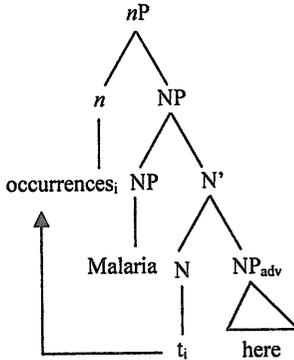
(37) a. We are surprised at [the repression of free speech this way]. (= (15b))

b.



(38) a. He is afraid of [occurrences of malaria here]. (= (15c))

b.



(36b)(37b)(38b)における名詞句のシェル構造では裸名詞句副詞 *last week, this way, here* は名詞句内では全て内部領域に生起している。またこれらの裸名詞句副詞はそれぞれ主要部名詞 *arrival, repression, occurrences* によって補部としては選択されないため、付加詞として機能し、副詞的  $\theta$  役割に基づき内在格が認可される。

### 3.2.2. 最小領域分析の課題

最小領域分析では内部領域で認可される内在格と、照合領域で認可される構造格とを主要部との併合の段階で区別することが可能である。また内在格の定義 (30) により動詞句だけでなく名詞句内に生起している裸名詞句副詞を認可することも可能である。

しかし、我々に残された問題点として名詞句内の裸名詞句副詞を疑問化することができるのかどうかについてはいまだ不明瞭なままである。(39)を見てみよう。

- (39) a. \*I wonder when<sub>i</sub> the police asks you about [your arrival  $t_i$ ].  
 b. \*I wonder how<sub>i</sub> [they are surprised at the repression of free speech  $t_i$ ].  
 c. \*I wonder where<sub>i</sub> he is afraid of [occurrences of malaria  $t_i$ ].

(39)において注意すべき点は、疑問詞 when, how, where がそれぞれ動詞句 ask, be surprised at, be afraid of を修飾している場合は文法的であるが、この場合疑問詞 when, how, where はそれぞれ名詞 arrival, repression, occurrences を修飾していると考えため全て非文法的になる。<sup>10</sup> ゆえに名詞句内の裸名詞句副詞は疑問化することは不可能であることが予測される。しかし(40)も考えられる。

- (40) a. [Which day's lecture]<sub>i</sub> are you most interested in  $t_i$ ?  
 b. \*[Which day]<sub>i</sub> are you most interested in lecture  $t_i$ ?

(40a)において随伴を行っている which day's lecture は移動することができるため必ずしも疑問化が不可能であることはない。一方(40b)の非文法性は、lecture 以下がひとつの構成素を形成しているため which day の移動が不可能であるからだと思われる。とはいえ、名詞句内の裸名詞句副詞を疑問化することに関してはこれまで論じてきた最小領域分析が適用され得るのかについては依然検討の余地が残されている。<sup>11</sup>

#### 4. 結語

本稿では GB 理論の枠組み内で裸名詞句副詞を認可しようと試みた Larson(1985)、Stroik(1990)で生じる2つの問題点を指摘した。1つ目の問題点はD構造での内在格付与を阻止できないこと、2つ目の問題点は名詞句構造において裸名詞句副詞が内在格を得るプロセスが不明確であることであった。これら2つの問題点の解決案として、最小領域分析を用いて、主要部 $\alpha$ (動詞・名詞)によって補部として選択される場合は項として機能するため、照合領域において構造格が与えられ、逆に主要部 $\alpha$ によって選択されない場合は、付加詞として機能するため内部領域において副詞的 $\theta$ 役割に基づき内在格が認可される、と結論付けた。本稿での最小領域分析においては、裸名詞句副詞の疑問化に対する最小領域分析の適用に関しては検討の余地が残されたが、併合の段階で主要部と補部・付加部との間の局所的な選択関係が明らかになり、さらに裸名詞句副詞の内在格は内部領域で認可され、主格・対格などの構造格は照合領域で認可されるため、D構造が破棄された極小主義理論内の枠組みにおいても内在格と構造格の区分が可能になった。

## 注

\*本稿は、第19回甲南英文学会研究発表会(2003年7月5日、於甲南大学)での口頭発表草稿に加筆修正をしたものである。

- 1 二重目的語構文における直接目的語と間接目的語間にみられる非対称的なc-統御の関係に関しては Barss and Lasnik(1986)を参照のこと。
- 2 本文にもあるように、弱交差(Weak Crossover)は、wh句がその痕跡をc-統御する場合を指す。ここでは弱交差に違反する例を示す。
  - (i) ?\*Who<sub>i</sub> does his<sub>i</sub> mother like t<sub>i</sub>?
  - (i) では Who は his を超えて移動しているが his はその痕跡を c-統御していないので非文法性が生じている。
- 3 否定極性 any に関して Larson(1990)は以下の例を挙げている。(下線部は筆者による。)
  - (i) a. John visited few friends [any day this week].
  - b. \*John visited any friends [few days this week].
  - c. John visited someone [any day this week].
 (i a-c)は[ ]内の副詞類が全て直接目的語により c-統御されるべきであることを示している。
- 4 ここで注意すべきことは、裸名詞句副詞は ly 副詞などの動詞句副詞とも異なることである。
  - (i) は Nakajima(1987)による。(下線部は筆者による。)
  - (i) a. She repeated softly the question.
  - b. Mary recommended casually the name of a close friend.
  - c. Bill saw quickly the intension.
 (i)において注意すべきことは動詞句副詞(ここでは softly, casually, quickly)の中には動詞と目的語の間に生起することができるものがあることである。Nakajima はこのような隣接性の条件にかからない副詞類を非主要範疇であると主張しているが裸名詞句副詞は動詞と目的語の間に生起することは不可能であるため主要範疇に属することになる。
- 5 Emonds(1987)はこのような裸名詞句副詞を説明するために、前置詞句の省略形であると捉え (i) の不可視範疇原理(Invisible Category Principle)を提案している。
  - (i) Invisible Category Principle
 

A closed category B with positively specified feature C<sub>i</sub> may remain empty throughout a syntactic derivation if the C<sub>i</sub> (save possibly B itself) are all alternatively realized in a phrasal sister of B. (Emonds(1987:615))
- 6 Aoun and Li (2003)は(i)を挙げ関係節の主要部が裸名詞句副詞の場合なぜ前置詞が残らないのかについて事実を指摘している。
  - (i) a. the way<sub>i</sub> that you talk t<sub>i</sub>
  - b. \*the manner/fashion<sub>i</sub> that you talk t<sub>i</sub>
  - c. You talked that way.
  - d. \*You talk that manner/fashion.
 この要因について彼らは関係節の主要部が裸名詞句副詞である際何らかの再構築の可能性を示唆しているものの、明確な解決案を出していない。

- 7 Larson(1987)は裸名詞句副詞ではない[-F]の名詞を主要部とする関係節においては必ず前置詞が存在している、と主張しており、以下のように前置詞が残留していない場合においても(i)のプロセスを仮定している。

- (i) By 1999, I will have lived in [[{every/ some}city]<sub>i</sub> that John has lived [<sub>e</sub>]<sub>i</sub>]  
 [-F]  
 (ii) a. [<sub>S</sub> By 1999 I will have lived [<sub>PP</sub> in [<sub>NP</sub> every city that John has lived [<sub>PP</sub> e]<sub>i</sub>]]].  
 b. [<sub>S</sub> [<sub>NP</sub> Every city that John has lived [<sub>PP</sub> e]<sub>i</sub>] [<sub>S</sub> by 1999 I will have lived  
 in<sub>[NP e]<sub>i</sub>]]].  
 c. [<sub>S</sub> [<sub>NP</sub> Every city that John has lived [<sub>PP</sub> in<sub>[NP e]<sub>i</sub>]]] [<sub>S</sub> by 1999 I will have lived  
 [<sub>PP</sub> in<sub>[NP e]<sub>i</sub>]]].</sub></sub></sub>

Larson は前置詞の復元は May(1985)の数量詞繰り上げが関わっているものとし、S 構造である(ii a)に数量詞繰り上げが適用されて(ii b)となり、さらに(ii c)が(i)の正しい解釈になる、と主張している。

- 8 Chomsky(1986)では、S 構造で付与される構造格(対格・主格)、そして D 構造で付与される内在格(属格・斜格)とを区別している。
- 9 領域の定義に関する詳しい解説に関しては中村他(2001)を参照のこと。
- 10 なお日本語においては「何曜日のスピーチ」「どこでの出会い」などのように疑問詞が名詞を修飾する可能性が残されている。
- 11 (40b)の非文法性は、ひとつの構成素からの抜き出しが不可能であるという点で Ross (1967)で提案された左枝条件に関係するものと予測される。

(i) 左枝条件

もしある NP<sub>i</sub> が、より大きな NP<sub>j</sub> の左側の構成素である場合、NP<sub>i</sub> を NP<sub>j</sub> の外側へ取り出すことはできない。

左枝条件(i)は(ii a-b)を排除することが可能である

- (ii) a. \*Whose<sub>i</sub> did you see [<sub>t<sub>i</sub></sub> wife's guard]?  
 b. \*[Whose wife's]<sub>i</sub> did you see [<sub>t<sub>i</sub></sub> guard]?  
 c. [Whose wife's guard]<sub>i</sub> did you see <sub>t<sub>i</sub></sub>?

参考文献

- Aoun, Joseph, and Yen-hui Audrey Li(2003) *Essays on the representational and Derivational Nature of Grammar*. Cambridge, Mass.: the MIT Press.
- Arimura, Kaneaki(1989)“Adverbial  $\theta$  -role Assignment and Case,” *English Linguistics* 6 : 72-89.
- Barss, Andrey and Howard Lasnik(1986)“A Note on Anaphor and Double Objects,” *Linguistic Inquiry* 17: 347-354.
- Chomsky, Noam (1986) *Knowledge of Language. Its Nature, Origin and Use*. New York: Praeger
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: the MIT Press.
- Chomsky, Noam and Howard Lasnik (1993) “The Theory of Principles and Parameters,” In Joachim Jacobs, Armin von Steinfeld and Theo Vennemann, eds., *Syntax: An international hand book of contemporary research*. Berlin: de Gruyter
- Emonds, Joseph E (1987)“The Invisible Category Principle,” *Linguistic Inquiry* 18: 613-632.

- Kobayashi, Ken'ichiro (1987) "A Note on Bare-NP Adverbs," *English Linguistic* 4: 336-341.
- Larson, Richard K (1985) "Bare-NP Adverbs," *Linguistic Inquiry* 16: 595-621.
- Larson, Richard K (1987) "Missing Prepositions" and the Analysis of English Free Relative Clauses," *Linguistic Inquiry* 18: 239-266.
- Larson, Richard K (1988) "On the Double Object Construction," *Linguistic Inquiry* 19: 239-266.
- Larson, Richard K (1990) "Double Object Revisited: Reply to Jackendoff," *Linguistic Inquiry* 16: 595-621.
- May, Robert (1985) *Logical Form: Its Structure and Derivation*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- McCawley, James D (1988) "Adverbials NPs: Bare or Clad in See through Garb?," *Language* 64: 583-590.
- Nakajima, Heizo (1987) "On the Case Adjacency Condition," *Linguistic Analysis* 17: 186-199.
- 中村 捷, 金子義明, 菊地朗(2001) 『生成文法の新展開』. 東京: 研究社.
- Radford, Andrew (2000) "NP-shells," *Essex Research Report in Linguistics* 33: 2-20.
- Ross, John R (1967). *Constraints on variables in Syntax*. Doctoral dissertation, MIT, Cambridge, Mass.
- Stroik, Thomas (1990) "Adverbs as V-sisters," *Linguistic Inquiry* 21: 654-661.
- Suzuki, Hidekazu (1987) "Noun Phrases as Adverbials (in Japanese)," *Studies in Language and Cultures* no. 22: 29-46.

## 甲南英文学会規約

- 第1条 名称 本会は、甲南英文学会と称し、事務局は、甲南大学文学部英語英米文学科に置く。
- 第2条 目的 本会は、会員のイギリス文学・アメリカ文学・英語学の研究を促進し、会員間の親睦を計ることをその目的とする。
- 第3条 事業 本会は、その目的を達成するために次の事業を行う。
1. 研究発表会および講演会
  2. 機関誌『甲南英文学』の発行
  3. 役員会が必要としたその他の事業
- 第4条 組織 本会は、つぎの会員を以て組織する
1. 一般会員
    - イ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）の修士課程の在籍者、学位取得者、および博士課程・博士後期課程の在籍者、学位取得者または単位修得者
    - ロ. 甲南大学大学院人文科学研究科（英語英米文学専攻）および甲南大学文学部英語英米文学科の専任教員
    - ハ. 上記イ、ロ以外の者で、本会の会員の推薦により、役員会の承認を受けた者
  2. 名誉会員 甲南大学大学院人文科学研究科（英文学専攻、英語英米文学専攻）を担当して、退職した者
  3. 賛助会員
- 第5条 役員 本会に次の役員を置く。会長1名、副会長1名、評議員若干名、会計2名、会計監査2名、編集委員長1名、幹事2名。
2. 役員の任期は、それぞれ2年とし、重任は妨げない。
  3. 会長、副会長は、役員会の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
  4. 評議員は、第4条第1項イ、ロによって定められた会員の互選によってこれを選出する。
  5. 会計、会計監査、編集委員長、幹事は、会長の推薦を経て、総会の承認によってこれを決定する。
  6. 会長は、本会を代表し、会務を統括する。
  7. 副会長は、会長を補佐し、会長に事故ある場合、会長の職務を代行する。

8. 評議員は、会員の意志を代表する。
9. 会計は、本会の財務を執行する。
10. 会計監査は、財務執行状況を監査する。
11. 編集委員長は、編集委員会を代表する。
12. 幹事は、本会の会務を執行する。

第6条 会計 会計年度は4月1日から翌年3月31日までとする。なお、会計報告は、総会の承認を得るものとする。

2. 会費は、一般会員については年間5,000円、学生会員については2,000円とする。

第7条 総会 総会は、少なくとも年1回これを開催し、本会の重要事項を協議、決定する。

2. 総会は、一般会員の過半数を以て成立し、その決議には出席者の過半数の賛成を要する。
3. 規約の改定は、総会出席者の2/3以上の賛成に基づき、承認される。

第8条 役員会 第5条第1項に定められた役員で構成し、本会の運営を円滑にするために協議する。

第9条 編集委員会 第3条に定められた事業を企画し実施する。

2. 編集委員は、編集委員長の推薦を経て会長がこれを委嘱する。定員は、イギリス文学・アメリカ文学・英語学各2名とする。編集委員長は、特別に専門委員を委嘱することができる。

第10条 顧問 本会に顧問を置くことができる。

本規約は、昭和58年12月9日より実施する。

この規約は、昭和62年5月31日に改訂。

この規約は、平成7年7月1日に改訂。

この規約は、平成11年6月26日に改訂。

この規約は、平成13年6月23日に改訂。

## 『甲南英文学』投稿規定

1. 投稿論文は未発表のものに限る。ただし、口頭で発表したものは、その旨明記してあればこの限りでない。
2. 論文は3部（コピー可）をフロッピーディスクと共に提出し、和文、英文いずれの論文にも英文のシノプシスを添付する。ただし、シノプシスはA4判タイプ用紙 65 ストローク×15 行（ダブルスペース）以内とする。
3. 長さは次の通りとする。
  - イ. 和文：ワードプロセッサ（40 字×20 行）で A4 判 15 枚程度
  - ロ. 英文：ワードプロセッサ（65 ストローク×25 行、ダブルスペース）で A4 判 20 枚程度
4. 書式上の注意
  - イ. 注は原稿の末尾に付ける。
  - ロ. 引用文には、原則として、訳文はつけない。
  - ハ. 人名、地名、書名等は、少なくとも初出の個所で原語名を書くことを原則とする。
  - ニ. その他については、イギリス文学、アメリカ文学の場合、*MLA Handbook*, 5th ed. (New York: MLA, 1999)（『MLA 英語論文の手引き』第5版、北星堂、2002年参照）に、英語学の場合 *Linguistic Inquiry style sheet* (*Linguistic Inquiry* vol. 24) に従うものとする。
5. 校正は、初校に限り、執筆者が行うこととするが、この際の訂正加筆は必ず植字上の誤りに関するもののみとし、内容に関する訂正は認めない。
6. 締切は11月30日とする。

## 甲南英文学会研究発表規定

1. 発表者は、甲南英文学会の会員であること。
2. 発表希望者は、発表要旨を A4 判 400 字詰め原稿用紙 3 枚（英文の場合は、A4 判タイプ用紙ダブルスペースで 2 枚）程度にまとめて、3 部（コピー可）をフロッピーディスクと共に提出すること。
3. 詮衡および研究発表の割りふりは、『甲南英文学』編集委員会が行い、詮衡結果は、ただちに応募者に通知する。
4. 発表時間は、一人 30 分以内（質疑応答は 10 分）とする。

---

甲 南 英 文 学

No. 19

平成 16 年 6 月 19 日 印刷

—非 売 品—

平成 16 年 7 月 3 日 発行

編集兼発行者

甲 南 英 文 学 会

〒658-8501 神戸市東灘区岡本 8-9-1

甲南大学文学部英語英米文学科気付

---